

— 茨城県土浦市 —

赤弥堂遺跡(東地区)

—— 県営畑地帯総合整備事業(担い手支援型) ——

坂田地区 埋蔵文化財発掘調査報告書

2009

土浦市教育委員会
有限会社勾玉工房Mogi

— 茨城県土浦市 —

赤弥堂遺跡(東地区)

— 県営畑地帯総合整備事業(担い手支援型) —

坂田地区 埋蔵文化財発掘調査報告書

2009

土浦市教育委員会
有限会社勾玉工房Mog i

序

土浦市は霞ヶ浦や桜川など、豊富な水資源に恵まれ、太古から人々が生活するのに適したところでありました。そのため、市内には集落跡や貝塚、古墳など数多くの遺跡が存在しています。このような遺跡は、当時の人々の生活や環境を知る手掛かりとなります。また、現代に生きる私たちが、豊かな生活を送ることのできる先人の業績でもあります。

このような貴重な文化財を保護し後世に伝えることは、私たちの大切な任務であり、郷土の発展のために大切なことであります。

この度、上坂田地区と下坂田地区において大規模な畑地帯総合整備事業が計画され、今年度は下坂田の赤弥堂遺跡など、記録保存を目的とした発掘調査が行われました。

調査の結果は本文に記載されているとおりですが、土浦の古代の解明に役立つことができれば幸いです。

最後になりましたが、調査から報告書刊行にあたり、関係者の皆様のご協力とご支援に対し厚く御礼を申し上げます。

平成 21 年 3 月

土浦市教育委員会
教育長 富永善文

例言

1. 本書は茨城県土浦市下坂田（旧新治村）1,350—1 外に所在する赤弥堂遺跡（東地区）の発掘調査報告書である。
2. 調査は土浦市から委託を受けた有限会社勾玉工房 Mogi が実施した。
3. 発掘調査面積は 871m²である。
4. 調査期間は、平成 20 年 9 月 24 日より 11 月 11 日まで実施した。また、出土品の整理作業及び報告書の作成は、平成 20 年 12 月 5 日より開始し、同年 3 月 17 日まで実施した。
5. 発掘調査は現地調査を荒井英樹・長谷川秀久（発掘調査員）・大久保隆史（調査員補助）が担当した。整理作業は大賀健・大賀さつきが担当した。
6. 発掘調査の参加者は以下の通りである。（敬称略）

大塚慧市 中川茂之 山口豊 山藤直樹 小野豊 吉田みち 塚本芳枝 櫻戸徹 糸賀文子
中川裕 平林敬子 小角みや子 金塚暎 山崎・義 中川俊三 栗原孝 箱すよし
植木昭子 斉藤京子 長南節子 渡辺由美子 斉藤与志朗 中村薫 中島貞雄 中島秀雄
中島トミ子 市原チヨ 沖日出夫 露久保三郎 海老原龍生 高野正行 櫻戸洋子 高野和子
大賀智章 川口和之
7. 整理調査は有限会社勾玉工房 Mogi において行い、参加者は以下の通りである。

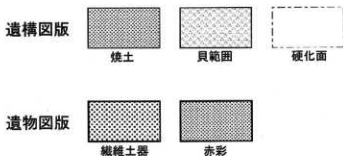
遺物基礎整理作業 篠原美代子 稲坂なお子 越川範子
遺物実測作業 大賀さつき 廣井さやか 木村春代 小山郷子 岩崎美奈子
デジタル編集 大賀智章 大賀文香
事務・経理 宇佐美薫
8. 本報告書に用いた遺構写真は、荒井英樹・大久保隆史が、また整理作業における遺物写真は、大賀健・大賀智章が撮影した。
9. 執筆分担

第 1 章第 1 節 黒澤春彦（上高津貝塚ふるさと歴史の広場学芸員）
第 1 章第 2 節 荒井英樹（有限会社勾玉工房 Mogi）
第 2 章第 1 節・2 節 関口満（上高津貝塚ふるさと歴史の広場学芸員）
第 3 章・第 4 章 大賀健（有限会社勾玉工房 Mogi）
10. 遺跡の航空写真は株式会社スカイサーベイに依頼した。
11. 本報告書に関わる出土品及び記録図面・写真は、一括して上高津貝塚ふるさと歴史の広場が保管している。
12. 本遺跡の略号は ASSE（赤弥堂遺跡東地区）とした。遺物の注記もこれに従っている。
13. 協力者
本遺跡の発掘調査から本報告書の作成に当たり以下の方々へ協力を賜った。ここに記して感謝の意を表すものである。（敬称略）

阿部芳郎（明治大学教授）西本豊弘（国立歴史民俗博物館教授）齋藤弘道 上守秀明 篠原正
林田利之 及川謙作 茨城県上浦土地改良事務所 土浦市産業部群地課 有限会社カワヒロ産業 佐々木建設株式会社 茨建航業株式会社 株式会社マツイ商会 株式会社スカイサーベイ

凡 例

1. 第1図は国土地理院2万5千分の1地図常陸藤沢を用いた。
2. 本遺跡の報告書に用いたスクリーンパターンは以下を表す。



3. 本遺跡において検出された遺構は5・6・8号住居跡、7号土坑、3～5・8～21号ピットは掘乱や根の痕であると判断したために欠番とした。従って、本報告書に於いても遺構番号の振替は行わず、調査時の番号のまままで報告している。
4. 遺物の注記に用いた略号は以下の通りである。
遺跡名 ASSE
住居跡 SI 土坑 SK 溝 SD ピット P
尚、貝塚は何れも住居内貝塚であったために、1号貝塚は1号住居跡(SI01)、2号貝塚は2号住居跡(SI02)、3号貝塚は3号住居跡(SI03)とした。
5. 本遺跡出土遺物の修復にはセメダインC及び樹脂材のエポキシレジン6113を用いた。
6. 本報告書における実測図は全体測量図500分の1、グリッド網図1,000分の1、遺構は60分の1、遺物は2分の1、3分の1、4分の1の縮尺で掲載した。尚、一部の遺構、遺物に変則的な縮尺を用いた場合には、スケールをもってその倍率を表した。
7. 本書における遺物写真の縮尺は、基本的に実測図の掲載に合わせているが、一部原寸縮小または拡大したものもある。
8. 堆積土層の観察及び遺物の色調については、『新版標準土色帖』2008年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所 色票監修を用いた。

目次

本文目次

序

例言

凡例

目次

第1章 調査に至る経緯と調査の経過

第1節 調査に至る経緯…………… (1)

第2節 調査の経緯…………… (1)

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境…………… (3)

第2節 歴史的環境…………… (3)

第3章 調査の方法と標準堆積土層

第1節 調査の方法…………… (7)

第2節 標準堆積土層…………… (8)

第4章 検出された遺構と遺物

第1節 検出された遺跡の概要…………… (10)

第2節 遺構外出土遺物

第1項 遺構外出土遺物の概要…………… (10)

第2項 遺構外出土遺物を基にした遺物の分類…………… (10)

第3節 検出された遺構及び遺構出土の土器

第1項 縄文時代

1 住居跡…………… (30)

2 土坑…………… (39)

3 炉穴…………… (44)

4 ビット…………… (45)

第2項 古墳時代

1 古墳…………… (46)

2 方形周溝墓…………… (49)

3 住居跡…………… (49)

4 土坑…………… (55)

5 ビット…………… (56)

第3項 中・近世

1 土坑…………… (57)

2 溝・道状遺構…………… (59)

第5章 まとめ

1 遺跡の概観と検出された遺構の所属時期…………… (63)

2 縄文時代前期の土器…………… (64)

3 翡翠製玉について…………… (64)

4 古墳時代前期の遺構…………… (64)

参考文献

写真図版

抄録

挿図目次

第1図	遺跡の位置と周辺の遺跡…………… (4)	第30図	1・2・3号炉…………… (45)
第2図	遺跡の地形とグリッド配置図 1/1000… (7)	第31図	1・2号ピット…………… (45)
第3図	標準堆積土層…………… (8)	第32図	1号古墳・出土遺物…………… (47)
第4図	遺跡全測図…………… (9)	第33図	2号古墳・出土遺物…………… (48)
第5図	遺構外出土遺物 (1)…………… (12)	第34図	1号方形周溝基出土遺物…………… (49)
第6図	遺構外出土遺物 (2)…………… (17)	第35図	1号方形周溝墓…………… (50)
第7図	遺構外山上遺物 (3)…………… (19)	第36図	4号住居跡…………… (51)
第8図	遺構外出土遺物 (4)…………… (21)	第37図	9号住居跡…………… (51)
第9図	遺構外出土遺物 (5)…………… (25)	第38図	11号住居跡…………… (52)
第10図	遺構外出土遺物 (6)…………… (29)	第39図	11号住居跡出土遺物…………… (53)
第11図	1号住居跡 (1号貝塚)…………… (29)	第40図	13号住居跡…………… (53)
第12図	1号住居跡 (1号貝塚) 出土遺物…………… (30)	第41図	7・14号住居跡…………… (54)
第13図	2・3号住居跡 (2・3号貝塚)…………… (32)	第42図	2号土坑…………… (55)
第14図	2号住居跡出土遺物…………… (33)	第43図	10号土坑…………… (55)
第15図	3号住居跡山上遺物…………… (33)	第44図	10号土坑出土遺物…………… (56)
第16図	10号住居跡…………… (34)	第45図	6・7・22・23・24号 ピット…………… (57)
第17図	10号住居跡出土遺物…………… (35)	第46図	5・6・8・9・11号土坑…………… (59)
第18図	12号住居跡…………… (36)	第47図	6号土坑出土遺物…………… (60)
第19図	12号住居跡出土遺物…………… (36)	第48図	9号土坑出土遺物…………… (60)
第20図	15号住居跡・14号土坑 ・14号土坑出土遺物…………… (37)	第49図	1号溝 A・B (道状遺構)…………… (61)
第21図	15号住居跡出土遺物…………… (38)	第50図	2号溝 (道状遺構)・出土遺物…………… (62)
第22図	3・4号土坑…………… (39)		
第23図	3号土坑出土遺物…………… (39)		
第24図	12号土坑…………… (40)		
第25図	12号土坑出土遺物…………… (40)		
第26図	13号土坑…………… (41)		
第27図	13号土坑出土遺物…………… (42)		
第28図	15号土坑…………… (43)		
第29図	15号土坑出土遺物…………… (44)		

表目次

表 1 周辺の遺跡一覧…………… (4)	表 8 2号古墳出土遺物観察表…………… (49)
表 2 遺構外出土遺物観察表…………… (29)	表 9 1号方形周溝竊冢出土遺物観察表…………… (49)
表 3 1号貝塚 A 地点貝組成…………… (31)	表 10 11号住居跡出土遺物観察表…………… (53)
表 4 1号貝塚 B 地点貝組成…………… (31)	表 11 10号土坑出土遺物観察表…………… (56)
表 5 2号貝塚貝組成…………… (33)	表 12 6号七竈出土遺物観察表…………… (58)
表 6 3号貝塚貝組成…………… (34)	表 13 9号上塚山出土遺物観察表…………… (61)
表 7 1号古墳山上遺物観察表…………… (47)	表 14 2号溝出土遺物観察表…………… (62)
	表 15 1-3号貝塚貝殻長幅分布表…………… (66)

写真図版

図版 1 1 赤弥堂遺跡東地区全景航空写真	2 7号住居跡セクション E→
図版 2 1 遺跡調査前全景	3 8号土坑セクション W→
2 1・2・3号住居跡(貝塚)全景	4 9号住居跡セクション E→
図版 3 1 機材搬入状況	5 同 炉
2 トイレ設置状況	図版 10 1 9号住居跡完掘全景
3 テント設置状況	2 10号住居跡完掘全景
4 遺構確認作業状況	図版 11 1 10号住居跡セクション E→
5 遺構検出状況 E→	2 同 遺物出土状況全景
図版 4 1 遺構確認状況中央部分	3 同 遺物出土状況 1
2 遺構確認状況中央部分から西側	4 同 遺物出土状況 2
図版 5 1 遺構確認状況西側	5 同 遺物出土状況 3
2 基本層序中央部南壁	6 同 遺物出土状況 4
図版 6 1 1号住居跡(1号貝塚)貝層検出状況	7 同 炉セクション S→
2 同 セクション N→	8 同 炉完掘状況
3 同 A 貝塚出土状況	図版 12 1 11号住居跡全景
4 同 A~D 貝塚出土状況	2 同 セクション
5 同 D 貝塚出土状況	3 同 ビット 1 セクション S→
図版 7 1 2・3号住居跡(2・3号貝塚)	4 同 ビット 3・炉セクション S→
2 同 セクション W→	5 同 ビット 4 セクション W→
3 同 セクション N→	図版 13 1 12号住居跡全景
4 2号住居跡 A・B 貝塚出土状況	2 同 セクション
5 同 B 貝塚出土状況	3 13号住居跡セクション 1
図版 8 1 2号住居跡 A 貝塚出土状況	4 同 セクション 2
2 3号住居跡貝塚出土状況	5 同 炉セクション
3 同 ビットセクション N→	図版 14 1 13号住居跡全景
4 4号住居跡セクション E→	2 14号住居跡全景
5 4号住居跡全景	図版 15 1 14号住居跡ビット 1 セクション
図版 9 1 7・14号住居跡、8号土坑完掘全景	2 15号住居跡遺物出土状況

- 3 15号住居跡・14号土坑全景
 4 同 セクション
 5 同 調査風景
- 図版 16 1 1号古墳全景
 2 同 セクション東側
 3 同 セクション西側
 4 同 セクション全体
 5 同 調査風景
- 図版 17 1 2号古墳全景 航空写真
 2 同 東側セクション
 3 同 西側セクション
 4 同 完掘E→
 5 同 航空写真撮影実施状況
- 図版 18 1 1号方形周溝墓全景
 2 同 南東セクション
 3 同 南西セクション
 4 同 北西セクション
 5 同 遺物出土状況
- 図版 19 1 1・2号土坑全景
 2 2号上坑セクションN→
 3 同 セクションE→
 4 3号土坑セクション
 5 同 完掘全景
- 図版 20 1 4号土坑
 2 5号土坑
 3 6号上墳確認状況(石塔検出状況)
 4 同 セクションS→
 5 同 人骨出土状況
- 図版 21 1 9号土坑
 2 同 セクション
 3 同 人骨出土状況近景
 4 11号土坑セクションS→
 5 同 完掘全景N→
- 図版 22 1 12号土坑完掘全景
 2 同 セクションW→
 3 同 遺物出土状況
 4 同 遺物出土状況近景
 5 13号上坑完掘全景
- 6 同 セクションSW→
 7 同 遺物出土状況
 8 15号土坑セクションE→
- 図版 23 1 15号上坑完掘全景
 2 同 遺物出土状況
 3 1・2号炉セクション
 4 同 完掘全景
 5 3号炉完掘全景
 6 1号ピット完掘全景
 7 2号ピット完掘全景
 8 6号ピット完掘全景
- 図版 24 1 7号ピット完掘全景
 2 22号ピット完掘全景
 3 1号溝(道状遺構)硬化面
 4 同 セクションN→
 5 同 完掘全景
- 図版 25 1 2号溝(道状遺構)全景
 2 同 セクションIN→
 3 同 セクション2S→
 4 3号溝セクション
 5 作業風景(杭打設状況)
- 図版 26 遺構外出土遺物(1)
 図版 27 遺構外出土遺物(2)
 図版 28 遺構外出土遺物(3)
 図版 29 遺構外出土遺物(4)
 図版 30 遺構外出土遺物(5)
 図版 31 遺構出土遺物(1)
 図版 32 遺構出土遺物(2)
 図版 33 遺構出土遺物(3)
 図版 34 遺構出土遺物(4)
 図版 35 遺構出土遺物(5)
 図版 36 遺構出土遺物(6)

第1章 調査に至る経緯と調査の経過

第1節 調査に至る経緯

1995（平成7）年2月、新治村（当時）教育長宛に茨城県土浦土地改良事務所から、坂田地区において県営畑地帯総合土地改良事業を計画しており、その予定地内の埋蔵文化財の有無について照会が提出された。現地踏査を行ったところ、包蔵地、貝塚、古墳群の存在が確認され、試掘確認調査が必要である旨を回答した。2002（平成14）年8月、茨城県土浦土地改良事務所から、埋蔵文化財の有無と遺跡が存在した場合の取扱についての照会が提出された。それを受け、同年11月に赤弥堂遺跡の北側について試掘・確認調査を行った。結果、埋蔵文化財は確認されなかった。

2006年、土浦市との合併後に計画が具体化し、6月に現地踏査、2007（平成19）年2月に赤弥堂遺跡の東側について、遺跡の範囲や密度、性格を把握するための確認調査を行った。翌2008（平成20）年3月には、赤弥堂遺跡の西側から事業区域西端の坂田峯の台古墳群にかけて試掘確認調査を行った。

試掘・確認調査の結果をもとに、茨城土浦土地改良事務所、土浦市産業部耕地課と協議を行い、道路となる箇所について、記録保存のための発掘調査を行うことで合意した。

2008年3月25日、茨城県知事と土浦市長とで覚書を締結し、同年7月、茨城県知事と土浦市長で協定書を締結した。

文化財保護法関連では、2008年6月17日付けで茨城県土浦土地改良事務所長より遺跡の発掘届（文化財保護法第94条）が市教育委員会に提出され、6月27日付けで茨城県教育長宛に進達した。発掘調査は有限会社勾玉工房 Mogi が実施することとなり、埋蔵文化財発掘調査の通知（文保法第92条）を、8月25日付けで茨城県教育長宛に進達した。

第2節 調査の経緯

1 発掘調査

平成20年9月24日 本日より調査を開始する。機材の搬入、テント設置、トイレ搬入等。調査前全景写真撮影を行う。教育委員会黒澤氏現地に調査の打ち合わせを行う。

10月2日 雨天続きで調査が中断していたが、本日より再開する。遺構検出作業を行う。

7日 遺構検出状況の写真撮影を行った後、1・2号古墳の掘り下げに着手。遺構調査に入る。平行してグリッド杭の打設を実施する。

9日 1・2号溝、1号方形周溝墓、4・12・13号住居跡、1・2号ピットの掘り下げに着手する。

15日 1号古墳の掘り下げを終了。終了写真撮影を行う。1号から12号までの住居跡調査に着手する。また、セクションの実測作業に着手。3号土坑、4号住居跡セクション、6号土壌遺物分布図の作成を行う。

16日 基本層序の観察坑を設ける。1号方形周溝墓の調査を行い平面図の実測に取りかかる。13号住居跡まで調査を進める。

20日 遺物包含層の調査を開始する。平行して各遺構のセクション写真撮影。2号古墳の実測を開始する。

23日 1・2・7・11・13号住居跡セクションの実測を行う。1・2号炉の調査を開始する。

28日 15号住居跡、1・2号溝、1号方形周溝墓、10号住居跡平面図作成。

31日 天気に恵まれ、写真撮影を中心に作業を進める。4号住居跡完掘全景、1・2・3・7・9・10・12・13・14号住居跡セクション、2・3・5・9号土坑セクション並びに完掘状況、1号溝、1号方形周溝墓完掘写

真を実施する。10・15号土坑掘削を進める。

11月4日 9・10・11・15号住居跡掘削継続。10号住居跡遺物出土状況並びに炉の写真撮影を実施する。

10日 全景写真の撮影を航空撮影で実施する。写真撮影終了後、貝塚の貝採取に取りかかる。各遺構の終了写真撮影を実施する。

11日 貝塚の貝採上げを終了。各遺構の個別写真並びに終了平面図の作成、住居跡掘り方調査を終了して、本地区の調査を終了する。同日、教育委員会より調査終了の確認を得る。

2 整理作業

平成20年12月5日 水洗い作業を開始する。平行して図面の整理、写真の整理を開始する。

10日 水洗いが終了した遺物より、注記作業に取りかかる。

25日 土器水洗い終了。貝の洗浄を開始する。

平成21年1月18日 注記作業を終了し、貝の洗浄が終了した分より任意サンプルを抽出し遺構別貝の計測作業にとりかかる。

25日 出土遺物の分類作業を開始する。

2月10日 遺物の選別を終了し、台帳を作成する。

11日 遺物接合、実測、採拓を開始する。遺物分類に平行して、遺物原稿の執筆を開始する。

25日 遺構図面修正を開始する。平行して遺物のデジタルトレースを開始する。

3月7日 報告書の編集を完了する。

8日 印刷屋へ入稿する。

10日 初項原稿の校正を実施する。

12日 2校原稿修正を行う。

17日 報告書刊行。教育委員会に納品する。

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境 (第1図)

赤弥堂遺跡は、土浦市下坂田1,350-1外に所在する。この遺跡の所在する土浦市は茨城県南地区のほぼ中央に位置し、北部には筑波山塊から南東に伸びる新治台地、中央部は古鬼怒川により形成された桜川低地(現在の桜川流域)、東部には霞ヶ浦の上浦入り、南部は筑波稲敷台地から成り立っている。周辺市町村としては市域の北部は石岡市と接し、北部から東部にかけてかすみがうら市と接する。西部はつくば市、南部は牛久市や稲敷郡阿見町と接している。

今回調査が実施された赤弥堂遺跡は、桜川北岸の標高26~27mの新治台地上の緑辺に位置している。この遺跡がある坂田地区は、およそ常磐自動車道の西側で国道125号の南側に広がる地域であり、市内でも有数の畑作地帯で、特に梨の栽培や花卉栽培が盛んに行われている。細かく見れば坂田地区の東側が下坂田、西側が上坂田となる。下坂田の集落は台地下に集まり、上坂田の集落はおよそ台地上にまとまっている。

第2節 歴史的環境 (第1図)

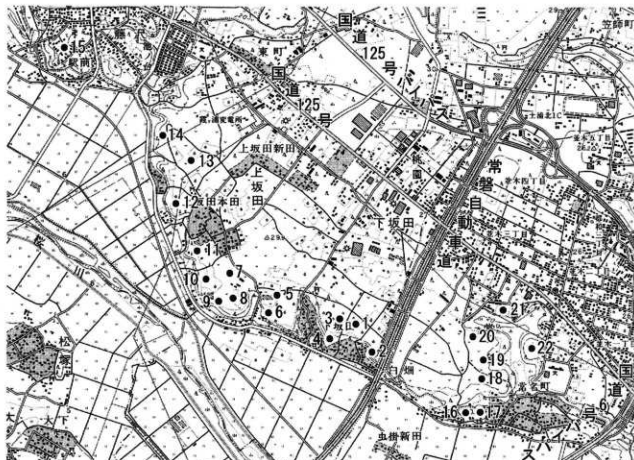
以下は、赤弥堂遺跡の周辺の遺跡で、試掘確認調査を含め調査のなされた遺跡を中心に取り上げ、時代順にその概要を述べてみたい。

旧石器時代 この時代の遺構が明確な遺跡は、山川古墳群(18)の第2次調査や神明遺跡(19)の第4次調査を除いて今のところない。特に前者では層位の異なる石器集中地点を3ヶ所確認した。これらの中、最も下層の石器集中地点からは台形礫石器や楔形石器が出し、周囲からは炉跡も確認された。同炉跡出土炭化物の年代測定を実施したところ、今から約3万2千年前のものであると測定された。市内でも最も古い石器集中地点の一例といえ、炉跡の確認と関連して興味深い事例といえる。

縄文時代 この時代の遺跡としては、赤弥堂遺跡(1)、馬場先貝塚(3)、中台遺跡・中台貝塚(5)、下坂田壩台遺跡(9)、上坂田寺裏貝塚(11)、上坂田貝塚(14)、神明遺跡(19)がある。中台遺跡・中台貝塚や上坂田貝塚は、筑波大学により踏査や確認調査等が実施された。前者では地点貝塚が環状に巡る様子が指摘され、ヤマトシジミを主体とする後期(加曽利B式期)の貝層が確認された。後者ではハイガイを主体とする前期(関山式期)の住居跡内貝層が調査された。神明遺跡では数次にわたる調査で、中期(加曽利E式期)の集落跡の存在が明らかになっている。同遺跡では中期(加曽利E式期)の土坑からサルボウやハマグリを主体とする地点貝塚が確認された。馬場先貝塚、上坂田寺裏貝塚についても、ハイガイを主体とする前期(関山式期)の地点貝塚とされ、坂田地区の台地上に前期の地点貝塚が広く点在する様子が理解できる。このほか、坂田地区における集落遺跡の展開状況について、本事業に伴う平成18・19年度の試掘確認調査や平成20年度の赤弥堂遺跡東・中央区の発掘調査によりその輪郭が明らかにされつつある。それは、前期の地点貝塚の点在以外に、中期の集落跡が濃密に広く展開することが指摘できる。また、中台遺跡・中台貝塚では中期から後・晩期に及ぶ地点貝塚を伴う集落跡が広く展開するといえる。

弥生時代 この時代の遺跡としては、山川古墳群(18)の第3次調査で住居跡2軒と、北西原遺跡(20)の第2次調査で住居跡が1軒調査されている。本事業の試掘確認調査の結果では、赤弥堂遺跡(1)の西側や下坂田壩台遺跡(9)で僅かながら弥生土器片が採集されているのみである。坂田地区から常磐自動車道を挟んだ常名地区にかけての台地上には、弥生時代の痕跡が非常に乏しいことが想定される。

古墳時代 この時代の遺跡は多く、特に古墳や古墳群の存在が特徴的であり、現状でも台地の緑辺に墳丘の



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡 1/25000 (国土地理院発行 1/25,000 に加筆)

表1 周辺の遺跡一覧

No.	遺跡名	時代						備考
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中世	
1	赤弥堂遺跡		○		○	○	○	H14・18・19年度試掘確認調査
2	石橋古墳				○			
3	馬場先貝塚		○					H18年度試掘確認調査、旧下坂田遺跡前貝塚
4	釈迦久保古墳群				○			
5	中台遺跡・中台貝塚		○				○	H2年度調査、H19年度試掘確認調査、旧下坂田貝塚
6	坂田台山古墳群				○			H19年度試掘確認調査
7	武者塚古墳群				○			S58年度調査、市指定史跡
8	下坂田塚台遺跡				○	○		H19年度試掘確認調査
9	坂田塚台古墳群				○			H19年度試掘確認調査
10	峯台館跡						○	
11	上坂田寺裏貝塚		○					
12	坂田立野古墳群				○			
13	塚原古墳群				○			
14	上坂田貝塚		○					S56～57年度調査、旧上坂田北館貝塚
15	藤沢城跡						○	
16	瓢箪塚古墳				○			産城
17	常名天神山古墳				○			H2年度測量調査、市指定史跡
18	山川古墳群	○	○		○	○		H17・15年度調査
19	神明遺跡	○	○				○	H9・13～15年度調査
20	北西原遺跡・北西原古墳群				○			H15～7・14年度調査
21	西谷津遺跡				○	○		H14年度調査
22	弁才天遺跡				○	○		H18年度調査、産城

残る古墳が比較的残り、古墳群を形成している。坂田地区には、石橋古墳(2)、釈迦久保古墳群(4)、坂田台山古墳群(6)、武者塚古墳群(7)、坂田塙台古墳群(9)、坂田立野古墳群(12)、塚原古墳群(13)があり、常名地区には常名天神山古墳(17)、過去に遷滅した籠塚古墳(16)、山川古墳群(18)、北西原古墳群(20)が存在する。石橋古墳に近接する今回の赤弥堂遺跡東区の調査でも墳丘の削平された古墳が検出され、本来は古墳群として存在するものといえる。坂田台山古墳群は3基の古墳からなり、第1号墳は昭和39年に國學院大學と十浦第二高等学校により発掘調査が実施された。武者塚古墳群は2基の古墳からなり、この内の武者塚古墳は昭和58年に筑波大学によって発掘調査が実施され、特異な形態の石室を持つ終末期の古墳であることが判明した。出土品には銀製帯状金具や飾太刀、そしてみずらも発見され、現在県指定考古資料となり、古墳自体は市指定史跡となる。坂田塙台古墳群は合計13基の古墳で構成され、第2号墳は通称「武具八幡古墳」とも呼ばれ、安政元年に武具類が出土し、その遺物と状況を記した古文書が現在も地元に残されている。第11号墳は本古墳群内最大のもので、全長およそ30mを測る前方後円墳であり、平成20年に筑波大学によって測量調査がなされた。このほかにも、本事業に伴う試掘確認調査で墳丘が削平された古墳が多数確認されている。坂田立野古墳群は4基の古墳からなり、塚原古墳群は2基の古墳からなる。常名地区の常名天神山古墳は全長90mの前方後円墳で、5世紀初め頃の古墳と想定され、現在市指定史跡となる。その北側に広がる山川古墳群では3次にわたる調査で、33基もの古墳が確認され、前期から終末期の古墳が検出された。その中でも20基を超す大小様々な前期の方墳群の存在は特筆される。そして、同一台地上のより北側には北西原古墳群が存在し、終末期の方墳4基で構成される。

この時代の集落跡としては、赤弥堂遺跡(1)、中台遺跡(5)、神明遺跡(19)、北西原遺跡(20)、西谷津遺跡(21)、弁才天遺跡(22)で確認されている。特に北西原遺跡を中心にその周辺の神明遺跡では数次にわたる調査で、100軒以上もの前期の竪穴住居跡が検出された。西谷津遺跡や弁才天遺跡でも同時代の集落跡が検出され、前期や後期の竪穴住居跡が目立って確認されている。

奈良・平安時代 この時代の遺跡としては、赤弥堂遺跡(1)、下坂田塙台遺跡(9)、西谷津遺跡(21)、弁才天遺跡(22)で確認され、竪穴住居跡によって集落跡が形成されている。遺構の時期が明確なのは西谷津遺跡や弁才天遺跡で、前者は8世紀前半から9世紀中葉まで継続する集落跡であり、後者は8世紀前半から9世紀後半までの竪穴住居跡60軒以上で構成される集落跡であることが確認され、掘立柱建物跡もまとめて検出された。弁才天遺跡は市内でも数少ない8世紀代の規模の大きな集落跡といえ、同期の多彩な出土遺物が出土している。出土遺物としては、銅製品として皇朝十二銭の一つである和同開珎、杏葉、帯飾りなどがあり、鉄製品としては匙や鐙先などが見られる。緑釉陶器や灰釉陶器も出土し、「億万」などと書かれた墨書土器も出土している。

中世以降 この時代の遺跡としては、赤弥堂遺跡(1)、中台遺跡(5)、峯台館跡(10)、藤沢城跡(15)、山川古墳群(18)、神明遺跡(19)がある。赤弥堂遺跡や中台遺跡の試掘確認調査では性格不明の溝跡や大型の掘り込みが確認され、内耳土器などが出土している。峯台館跡は台地縁辺部を区切るように土塁が明瞭に巡り、その中に存在する坂田塙台古墳群第11号墳も土塁の一部として利用されている様子が窺える。坂田地区の台地北西端と谷を挟んだ対岸には藤沢城跡がある。その範囲は明瞭ではないが、現在の藤沢集落の多くを含むものと思われ、その中には一部上屋や堀跡が残る。常名地区では山川古墳群の第2・3次調査や神明遺跡の第1・3・4次調査の成果で、東西長125mで南北長103mの方形の溝で囲まれた方形館跡と考えられる遺構が確認されている。方形の区画溝内には掘立柱建物跡、柱穴群、井戸跡、竪穴状遺構などが検出され、遺物は少ないものの鎌倉時代の上質土器小皿や竜泉窯系青磁の面花文碗や常滑産陶器片、銭貨が出土している。

このほか、近世が主体となる遺跡はないが、赤弥堂遺跡（1）、神明遺跡（25）などで溝跡や墓坑が確認されている。

参考文献

- 増田精一 編 1981『筑波古代地域史の研究—昭和54～56年度文部省特定研究費による調査研究概報—』筑波大学
新治村教育委員会 1986『図説 新治村史』
新治村教育委員会 1986『武者塚古墳』
前田 潮 編 1991『「古瀬ヶ浦河」沿岸貝塚の研究 昭和63年度～平成2年度文部省特定研究経費による調査研究概要—』筑波大学
土浦市教育委員会 1998『神明遺跡（第1次・第2次調査）—土浦市総合運動公園建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第5集—』
茨城県教育委員会 2001『茨城県遺跡地図』
土浦市教育委員会 2002『常名台遺跡群確認調査 神明遺跡（第5次調査）—土浦市総合運動公園建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第6集—』
土浦市教育委員会 2003『山川古墳群確認調査 西谷津遺跡 北西原遺跡（第6次調査） 神明遺跡（第4次調査）—土浦市総合運動公園建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第7集—』
土浦市教育委員会 2004『山川古墳群（第2次調査）—土浦市総合運動公園建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第8集—』
土浦市教育委員会 2007『山川古墳群（第3次調査）—土浦市総合運動公園建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第10集—』
土浦市教育委員会 2006『弁才天遺跡 北西原遺跡（第5次調査）—土浦市総合運動公園建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第4集—』

第3章 調査の方法と標準堆積土層

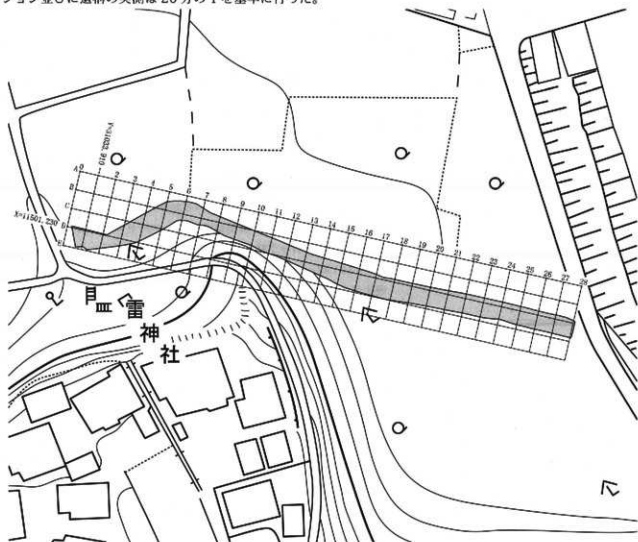
第1節 調査の方法(第2図)

発掘調査は、土浦市教育委員会において確認調査、並びに表土掘削作業が終了していたために、グリッド杭の打設並びに遺構確認精査作業より開始した。

グリッドは調査区域の形状が東西に長い道路幅であるために、道路の軸方向に合わせて、任意の5mグリッドを設定した。その呼称は南北方向に北から南にA・B・C・・・、東西方向は西から0・1・2・3・4・・・28グリッドとした。調査終了後に任意杭のD-1及びD-2杭に座標を取り付け、D-1が $X = 11501.230$ 、 $Y = 31033.910$ 、D-2が $X = 11497.194$ 、 $Y = 31036.850$ とした。尚、基準のBMはE-0グリッド横に26.802mで設定した後、調査区内に $BM1 = 26.700m$ 、 $BM2 = 26.800m$ 、 $BM3 = 27.700m$ の3カ所を設定し測量の基準とした。

遺構調査は東側より開始し順次西へと調査を進めた。当初予想されていた遺構は縄文時代住居跡6基(内3基は貝塚)、古墳2基、古墳時代前期住居跡1軒、時期不明大形土坑1基、炉1基、溝4条、包含層1カ所であったが、精査の結果、縄文時代住居跡5軒(貝塚3基)、古墳時代住居跡6軒、方形周溝墓1基、古墳2基、溝3条、炉跡3基、土坑14基、小ピット6基、遺物包含層1カ所が検出され、遺構の数は土坑を中心に増加した。

各遺構は確認後に全体での写真撮影を行った後にセクション用のベルトを残して掘り下げを行った。セクション並びに遺構の実測は20分の1を基準に行った。



第2図 遺跡の地形とグリッド配置図 1/1000

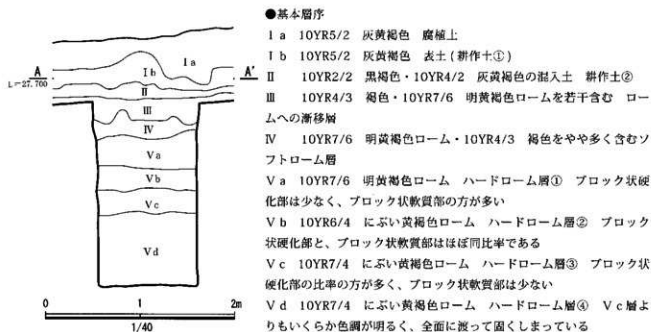
写真撮影は35mm白黒フィルム及びカラーリバーサルを用い行い、600万画素のデジタルカメラでの記録撮影も平行して実施した。遺物の取り上げは、覆土中のものは一括で取り上げ、床面直上の遺物については記録した後に取り上げた。

貝層は当初コラムサンプル採取を予定したが、覆土中に廃棄された貝の総量が比較的少量と判断されたために全量採取を行うことにした。従って、遺構は貝を残して掘り下げを進め、住居内に廃棄された貝層の範囲を記録した後貝の採取を行った。

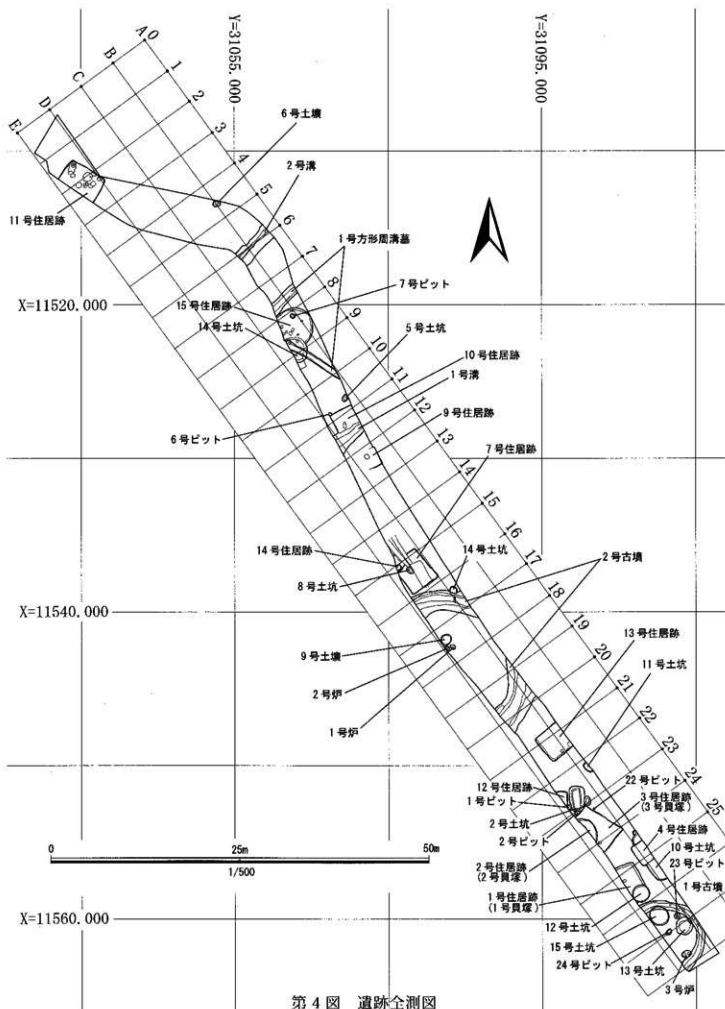
調査終了全体図は200分の1で実測を行い、終了の全景写真はラジコンヘリコプターによる空撮を実施した。

第2節 標準堆積土層(第3図 図版5)

本遺跡の標準堆積土層は調査区の中央やや東よりのC-22グリッド調査区域南側壁部分で行った。基本的な層序は全域にわたりほぼ同様で、表土層の下に旧耕作土層が確認され、その直下に第Ⅲ層ローム漸移層が確認されこの土層が遺構確認面となっている。第Ⅳ層のソフトロームまでの厚さはおよそ20cmを測る。以下Ⅴ層ハードローム層は締まりの状況及び色調からa～dまで4層に細分される。



第3図 標準堆積土層



第4図 遺跡全測図

第4章 検出された遺構と遺物

第1節 検出された遺跡の概要

上器・土製品・石器は次節に示すとおり、縄文時代草創期から縄文時代晩期にわたるもので縄文土器では関東地方の編年に即した遺物が満遍なく出土している。このことより、遺跡が縄文人にとって長期間に渡り好環境にあったことを物語っている。人々は縄文時代後半にほとんど姿を消している。続く弥生時代では遺物の出土が見られるが量的には少ない。古墳時代では前期に集落や方形周溝墓の存在が確認されており、再びその足跡を見ることができる。中期以降になると古墳が造られて古墳が群集化する傾向が見られる。しかしながら奈良・平安時代では全く遺物遺構ともに検出されず、再び確認できる時期は中世以降である。近世になり葎や道が造られ、崖下の集落から耕作地や稲域に向かうための道が造られたものと判断される。

第2節 遺構外出土遺物

第1項 遺構外出土遺物の概要

本遺跡より出土した遺物の礎及び五輪塔・宝篋印塔を除く遺物総量は104728.5gで、このうち縄文土器は64851.4gの出土があり、全体の61.9%に及ぶもので、ほぼ本時代を中心とする遺物が中心である。さらにサンプル採取を行っている為に全量の重量把握ができていない縄文時代前期の貝を含めると、縄文時代の遺物が全体の90%を超える分量となる。

弥生時代の遺物は1点のみ検出されているものの、明瞭な資料とはいえない。

続く古墳時代では、遺構出土の遺物では土師器・土製品・滑石製模造品があるが須恵器の出土はなかった。

奈良・平安時代の遺物はやはり明瞭な遺物の出土はない。僅かに常総型と思われる裏の細片が検出されているのみである。

中世では石塔類として五輪等の空風輪・水輪・宝篋印塔・かわらけが出土している。

近世の遺物では中世末から近世初頭と想定される志野焼皿1点と、陶磁器類が少量出土しているのみである。

出土した遺跡の概観を語る上で、次項で遺構外出土遺物を分類し、その分類を基に各遺構の位置付けを行う。

第2項 遺構外出土遺物を基にした遺物の分類

本遺跡を概観するにあたり、遺物の水洗い注記終了後に全遺物の分類を行った。これらの遺物を群・類・種別に分類し遺構外出土遺物をもって遺跡の内容を把握することにする。分類結果より本遺跡出土の遺物を代表する234点の遺物を抽出し、以下のように分類した。

第1群土器 縄文時代草創期

第1類 草創期井草式直前段階の上器

第2類 夏島式土器

第3類 その他の濠系文系上器群

第2群土器 縄文時代早期

第1類 出戸下層式土器

第2類 子母門式土器

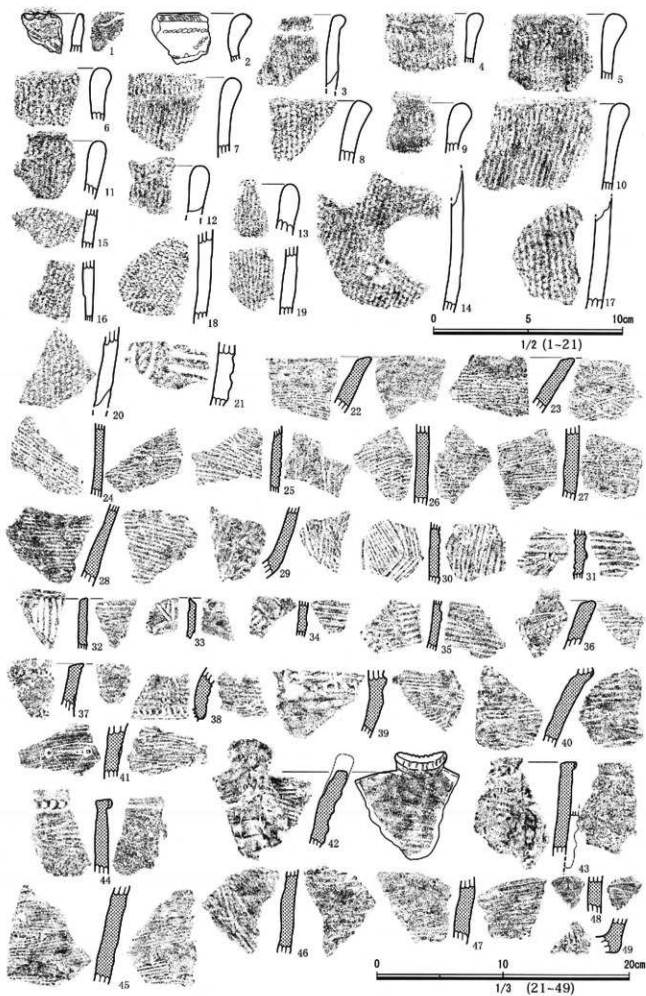
第3類 野島式土器

第4類 鶴ヶ島台式土器

第3群土器 縄文時代前期

- 第1類 関山Ⅰ式土器
- 第2類 関山Ⅱ式土器
- 第3類 黒浜式土器
- 第4類 浮島式土器
- 第5類 十三菩薩式土器
- 第4群土器 縄文時代中期
 - 第1類 五箇ヶ台式土器
 - 第2類 阿玉台式土器
 - 第3類 勝坂式土器
 - 第4類 中峠式土器
 - 第5類 加曾利E式土器
- 第5群土器 縄文時代後期
 - 第1類 堀之内式土器
 - 第2類 加曾利B式土器
- 第6群土器 縄文時代晩期
 - 第1類 大洞A式並行土器
- 第7群土器 土製品
 - 第1類 土器片鏟
 - 第2類 土製円盤
- 第8群 石器
 - 第1類 打製石斧
 - 第2類 磨製石斧
 - 第3類 石皿
 - 第4類 磨石
 - 第5類 凹石
 - 第6類 敲石
 - 第7類 軽石製石製品
 - 第8類 石叢
 - 第9類 剥片石器
 - 第10類 楔
 - 第11類 大珠
- 第9群土器 弥生土器
- 第10群 古墳時代の土器
 - 第1類 古墳時代前期
 - 第2類 古墳時代中期
 - 第3類 中期末用～後期初頭
- 第11群土器 中世
 - 第1類 かわらけ

- 第2類 陶器
- 第3類 石塔
- 第12群土器 近世
 - 第1類 陶磁器



第5図 遺構外出土遺物(1)

第1群土器 縄文時代草創期

第1類 草創期井草式直前段階の土器 (第5図 図版26)

a種 1・2

1は赤褐色を早し胎土が緻密で薄手の口縁部細片である。口唇部は指により擠まされたような整形を行うもので刻みを有する。勝田市原の寺遺跡出土遺物に類似する。口辺直下に僅かながら縄の側面圧痕らしき痕跡が観察される。無文系上器群・微隆起線文土器の可能性ある。口唇部の細片である為に明確ではないが、特殊な遺物であることより問題提起としてここに提示しておく。

2は胎土中には多量の白色粒子(石英・長石)が混入している。口唇部に異方向の縄文が施文され下位に斜方向の原体側面圧痕により文様構成を意図している。本遺物は形状及びその特徴から他の土器と明瞭に差異が認められるものである。類似するものとしては井草式直前段階の遺物の可能性がある。

b種 3・4

本種の土器は口縁部が外反し、口縁直下に指による押さえが観察される。器形は小形で器壁も薄い。胎土中には石英や長石の粒子を多量に混入する。3では口唇頂部に横方向の燃系が施文され、胴部には縦方向の燃系が施文される。4は口唇部にRLの縄文が施文され胴部には縄文が縦方向に施文される。やはり井草式直前段階の資料と判断される。

第2類 夏島式土器 (第5図 図版26)

a種 5～10

本種は口縁が僅かに外反肥厚する土器で、第2類の遺物とは異なり口唇直下の指による押さえは観察されない。燃系は口唇部にまで施文されるもので、異方向の縄文の施文もない。胎土は第2類a種の土器と同様に石英や長石の粒子を多量に混入する。口縁部の形状から判断して夏島式でも古い段階のものと判断される。6・7は断面形が丸みを帯びるが8のみ上端部が平坦になる。b種に含めるべきか、やや新しくなるものと考えられる。夏島1式土器を本類とした。

b種 11～13

本種は口縁部の外反が殆ど見られず、直口縁になる点が前種と異なる。縦方向の燃系の施文状況は前種と同様であるが比較的砂粒の混入は少なくなる。夏島式でも2段階に含まれるものと判断した。

第3類 その他の燃系文系土器群 (第5図 図版26)

a種 14～20

本類は第2類a・b種に伴う土器の胴部片である。縦方向の燃系が施文されるものであるが、15～16はやや薄手で砂粒の混入量が多い点より1類b種に伴う可能性がある。また、17～20はやや厚手となり器形もやや大形の深鉢と判断される。さらに砂粒の混入量もやや少なくなる点から第2類b種に伴う胴部片と判断される。

第2群土器 縄文時代早期

第1類 田戸下層式土器 (第5図 図版26)

a種 21

本種の土器は遺跡全体の遺物の中で1点のみ確認されている。21は所謂沈線文系の土器である。太い沈線により横位の平行線が描かれる。田戸下層式と判断した。

第2類 子母口式土器 (第5図 図版27)

a種 22・23

本種の遺物は口縁部が内削になるものである。何れも胴部には横方向の条痕が施文される。22では内面の条痕は浅く、23では口唇部に僅かな刻みが施され、内外面共に明瞭な条痕が施文される。胎土中には繊維の混入は微量で、特に23では白色の石英や長石・雲母を多量に含み繊維の混入は殆ど見られない。南関東地域における同時期の資料とは明らかに胎土の点で差異が認められる。

b種 24～29

第2類に伴う胴部及び胴部下半の資料である。24・25は23と同様の胎土で同一個体の可能性がある。29は尖底部の付近の破片で、想定される器形はやや細身と考えられる。

第3類 野島式土器 (第5図 図版27)

a種 30～35

胎土中に繊維の混入は殆ど見られない。何れも薄手の土器である。微隆起線により区画された内部に太い沈線が充填される。微隆起線が明瞭ではなく、沈線部分のみの構成となる33・35の破片もあるが、沈線が太く、繊細な手法より本類とした。やはり薄手で繊維の混入が殆ど見られないことから東北地域に於いて見られる、東北地方南部の榎木下層式段階の影響を受けるものと判断される。

第4類 鶴ヶ島台式土器 (第5図 図版27)

a種 36～41

胎土中の繊維はやや明瞭で、36・37は口縁部の破片で口唇部はほぼ平坦に面取られる。口唇直下に沈線により区画された内部に角棒状の工具により刺突列が加えられる。また、36・37・39では沈線、微隆起線の交点部分に円筒状の刺突が加わる。また、40・41は胴部に段を有するもので、段上には刻みが施される。

b種 42～49

42は吸盤状の突起を有する波状口縁の破片である。内外面に条痕を有し、突起部より垂下する沈線にこれを円形に取り囲む押し引き文が施文される。厚さがあり、繊維の混入は明瞭である。43・44は同一個体と考えられる。直立する口縁の上端部には刻みを有する隆帯が1条巡る。何れも繊維の混入量はやや少なく、砂礫の混入が多い。43には棒状の貼付文が垂下している。条痕は内外面共に浅い。常世式など東北地方の影響を感じさせる。45～48は胴部の破片である。内外面に条痕が施文され厚みがある。また繊維の混入も明瞭である。48には赤彩が施されている。49は底部の破片である。小形の平底で、外面には条痕が施文される。繊維は多い。本種の遺物は鶴ヶ島式土器でも後半段階の資料と考えられる。

第3群土器 縄文時代前期

第1類 関山I式土器 (第6・7図 図版27・28)

a種 50～52

口縁部の破片で、梯子状文様が描かれる。50は半截竹管による平行沈線を描いた後貝殻の復線によって刺突が加えられ梯子状の文様を構成させている。二ツ木段階の可能性も考えられるが、半截竹管の使用から関山式でも古い段階であろう。51・52は同様に半截竹管による平行沈線で梯子状の文様が描かれる口縁部の破片である。

b種 53・54

本種は口縁部の直下に隆帯が2条巡り、口縁部文様帯を画している。文様帯には梯子状の文様が半截竹管の平行沈線によって描かれる。関山I式土器でも古い段階に含まれるものであろう。

c種 55～61

本種は半截竹管による平行沈線を描いた後、刺突を加えて梯子状の文様を描くものである。55・58・60に

は円形の貼付文が付される。55～59では直線を斜方向に描く梯子状の文様で、60では羊角状の曲線が描かれる。地文は無い。61では胴部の屈曲部に梯子状の文様が刻まれている。56・61では多段の環付末端(以下ループ文)が描かれる。56は4段のループ列の下に単節RLの縄文が施文される。58では文様部分に地文はなく胴部に単節LRの縄文が施文される。59では無節LとRLの縄文が施文され羽状を構成している。61では梯子状文様の下位に多段のループ文が施文されるもので、上2列が左方向のループ、下5段が右方向のループと同一個体でループ文の施文方向を変えている。関山I式土器でもやはり古い段階と判断される。

d種 62～65

本種は半截竹管により平行沈線を描くものであるが前種の手法とは異なり、爪形状の刺突押し引き文が加わるものである。何れも口縁部の破片で62～64は波状口縁となる。62では口唇部には刻みが施されている。何れも梯子状の文様により菱形文を構成させるもので、62～65では円形の貼付文が付される。62では文様帯の下位に左方向のループ文が多段にわたり施文されている。いずれも文様帯部の破片である。

e種 66～68

66・67は接合資料である。68も同一個体の可能性がある。波状を早する口縁で、波頂部には貼付文風の刻みが施される。口縁部文様帯はなく、地文の上に口縁部付近のみに縦長の楕円形貼付文が施される。地文にはRLおよびLRの縄文を横帯施文させ、羽状を構成させている。関山I式土器と判断される。

f種 69～73

本種は半截竹管により曲線及び直線をあわせて描く土器である。69は口縁部の破片で地文にループ又は結節縄文が施文され円形の貼付文が施される。70は平縁の口縁で円形の貼付文が口唇部に付けられている。浅鉢若しくは台付の鉢形土器の口縁部であろうか、円形の文様を直線で放射状に連結させ、端部は羊角状に屈曲させている。地文には単節RLおよびLRの羽状縄文を施文している。71は胴部の破片である。平行沈線により羊角状の文様が描かれる。地文は器面が剥落して明瞭ではないが、複節の縄文が施文されている可能性がある。72は70同様の円形分文から放射状に平行沈線が連結される。地文には前々段合燃LRL(R)の縄文が施文される。73は円形文から平行線が連結される部分の小破片である。地文には縄文が施文されるが判読できない。関山I式段階である。

g種 74～76

本種は半截竹管による平行沈線を直線的に描くもので、曲線は用いられない種である。74は口縁直下に1条の沈線が巡り、直下に斜方向の平行沈線が描かれる。地文には0段多条のRLと無節Lによる羽状の縄文が施文され、縄文を区画するようにコンパス文が上下2段に描かれる。75では鋸歯状の平行沈線が描かれる地文には右と左のループ文が2段に施文され一部に0段多条のLR縄文が観察される。76はやや屈曲して内傾する口縁部の破片である。口縁部に沿って2条(3本)の平行沈線が巡り、屈曲部以下は斜方向の平行沈線が描かれる。地文には前々段合燃LRL(R)の縄文が施文される。関山I式段階の資料と判断している。

h種 77～83

コンパス文を施文するものを本種とした。77は口縁部の細片である。口唇直下にコンパス文が描かれる。地文は前々段合燃LRL(R)の縄文が。78・79は同一個体と判断される深鉢形土器胴部の大破片である。コンパス文が描かれ、地文には0段多条のRLと単節LRの縄文を横方向に交互に回転施文させ菱形の構成を行っている。78の下位にはループ文が描かれる。80は胴部屈曲部の大破片である。屈曲部の中央部分にコンパス文を横方向に描き、上下にこれを挟むように多段のループ文を施文する。上半では無節Lの縄文、下半では単節RLとLRの縄文が羽状に施文される。81は円筒状の器形を呈する小形の土器である。口縁直下にはループ

文が3段左・右・左と方向を変えて施文される上半部には0段多条のRL及び単節のLR縄文が羽状に横施文される。さらに下位にループ文を1条配した後、0段多条RLが施文される。胴下半にはコンパス文が1条巡る。82は屈曲部の破片である。屈曲部に4段のループ文が左・左・右・右の順に施文され、以下に0段多条のRL縄文が横方向に幅広く施文される。同文下半の最大径部分にコンパス文が横走する。83は胴部下半の接合部分の破片である。ループ文、0段多条のRL、2段のループ文、コンパス文の順に施文され、ループ文の下に右巻RR左巻LL組紐文が回転施文される。

本種の遺物はコンパス文の多用、組紐文の出現等から関山I式新段階の資料と判断される。

1種 84～95

縄文及びループ文のみを施文する一群を本種とした。84は口縁部の破片である。左方向のループ文が4段にわたり施文されている。85は直立気味の口縁部破片である。端部に環状のループを有する単節LR縄文を7段にわたり丁寧に横回転施文させている。施文の幅に変化をもたせることにより、下位に多段のループ状の効果を出している。86は円筒状の胴部破片である。単節LRと0段多条の縄文を交互に配し、菱形の効果を出している。原体の幅は3cm程でやや幅広く平行に施文される。縄文帯の間には3段右・左・左のループ文が施文される。87は0段多条のRL及び同じく多条のLRを交互に配し菱形の効果を出すもので、端部に環状の処理を行っていない縄が用いられている。88は87同様に0段多条の縄によって菱形を構成するが、下半に端部を環状に処理した縄の端部を回転施文することによりループ状の文様を描出している。89は同様の0段多条の縄文を羽状に施文する胴部片である。端部に繊維束の圧痕が見られ端部自巻きの痕跡と考えられる。90は0段多条の縄文を羽状に施文するものであるが、上のLRの端部、下のRLの端部がそれぞれ環状に処理されたものが重なるように施文されており、結束縄文的な雰囲気を出している。91は僅かに外反気味に開く口縁部の破片である。口唇部直下よりRLの細かな単節縄文が粗く施文されている。92は平縁の口縁部の破片で、瘤条の突起が付される。口縁直下に単節RLとLRの縄文を羽状に施文する。89同様の繊維束の圧痕が見られ、端部自巻の縄が用いられる。RLの縄は上端部が環状の処理が行われている。93は太いRLの単節縄文が全面に施文され、口縁直下に以上のループ文が巡る。94・95は外反気味に開く口縁部の破片である。何れも口縁直下に無文部を有するもので、94では末端を環状に処理した単節RL、95では単節LRの縄文が施文される。関山I式の古段階より新段階に渡る資料が含まれるものと判断される。

1種 96

結節縄文を施文する破片である。補修孔が穿たれている。結節文は端部が閉じた8の字の縄を用いるもので仮称結節回転B(上守2009)と称されるものである。3段にわたり施文され、1段ずつ方向を変えて4段にわたり施文されている。二ツ木段階から関山I式古段階に多く見られることが指摘されており、本遺物も関山I式の古段階の資料と判断される。

第2類 関山II式土器 (第7図 図版28)

a種 97

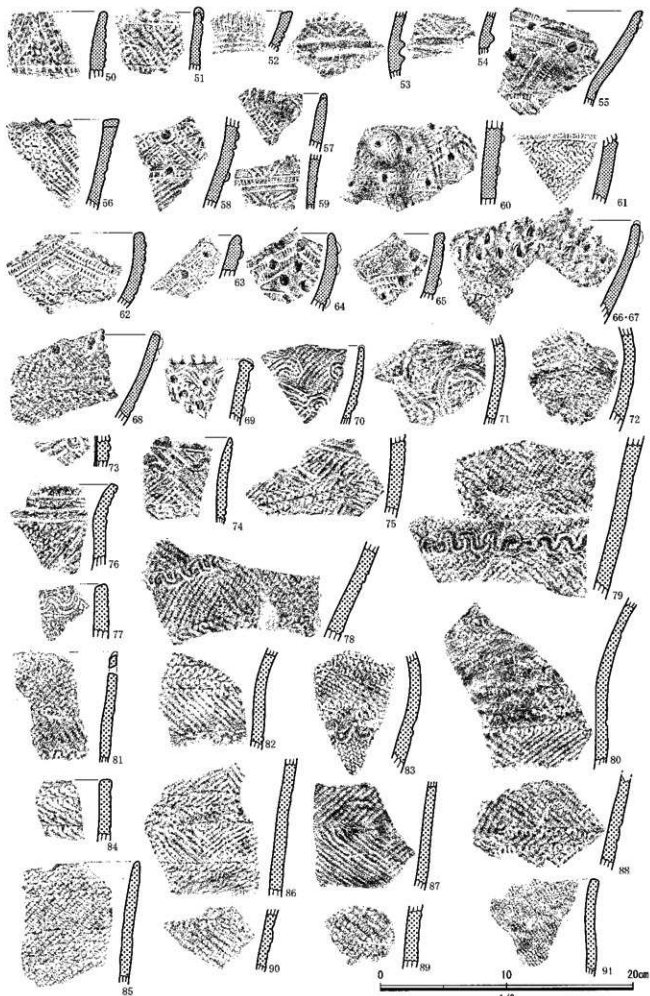
胴部が大きく括れるタイプの土器。括れ部にループ文が配される。下半には単節LR、上半には単節RLとLRの縄文により羽状構成を行う。器形より関山II式とした。

b種 98

平縁の口縁で地文にLRの単節縄文を施した後に半截竹管により口縁直下に鋸歯状文様が描かれる。

c種 99

波状口縁を呈し双角状の突起を有する。縄文は単節RLの縄文が斜方向や縦方向に施文される。縄文の施文



第6图 遺構外出土遺物(2)

状況より関山Ⅱ式とした。

d種 100

胴部細片である。単節 RL 及び LR の縄文が羽状に施文された後、棒状工具による刺突列が 4 条施文される。同様の類別が不明であるが、縄文が小さく不鮮明な点より関山Ⅱ式に含めた。

e種 101～104

片口を有する土器を本種としてまとめた。101 は片口部の下端にまでループ文が施文され、半截竹管による鋸歯文が描かれる。102 は c 種に見られるような不規則で小粒の縄文が施文される。103 は片口部周辺に条線状の工具により鋸歯状の文様が浅く描かれる。104 は 102 同様の縄が施文される。片口部を有する器形より本種は関山Ⅱ式段階とした。

f種 105～110

組紐文を多用する土器群を本種とした。105・106 は右巻 LL 左巻 RR、107・108 は右巻 RR 左巻 LL である。109 は 0 段の条を用いる右巻 ll と左巻 rr と判断される。(山内は 0 段の縄を用いるものについての表記を示していないが、円筒式にその存在があることを述べている。) 110 は 105・106 同様の右巻 LL 左巻 RR の組紐を用いるもので、胴部括弧部分にはコンパス文が 1 条巡らされている。組紐文の多用から関山Ⅱ式にしたが、110 はやや古くなる可能性がある。

g種 111～118

直前段合摺の上器を本種とした。111 は口縁部の破片である。1 段で LR と RL の縄を L に撚ったもの(以下 LLR・RLL・RRR・LLL と表記する)である。112 は胴部の破片である。111 と逆方向の直前段合摺 RLL の縄である。113 は LRR 直前段合摺の縄と RLL 直前段合摺縄を交互に施文し羽状を構成している。114 は口縁部の破片で 111 と同様であるが、0 段多条の縄を用いている。115 は RRR、LLL の縄を用いて羽状を構成する。113 と同様であるが 0 段多条の縄を用いている。116 は LLL の縄を用いるものであろうか表面が剥落して明瞭ではない。付加条第 2 種の可能性もある。117 は上半に付加条第 2 種の縄を、下半には RLL の直前段合摺の縄文を配し、羽状を構成させている。118 は細片のために明瞭ではないが付加条第 2 種の可能性がある。本種の遺物は関山Ⅱ式段階の資料と判断される。

h種 119・120

櫛歯状工具による流水文状の文様を描くものである。横位の条線により区画帯を設け同一の工具によって流水文を充填させている。119 では 2 段の流水文が、120 では 1 段が観察される。119 では地文は観察されない。120 では単節 RL の縄文がやや斜方向に施文される。いずれも櫛歯の単位は 4 本 1 単位と判断される。胎上中の繊維及び器面の調整は関山段階の資料と大差なく同時期の資料と判断した。

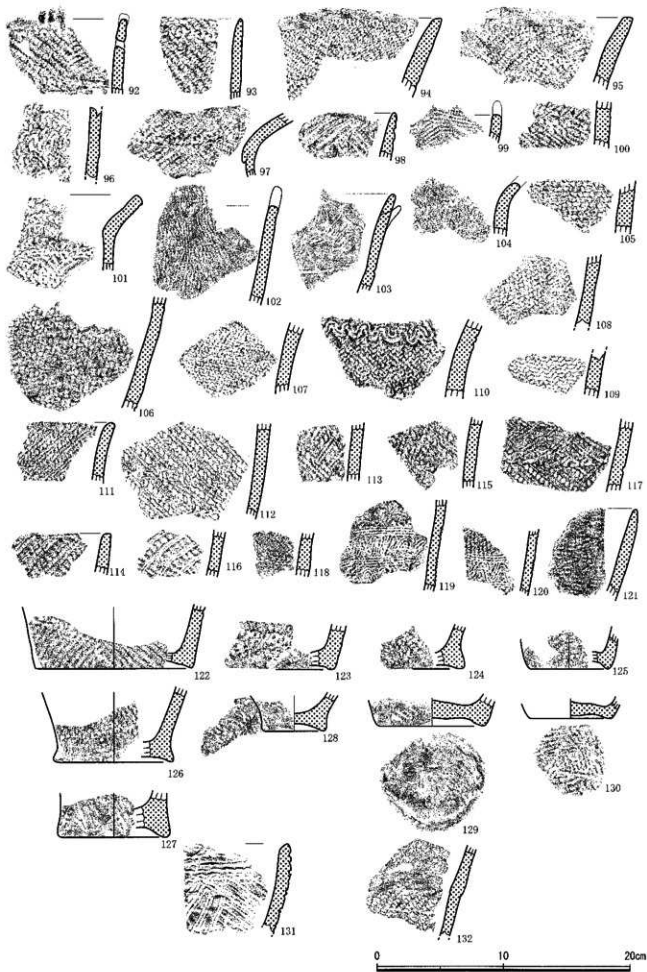
i種 121

やや内湾気味に立つ深鉢の口縁部破片である。ハイガイ等の筋脈のある貝殻の復縁を刺突して擬似縄文的な文様を構成する資料である。繊維の混入量は微量で、器面はサンドイッチ状に丁寧に整形されている。

j種の資料とした底部の 128 と同一個体と判断される。

j種 122～130

第 3 群 1・2 類の土器の底部破片資料である。122・123 は 0 段多条の縄文により羽状構成を行う資料である。端部の突出はなく底部は上底状となる。124 は 2 群 g 種の底部で下端がやや突出し、直前段合摺の RLR が施文される。125 はやはり g 種の資料である付加条第 1 種の縄文が施文される。下端部の突出は見られずや上底になる。126 は下端がやや突出し上げ底状になる底部である。胴部には右巻 LL 左巻 RR の組紐が施文される。



第7图 遺構外出土遺物(3)

127は下端の突出は見られない。上底状で胴部下端部に半截竹管による鋸歯状の文様が描かれる。128は胴部下端の突出は弱く、上げ底状になる。本類1種の遺物同様で、ハイガイの復縁が刺突され擬似縄文的に表現されている。129はやや大形の底部破片で、僅かに上底になる。器面の剥落が激しいが、0段多条の縄文が僅かに観察される。130は円形に破損した底部の破片で、0段多条の縄文が全面に回転するように施文される。

第3類 黒浜式土器 (第7図 図版29)

本類と明確に判断される資料は極めて少ない。繊維を混入する土器群の大半は前類の遺物と判断されるもので、僅かに本類の初頭と想定される遺物が2点検出されているのみである。胴部の細片の中に本期の遺物が含まれる可能性もあるが、未使用となった大半の繊維混入土器は前類の遺物と判断している。

a種 131

口縁部の破片である。内面の整形がやや粗い。外面には半截竹管による平行線が4条巡った後、以下は肋骨文を意識するように斜方向に平行沈線が粗く引かれる。地文は観察されない。

黒浜1式と判断される。

b種 132

胴部下半の接合部の破片である。接合部の上半に破先端の鋭い沈線によって格子目文が描かれる。接合面より下には単節LRの縄文が施文され、接合前に縄文が施文されている。関山Ⅱ式から黒浜1式にかかる遺物と判断される。

第4類 浮島式土器 (第8図 図版29)

a種 133

緩やかに外反する口縁部の破片である。口唇部直下に原体の側面圧痕が2条に渡り押圧され、下半に縷糸状の縄が僅かに観察される。胎土中には繊維の混入は見られず、口唇部の整形も指の圧痕が残るなど早期以前の資料の可能性もあるが、胎土の状況と器形より本類に含めた。浮島1式と判断した。

b種 134・135

変形爪形文を横方向に施文するもので、地文はない。爪は120でやや幅広となる。121は2列の変形爪形文が横走するもので幅はやや狭い。胎土は何れも砂質で焼成は良好である。浮島2式と判断される。

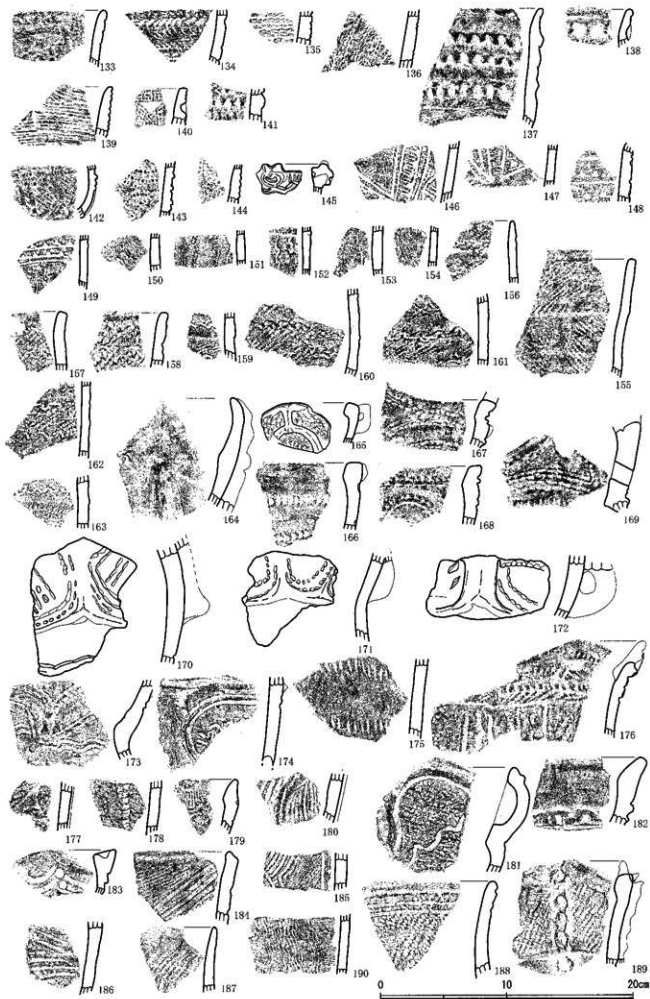
c種 136～138

136・137は口縁直下に棒状工具による刺突列を有するもので、口縁部文様帯は簡素になる。138は同様の遺物胴下半部の破片であろう。肋脈のある只覆復縁により支点を交互に変換させて鋸歯状の文様を施文している。焼成はb種同様に良好で、胎土中には砂の混入が目立つ。浮島3式と判断した

第5類 十三罎捉式土器 (第8図 図版29)

a種 139～145

139は集合沈線を描く波状口縁の破片である。細い平行沈線による菱形の文様を構成させる。文様部の下端には三角形の印刻文が刻まれている。140は集合沈線を描いた間隙に三角形の印刻文を充填させる口縁部の破片である。141は三角形の印刻文が上下に段に連続施文されるもので、地文はない。本類に含めたがやや下る可能性もある。142～144は結節浮線文を施文するものである。142は口縁部直下の文様部の破片であろう。大きく内湾する破片である。地文に単節RLの縄文を施文した後、結節浮線文により楕円形の区画を設け内部に縦方向の結節浮線文2条を垂下させている。143・144は同一個体の可能性のある細片である。地文に集合沈線を密に描き、結節浮線文により曲線を描くものである。中部高地に見られる嘴ヶ峰式土器の影響を感じさせる土器で、雲母の混入が目立つ。145は小突起部の破片である。鋸歯状の文様及び口唇部に縦方向の沈線が



第8図 遺構外出上遺物(4)

描かれている。胎十・焼成より本種に含めた。

第4群 土器 縄文時代中期

第1類 五領ヶ台式土器 (第8図 図版29)

a種 146～149

146は沈線により幾何学文様を描き、沈線に沿って三角形の印刻文を刻んでいる。蓮状文様に類似する。147はやはり沈線による幾何学的な文様を描き、三角形の区画体の内部に三角形の印刻文を充填させている。148・149は横位の沈線を描き、沈線に沿って三角形の印刻状の刺突を加えるものである。149の胴部には縦方向にZ字状の結節文が施文されている。何れも薄手で147・149では砂粒の混入は少なく雲母もあまり目立たない。148は多量の砂が混入され、雲母の混入も明瞭である。五領ヶ台式でも前半期に位置付けられるものであろう。

b種 150～154

何れも胴部の細片で縦方向のZ字状の結節縄文が縦方向に施文される。154では同様の結節縄文が縦方向に2条施文され、条間にLRの縄文が縦方向に施文される。本類は同類a種の胴部破片であろう。

c種 155～163

155～158は口縁部の破片である。155・156・159などで口縁部直下に折り返しが観察され、口縁部はほぼ直立する器形となる。155では幅広の折り返しが観察され、LRの縄文が縦方向に施文される。155以外では横方向のZ字条結節文様を施文する特徴を有する。前種の遺物が縦方向の結節紋の施文に対して縦方向に施文される本種は所謂下小野式と称される。五領ヶ台式土器の一地方形式と考え本類の中にも含めた。159～163は胴部の破片である。同様の結節文が横走る。何れも薄手の土器で焼成は良好である。また、胎上中の砂粒も少ないが僅かながら雲母の混入が目立っている。

第2類 阿玉台式土器 (第8図 図版29)

a種 164・165

164は大波状口縁を呈する土器で波頂部より縦方向の棒状の隆帯が垂下する。隆帯の断面は三角形でやや尖る。165は断面がややかまぼこ状の隆帯が円形に配され、橋状の把手が隆帯から波頂部に連結される。また、隆帯によって区画された内部には角押文が全面に充填されている。阿玉台I b式と判断される。

b種 166～174

口縁に窓枠状の区画帯を有し隆帯に沿って複数の角押文が施文される一群である。隆帯はかまぼこ状や方形に近いものもある。169は大波状の把手部分で中心に円孔が穿たれる。174は胴部下半の資料で断面かまぼこ状の隆帯が曲線を描いて垂下する。阿玉台II式と判断される。

c種 175

胴部下半の破片である。篋状の文様がへら状の工具による刺突列へと形態化するものである。b種の胴部破片と判断される。阿玉台II式の資料であろう。

第3類 勝坂式土器 (第8図 図版29)

a種 176～179

176は小形の深鉢で波状口縁となる。口縁部直下には刻みを有する隆帯が曲線を描いて貼付けられ、胴部上半部の文様帯と下半部を画している。下半は無節と思われる縄文を地文にし、太い沈線が2条垂下する。上半には同様の短沈線による刺突列が加わる。177は蛇行する組状隆帯が貼付けられ、隆帯上にはRLの縄文が施文されている。178は無節の縄文を地文とするもので、角押文が縦方向に垂下している。179は渦巻状の幅広の

貼付文上にキャタピラ状の刺突列が加わる。本種は勝坂式の範疇で捉えた。

b種 180

断面方形の降帯が曲線を描き貼付され、降帯に沿って太い沈線が描かれる。胎土中には砂粒が多く、雲母の混入が目立つ。色調は赤褐色を呈する。勝坂式後半の焼町類型に酷似するもので本種として区別した。

第4類 中峠式上器 (第8図 図版29)

a種 181・182

181は深鉢形土器の突起部分の破片である。口縁に沿って降帯が巡り、突起の内側には円形の窪みが穿たれている。外面はRLの縄文が口縁直下から胴部にかけて施文され、頸部付近に太い沈線によって波状文が描かれる。胎土中には雲母の混入が顕著で砂粒も多い。阿玉台式最終段階に類似する部分が見られる。182は深鉢の口縁部破片である。口縁部は幅広い無文帯を有し、頸部にクランク状の貼付文が描かれる。内面には段を有す。勝坂式又は大木7b式の影響を感じさせる上器で、何れも中期中峠式と判断した。

第5類 加曾利E式土器

a種 12・13・15号土坑出土遺物 (第9図 図版30)

キャリパー形を呈し、口縁部文様帯が二重降帯によって区画され、文様部には渦巻き文と剣先状の文様が描かれる。加曾利EⅠ式占段階土器である。

b種 210・211

本種は加曾利EⅠ式新段階の土器とした。明瞭な遺物の検出は無い。中期の遺物とした大量の遺物の中で胴部の幅広い摩り消し懸垂文を有する遺物は掲載資料の他には認められていない。僅かに2点出土しているがいずれも土器片鏝であった。

c種

加曾利EⅡ式を本種とする。本種の遺物は明確に確認されていない。

d種

加曾利EⅢ式を本種とする。本種の遺物も明確に確認されていない。

e種

加曾利EⅣ式を本種とする。本種の遺物も明確に確認されていない。

第5群土器 縄文時代後期

第1類 堀之内式土器 (第8・9図 図版29)

a種 183

183は口縁部に棘帯状の無文部を有し、波頂部に円形の刺突文が施される。深鉢の口縁部細片である。堀之内Ⅰ式中段階と判断される。

b種 184～186

184は朝顔形の深鉢口縁部破片である。口唇端部には1条の沈線が巡り、波頂部に向かって沈線が斜方向に描かれる。185・186は深鉢の胴部破片である。直線で区画された内部に「く」の字の平行沈線が充填される。堀之内Ⅰ式新段階と判断される。

c種 187～190

187は外反して開く口縁の破片で、口縁部直下は無文となり、以下上半部には単節LRの縄文が施文される。188は外反する口縁部の破片で、地文に単節LRの縄文を配した後、口唇直下に3条の沈線が巡る。口縁は平縁である。189は胴部で屈曲した後開く深鉢の口縁部破片であろう。波状口縁を呈し、波頂部は双頭にわれ頂

部より指で押えられた隆帯が垂下する。地文には単節 LR が施文され、括れ部には沈線が巡っている。190 は胴部の破片で櫛歯状の工具により波状文様が縦方向に描かれる。堀之内 2 式古段階と判断される。

d 種 191・192

191・192 は同一固体と判断される。大きく外反気味に開く胴部の破片で器壁は薄い。平行沈線による幾何学的な文様を描き内部に LR の縄文を充填させている。堀之内 2 式新段階の遺物である。

第 2 類 加曾利 B 式土器

a 種 193・194 (第 9 図 図版 29)

193 は鉢形若しくは台付鉢の口縁部破片であろう。口唇頂部は平坦に面取られた後、中央に沈線が 1 条巡らされる。口縁部直下は丁寧な横方向のナデが行われ、以下は単節 RL の縄文が施文される。194 は小形の鉢の口縁部であろう。口縁部は直角に屈曲して外反する。口唇直下に 1 条の沈線が巡り、以下に帯縄文が施文される。195 は胴部がソロバン形に張る鉢形を呈する土器の肩部付近の破片と判断される。曲線により区画された内部に単節 LR の縄文が充填される。無文部はよく磨かれている。加曾利 B2 式土器と判断した。

b 種 196

196 は弧形を呈する土器の胴部の破片と判断される。弧線により区画された内部に LR の縄文が充填施文され、無文部は良く磨かれている。加曾利 B3 式から曾谷段階と判断される。

c 種 197

197 は浅鉢形土器の口縁部は片であろう。口縁部は屈曲して立ち、口辺部に 2 条の沈線が巡る。口縁の内面には太い沈線による段を有している。胴部は無文であるが磨かれる。形式が不明であるが胴部の磨きなどから、加曾利 B 式の後半段階の資料と推定した。

第 6 群土器 縄文時代晩期

第 1 類 大洞 A 式並行土器 (第 9 図 図版 29)

a 種 198

本遺跡の中で晩期と判断された資料は本遺物 1 点のみである。薄手で浮線文により工字文が描かれる。内傾する破片で、小形の甕又は鉢の口縁直下又は肩部の破片と判断される。色調はやや暗い灰色を呈する。千網式、又は荒海式段階の資料と判断されるが細片で他に供伴遺物もなく明瞭ではない。

第 7 群土器 土製品

第 1 類 土器片鍾 (第 9 図 図版 30)

a 種 199～202

本種の遺物は方形に近く周辺の整形を殆ど行わないもので、長軸側に紐掛けの溝を切っている。201・202 は破損している。ために片側の切り込みのみ確認される。用いられる土器は 201 がやや古い第 2 群の土器の可能性もある。その他は第 4 群 3 類の阿玉台式土器が用いられている。

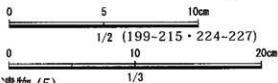
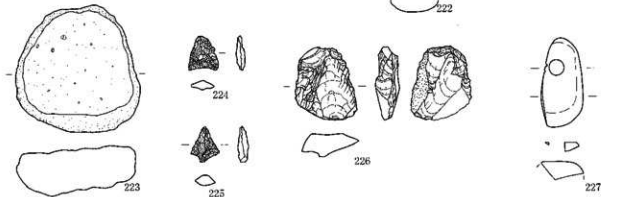
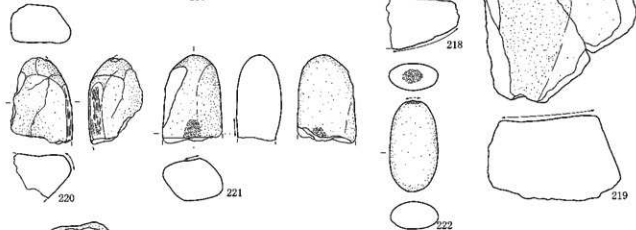
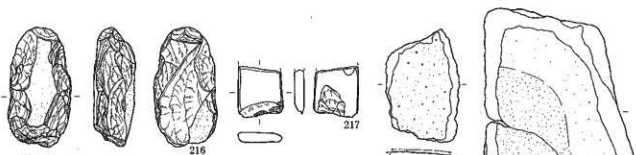
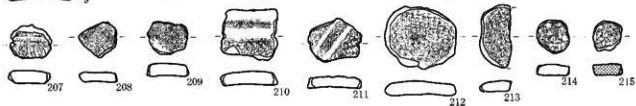
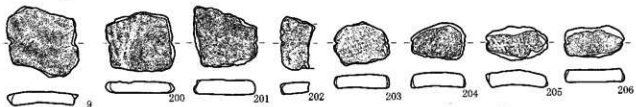
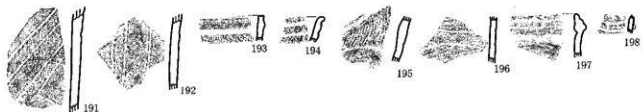
b 種 203～206

楕円形に近く全体が荒く整形されている。長軸が短軸に対して極端に長くなるものである。切り込みは何れも長軸側に切り込まれていて阿玉台式と判断される第 4 群の土器が用いられている。

c 種 207～209

小形の円形を呈し、周縁の整形はやはり殆ど行われない。長軸側に切り込みを設けている。やはり第 4 群の土器を用いているようである。

d 種 210・211



第9図 遺構外出土遺物(5)

a種とb種の中間の大きさで、210は方形の破片で周縁の整形は行っていない。211は楕円形に近い形状で僅かながら周縁の整形を行っている。何れも長軸側に切り込みを有す。中期後半の土器片で本遺跡の遺構外出土遺物としては確認できなかった加曾利E式の遺物が用いられている。

第2類 土製円盤

a種 212・213 (第9図 図版30)

短軸側が4.5cm前後とやや大形で、周縁が削られて楕円形を呈する。212は完形で胎土中に砂礫を多く含む第2群の土器が用いられ、213は半分に欠損するが、第4群の土器が用いられている。

b種 214・215

直径が2～3cm程度の小形の円盤である。周縁の整形は比較的良好に研磨されている。214は器面に三角連続文が施文される第3群第4類の浮島3式土器が用いられている。215は器面に0段多条の羽状縄文が残っており、胎土中に繊維を含む第3群1・2類の関山式土器を利用している。

第8群 石器 (第9図 図版30)

第1類 打製石斧 216

本類の遺物はC-27グリッドに於いて1点、遺構では1号住居跡で1点検出されている。216自然の礫を素材にするもので剥離面は側面から粗雑に行われている。断面の形状は厚みのある楕円形で、打製石斧としての機能的にはあまり良好なものとは言えない。石材には凝灰岩である。石材的にも打製石斧に適するものではない。尚、15号住居跡出土遺物は、側面に加工痕が認められないことより種類の別類扱いにした。

第2類 磨製石斧 217

本類の遺物は1点のみの出土であった。扁平な自然礫の先端部及び側面を部分的に研磨し整形している。刃部は片面のみ研磨が行われており、片刃となる。素材には片岩質の石材(緑泥片岩カ)を用いている。形状的には縄文早期の第2群の上器に伴う遺物の可能性が想定される。

第3類 石皿 218・219

本類は石皿で、2点の出土が確認されている。218は多孔質安山岩で上面及び下面が磨かれている。破損した端部の破片で全体の形状は不明である。219は花崗岩を素材にするもので、中央の機能部分は僅かながら浅い皿状に凹む。中央部分が楕円形によく研磨された試用部分が広がっている。左側は破損して欠損している。従って本遺物も全容は不明である。

第4類 磨石 220

本遺物は凝灰岩を素材とする磨石である。熱により破損しており、全体は不明であるが、断面が三角形の石材を意図的に用い、側面の三角形の頂部を機能面としている。遺物は縄文早期第2群の土器に伴うものと判断される。

第5類 凹石 221

本遺物は砂岩を素材とするもので、所謂扁平な楕円形を呈する凹み石とは異なる。自然礫をそのまま使用するものであろうか、側面の整形はほとんど見られず表皮のままである。断面が楕円形で棒状の素材を用いている。凹み部分は折損部分に僅かながら確認され、表裏両面に凹みが確認出来る。裏面の凹みは僅かである。

第6類 敲石 222

本遺物は砂岩を素材とするもので、楕円形の自然礫の端部をハンマーとして用いている。端部には敲打による潰れが観察される。その他は加工痕は見られない。被熱痕が見られる。

第7類 軽石製石製品 223

本類の遺物は1点のみ確認されている。多孔質で気泡の抜けた孔が多数見られる安山岩を素材にするもので、表面に察痕が観察される。軽石製石製品として呈示した。

第8類 石 鏝 224・225

224は本遺物は黒曜石製の石鏝である。凹基三角鏝で基部側は僅かに凹む。側縁は内湾するもので、全体に正三角形に近い。225はメノウ製の有萐石鏝である。側縁は外反するもので、萐部は短く突出する。逆し部はやや突出するタイプである。このタイプの石鏝は晩期の所産である可能性がある。

第9類 剥片石器

遺構外での掲載ではない、15住居跡出土26がある。素材は頁岩で縦長の剥片である。打点は表皮側で、腹面の左側にも表皮を残す。側面に僅かながら刃部の摩滅が観察されることより、使用痕のある剥片と判断される。

第10類 楔 226

226は剥片を利用する石器である。プラットホームはほぼ平坦で、上端より剥がされているが、背面には下方向からの剥離が観察され、尚かつ打点を取り除くための剥離が試みられている。結果的にはプラットホームの除去はできていないが、縦長の剥片の両極から剥離を加えていることより楔の可能性が高い。材質は珪質頁岩である。

第11類 大 珠 227

227は翡翠の大珠である。調査区の中央付近、7号住居と切りあう(3号溝)カクラン部分で出土している。確認調査時に検出されたものである。小形の鏝節型と判断され、穿孔は管籥状の工具によりほぼ垂直に穿たれている。熱を受けて破損しており、表面の研磨が剥落して白濁した状況を呈する。しかし、光に透かしてみると薄緑色の鑑識を呈し、良質の石材が用いられていることがわかる。意識的に熱を加えたものか判断できないが、破砕した後に破損部の端部を僅かながら磨いている。残存は縦4.6cm、横2.2cm、厚さ0.9cm、孔径0.8cm、重さ13.4gを測る。熱による破損については、上野(2007)によって論考が示されている。表面が白濁して表面の粉状化が看守される点から、上野分類では類型1B種でLevel3～4段階になるものであろう。尚、細かな表面観察では、破損部分の表面にも細かな粉状化が見られた。節理面に沿った破損の後に研磨を行い、再生を試みている。その後、熱が加えられているものと判断される。

尚、供伴する遺物も無くその時期については明確にはできない。従来に於ける、大珠の出土事例では、中期加曾利E式後半に伴う資料が多い傾向にあるが、7号住居は阿玉台Ⅱ式段階と判断している。本遺物の所属時期は所謂大型の鏝節型とは異なる小形の大珠であり、中期後半の資料とはやや異なるものであろう。中期中葉に伴う可能性がある。

第9群 土器 弥生土器 228

本遺跡から出土した弥生式土器は、228の1点のみである。壺形土器の頸部付近の破片で、加曲部に補強帯状の隆帯が1条巡る。器面の剥落が激しく整形は不明である。胎土は砂粒を多く含み、金笠母の混入が目立つ。縄文土器の第4群土器の胎土に酷似する。型式不明。

第10群 古墳時代の土器

第1類 古墳時代前期

本類の遺物は遺構から検出された僅かなものであった。遺構が検出されている割には遺物量は少ない。

第2類 古墳時代中期

本類の遺物は、古墳の周溝から出土した高杯の脚部片のみである。

第3類 古墳時代中期末葉～後期初頭 229

本遺物は遺跡内の表採品である。滑石製模造品の有孔円板である。1/3を欠損している。扁平な板状を呈し、上下両面共に研磨される。直径1mm程の孔が2孔対峙して穿たれている。模造品の形状から中期末から後期初頭の遺物と判断される。

第11群 中世

第1類 かわらけ (第10図 図版30)

a種 230

本種の遺物は2点の出上が確認されているが、形状のわかる1点のみ提示した。直径5cmほどで器高も1.2cmと小形のものである。底部は平底でロクロ整形により回転糸切りされ無調整である。体部は短く内湾気味に立つもので、薄く尖る。16世紀以降の遺物と判断される。

第2類 陶器 (第10図 図版30)

a種 231

16世紀後半の志野焼の皿である。内外面に白色の長石釉が全体にかけられている。底部は削り高台で体部は緩やかに内湾気味に開く。

第3類 石塔 (第10図 図版30)

a種 232

上面が円形に整形され、下端が平らになる。当初五輪塔の水輪と考えたが、下端部が平坦になることより、傘塔の傘の可能性もある。材質は花崗岩である。直径22.5cm、厚さ9cm、重量は7500gを測る。

b種 宝篋印塔

遺構外からの出上はない。6号土坑から1点出土している。

c種 五輪塔

遺構外からの出土はない。やはり、6号土坑から1点出土している。

第12群土器 近世

第1類 陶磁器 (第10図 図版30)

a種 233

素焼きの陶器で押鉢と判断される胴部の破片である。焼成は極めて良好で、黒斑等の焼痕は見られず、窯で焼かれた製品と判断される。胴部に墨書が観察される。国構であろうか文字が書かれているものの、判読はできない。市教育委員会で実施した確認調査資料の中に同一個体と判断される同遺物の底部資料がある。底部は砂目で、挿鉢状を呈する。

b種

近世陶磁器を本種とした染付磁器や陶器がある。染付の呉須は合成コバルトを用いるもので近世の以降の遺物と判断されるものである。2号溝出土遺物1がある。

以上本遺跡より出土した遺物について12群に分けて説明した。これを基に以下遺構出土遺物について説明を行う。

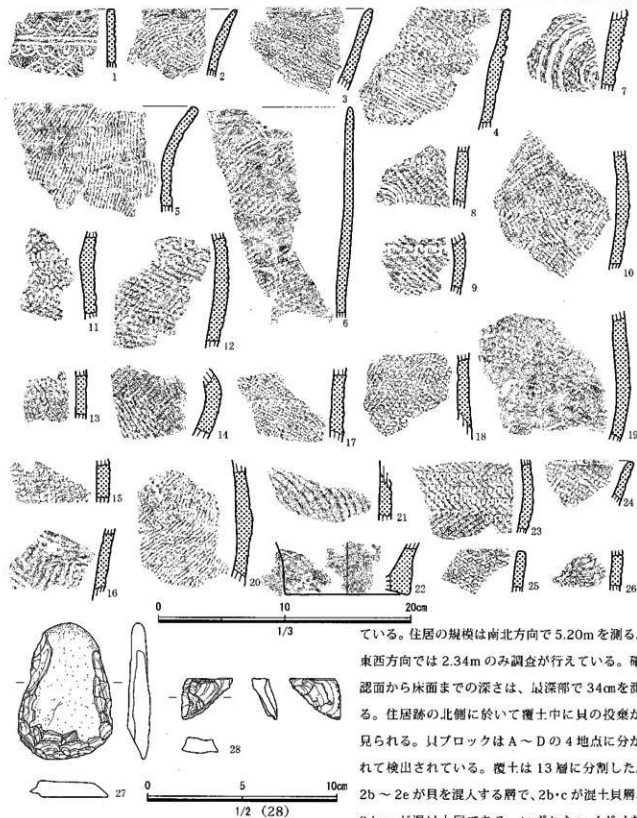
第3節 遺検出された遺構及び遺構出土の土器

第1項 縄文時代

1 住居跡

1号住居跡(1号貝塚) (第11・12図 図版6・31)

本住居跡はC-25 グリッドに於いて検出された。南西側が調査区外に延びているために全容は捉えられていないが、おおむね方形を呈するものと判断される。また、南側には12号上坑が重複しており、本住居を切っ



ている。住居の規模は南北方向で5.20mを測る。東西方向では2.34mのみ調査が行えている。確認面から床面までの深さは、最深部で34cmを測る。住居跡の北側に於いて覆土中に貝の投棄が見られる。貝ブロックはA～Dの4地点に分かれて検出されている。覆土は13層に分割した。2b～2eが貝を混入する層で、2b・cが混土貝層、2d・eが混貝土層である。いずれもハイガイを主体とするもので、貝層の堆積は明らかに人為

第12図 1号住居跡(1号貝塚)出土遺物

的なものであるが、その他の堆積は自然堆積の様相が看守される。このことは、住居の覆土がある程度堆積した窪地に貝を投棄したことが想定され、4地点の貝層と住居跡には時間差があることを示唆するものである。

床面はほぼ平坦で、豊溝並びに柱穴は検出されていない。中央部分に炉が2基検出されている。楕円形を呈し環形に連結している。掘り込みは浅い皿状を呈するもので、火床面はよく焼けている。

出土遺物は土器としておよそ3029.9g検出されている。このうち縄文早期の遺物が83g、中期の遺物が218.1g混入している。中期の遺物は12号土坑の遺物が混入したものであろう。

本住居跡に伴う遺物としては土器26点、石器2点について呈示した。1・2は口縁部の破片である。1～8は口縁部の破片である。1・2は口縁直下に半截竹管によるやや間延びしたコンパス文が描かれる。第3群第1類f種、3は直交する半截竹管が描かれる。第3群第2類b種の遺物、4は口唇部に沿って角棒状の工具による刺突列が加わるもので、同2類d種に含められるもので、口縁部が極端に湾曲していることから、片口部付近の破片であろう。5・22は粗紐が回転施文されるものである。同類f種の遺物である。6～8は縄文のみが口縁部に施文されるもので、6・7では無飾、8では付加条の縄が施文されている。9～24は胴部の破片である。9・10は半截竹管による曲線文様が描かれるものである。第3群第1類f種であろうか、18は同2類g種の遺物である。梯子状文様や点付文を有する資料は検出されていない。25は細片で混入遺物と判断しているが1類j種の結節縄文である。26は底部の破片である。下端部への縄文施文は行われぬ。

本遺構出土遺物は1類の岡山I式土器を少量含むものの、主体は第3群第2類の上器群と判断されるもので、岡山II式の遺構と判断した。出土した石器は2点で27は小形の打製石斧である。扁平な円鏝を素材にするもので基部側と上下両面には大きく表皮を残している。側面は剥離が行われ、片面からの剥離を主体に剥がすもので、片刃状を呈する。掘削的な使用を行った可能性がある。石材は砂岩である。熱を受けた可能性があり部分的に赤変している。28は石核である。小形の剥片を剥ぎ取っている。素材はチャートである。おそらく石鏝の製作に関わる石核と考えられる。

検出された貝は全量を採取し、土嚢袋で112袋を数える。このうち全量の10%について水洗・分類を試みた。この結果、ハイガイ、マガキ、オキシジミ、ハマグリ、ヤマトシジミ、の6種類が検出されている。汽水域のヤマトシジミは僅かに7点で大半が鹹水域産の貝類である。その大きさ別の組成は表14にまとめた。飛幅が計測できなかったものも含め種類別の割合は第3・4表にまとめた。尚、水洗いを全量行ったものではないが、魚骨・骨角器等の検出は無かった。

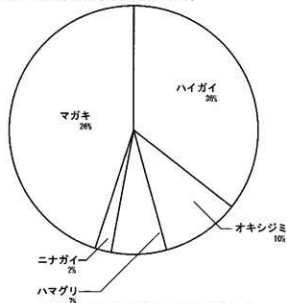


表3 1号貝塚A 地点貝組成

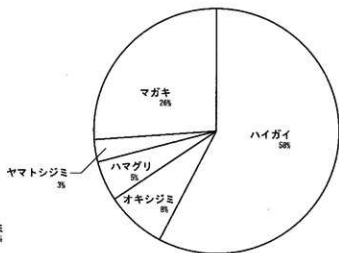
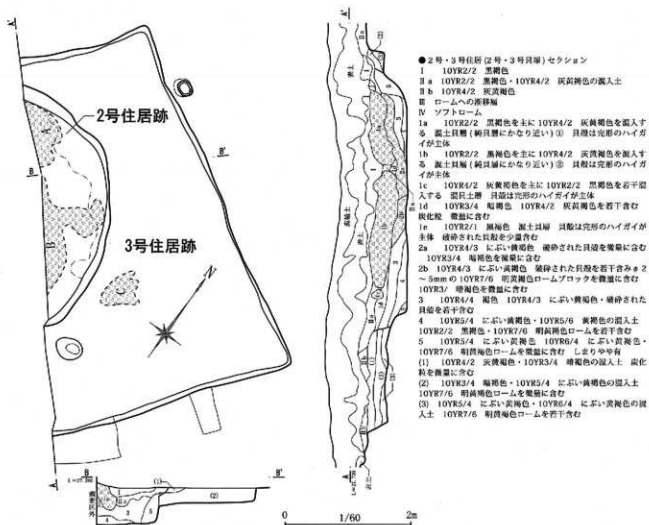


表4 1号貝塚B 地点貝組成



第 13 図 2・3号住居跡 (2・3号貝塚)

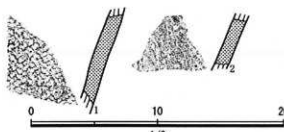
2号住居跡 (2号貝塚) (第 13・14 図 図版 7・8・31)

本住居跡は C-24・25 グリッドにおいて、1号住居跡の西側に近接して検出されたものである。やはり覆土中に貝層を有する住居内貝塚である。プランは円形と想定されるが、調査を行えたのは短軸側で 1.34m、長軸側で 4.80m、確認面下の掘り込みの深さはおよそ 60cm を測る。円形のプランを想定するならば、おおむね全体の 3分の1 程度の調査と判断される。西側は調査区の外となっており未調査である。

3号住居跡の覆土中に切り込まれている。断面から判断して本住居の方が3号住居跡よりも新しい。覆土は9層に分層され、1a から 1c 層までが貝層で、a・b 層が混土貝層、c 層が混貝土層である。ハイガイを中心とする。2層以下はレンズ状の堆積が観察され、1号住居跡同様に住居の埋設過程で窪地に貝が投棄されたものと判断される。平面的に見れば貝層は住居中央部に広がっているが、ブロックとしては北東側の A と南側の B ブロックに分かれている。

床面はほぼ平坦であるが、ほぼ全面に硬化面の広がり確認される。しかし、柱穴、壁溝、炉ともに確認されていない。

出土遺物は僅かで、関山式土器を中心に 72.9g の土器が出土している。覆土中の遺物として中期の遺物が僅かながら混入している。掲載遺物は 2 点である。1 は組紐を横帯施文する深鉢の胴部破片で原体は右巻 LL と左巻 RR の組紐文と判断される。2 は内外条痕文の土器である。1 は第 3 群第 2 類 f 種の関山 II 式と判断される。2 は第 2 群第 2～4 類の土器底部付近の破片である。広義の茅山式と判断される。従って、本住居の所属年代は、1号住居跡同様に関山 II 式段階と判断される。



第14図 2号住居跡出土遺物

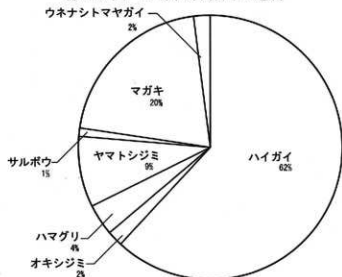
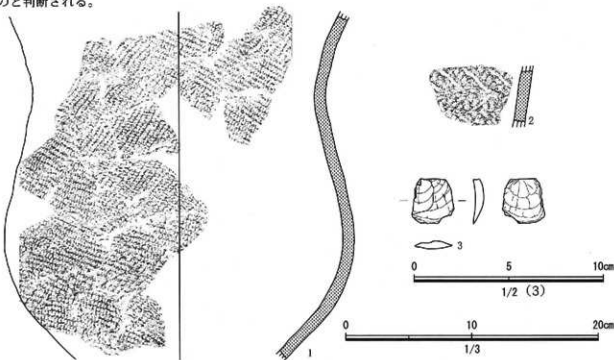


表5 2号貝塚貝組成

3号住居跡 (3号貝塚) (第13・15図 図版7・8・31)

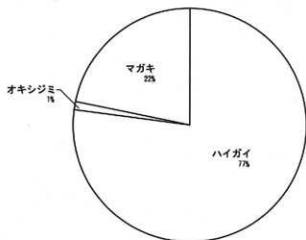
本住居跡はC-25グリッドに於いて、2号住居跡と重複して検出されたものである。プランは方形を呈するものと想定される。南北方向は5.80mを測る。西側が調査区外となっており、東西方向は不明。確認面下の深さは、25cm程度で、2号住居跡の方が深い。西側のおよそ2分の1が調査区外となっており、調査は全容を捉えるには至っていない。床面も軟弱で明確な床面の硬化は見られない。また、炉及び壁溝も検出されていない。南側壁よりに1基のピットが検出されている。断面観察より本住居を2号住居跡が切っており、本住居跡が古いものと判断される。



第15図 3号住居跡出土遺物

検出された貝は全量を採取し、土嚢袋で42袋を数える。このうち全量の10%について水洗・分類を試みた。この結果、ハイガイ、マガキ、ヤマトシジミ、ハマグリ、オキシジミ、ウネナシトマヤガイ、シオフキ、ツメタガイ、サルボウ、ニナ類、アカニシの12種類が検出されている。アカニシは僅かに外殻の断片のみである。汽水域のヤマトシジミは僅かに62点で全体の9%にすぎない。大半が鹹水域産の貝類である。その大きさ別の組成は表14にまとめた。殻幅が計測できなかったものも含め種類別の割合は表5にまとめた。表で見ると通り、1号住居跡と本住居跡は貝の組成が類似するもので、何れも関山Ⅱ式段階の住居内貝層の組成として産物は無い。水洗いを全量行ったものではないが、魚骨・骨角器等の検出は無かった。

出土遺物は3点を呈示した。1は深鉢の胴部下半より上半にかけての括れ部の大型破片である。0段多条の縄文が羽状を構成するように全面に施文される。第3群第2類a種に相当する。2は附加条第2種の縄文が回転施文されるもので、やはり羽状を構成する。第3群第2類g種の遺物と判断される。3は黒色織密質安山岩の剥片である。正方形に近い形状で割線に加工痕は見られない。出土遺物はその特徴からより本住居は第3群第2類の遺物と判断されることより、遺構は関山Ⅱ式と判断される。出土遺物に型式差は認められないものの、



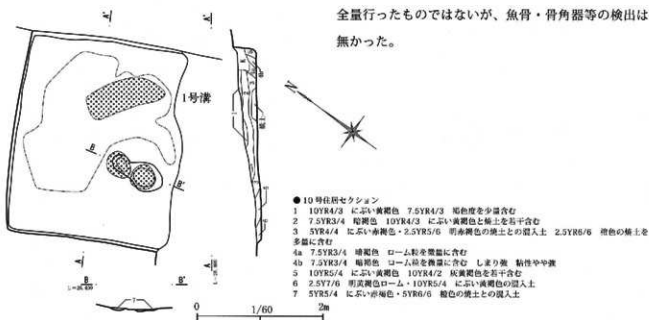
重複関係より本跡が古い。同一型式内ではあるものの、時間差により1・2号住居跡に比較し、貝組成は大きな変化を見せている。

貝層は住居跡の南西側で小規模なブロックながら検出されており、第2層中に投棄されている。検出された貝は全量を採取し、土嚢袋で12袋を数える。このうち全量の10%について水洗・分類を試みた。この結果、ハイガイ、オキシジミ、ハマグリ、サルボウ、マガキ、ニナ類、ヤマトシジミの7種類が検出

表6 3号貝塚貝組成

されている。汽水域のヤマトシジミ及び鹹水域のハマグリ、ニナ類は僅かに1点ずつで大半がハイガイで全体の77%を占めている。続いてマガキが若干量(22%)混じっている。1号貝塚の組成とは明瞭な違いが認められるもので、採取したハイガイの大きさも3.2~3.8cmのものに集中する傾向が顕著である。大きさ別の組成は表14にまとめた。また殻幅が計測できなかったものも含め種類別の割合は表6にまとめた。尚、水洗いを

全量行ったものではないが、魚骨・骨角器等の検出は無かった。



第16図 10号住居跡

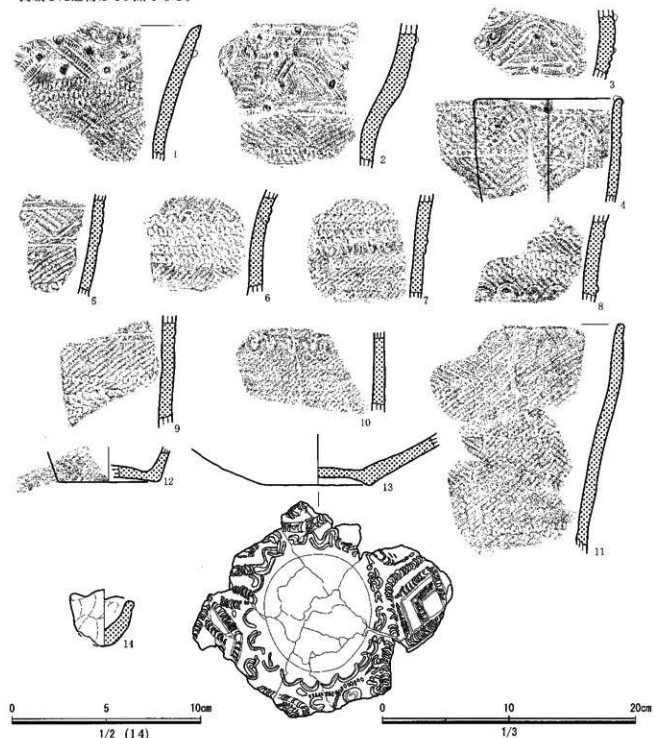
10号住居跡 (第16・17図 図版10・11・32)

本住居跡はB-10・11グリッドに於いて検出された。1号溝によって南側を切られ、さらに東側は調査区域の外となっている。検出できた壁は南北2.64m、東西3.06mで、全体は不明である。プランは方形を呈するものと判断され、検出された床面の中央付近に2基の炉が連結して設置されている。長軸は88cm、短軸は北側で26cm、南側で44cmを測る。火床面はよく焼けている。柱、周溝、柱穴共に検出されていない。床面は平坦で全体に硬化している。床面の東側に南北1.24m、東西0.46m幅で焼土の分布が観察され、本住居は火災

住居であると考えられる。

遺物は3087.8g 出上している。遺物は全て縄文時代前期の遺物と判断されるもので、他の時期の遺物は混入されていない。

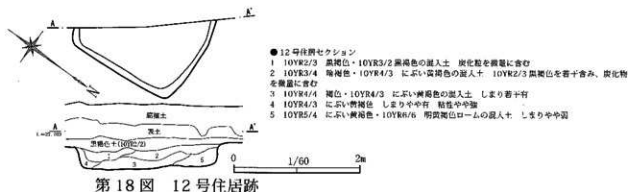
掲載した遺物は16点である。



第17図 10号住居跡出土遺物

1～3は口縁部文様帯が区画され、平行沈線による梯子状文で鋸歯状の文様が描かれる。円形の貼付文が多数貼付けられている。胴部には0段多糸の縄文により羽状の構成が行われる。1は胴部上半の破片であろう。2・3に比べてやや幅広い文様帯を有する。4はやや小形の平縁の深鉢である。上半部に文様帯を有し、曲線状の紋様が半葎竹筥による梯子状文で描かれる。地文は1～3と同様である。5は平行沈線による鋸歯文が描かれるもので、梯子状の刻みはもたない。6は胴部の破片であるが、上半に僅かながら平行沈線による区画が観察

される。7～10はコンパス文が胴部に描かれる資料である。11は平緑の口縁を呈する大破片で、口縁部直下より付加条第1種の縄文、0段多条のLR、RLにより帯状に施文され、羽状を構成している。各縄の頂部にはループとなっている。12は単節RLとLRの縄文により羽状縄文を下端部まで施文する底部の破片である。13は器形が判別できる浅鉢である。底部は上げ底になり、胴部には半截竹管による爪形が梯子状に施文され、菱形と渦巻き(羊角状)の文様が交互に配される。下端部には崩れたコンパス文が巡る。内面は剥落しており整形の状況は明瞭ではない。14はミニチュア土器である。丸底で手控状の土器で文様はない。口縁部は僅かながら欠損している。胎土中には多量の繊維が混入され、表面は褐色に変化し内面のみがサンドイッチ状に繊維を混入する。1～13と同様の胎土焼成である。以上本住居跡の遺物は遺構外出土の第3群第1類の土器であり、関山I式でも占段階に比定されるものである。本住居跡の所属年代も該期と判断した。



第18図 12号住居跡

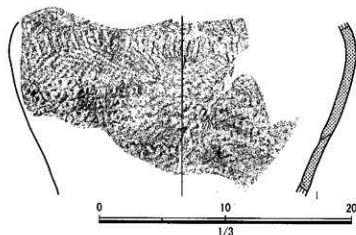
12号住居跡 (第18・19図 図版13・32)

本遺構はC-22グリッドに於いて検出されている。西側方向が調査区域の外となっており、全体を調査できたわけではない。確認された東側の壁は1.85m、確認面下の掘り込みの深さは、25cmを測る。東西方向は最大で幅1.35mの調査にとどまっている。

住居のプランは小形の方形を呈するものと判断される。床面はほぼ平坦で、炉、柱穴共に検出されていない。覆土は5層に分層され、自然堆積を示す。

遺物は534.3gの縄文土器が検出されている。早期壺系文系土器、沈線文系戸下層式土器、前期関山式等

が出土している。掲載した1は深鉢形土器の胴部破片である。屈曲部に接合部を有するもので、接合部分にコンパス文にかわって短沈線を縦方向に刻みを施すように施文している。地文の縄文は単節RL呼びLRの縄文を横方向に回転施文するもので、端部にループ文が付随する。本遺物は、遺構外出土遺物の第3群第1類e種の土器が検出されており、関山I式期の遺構と判断される。



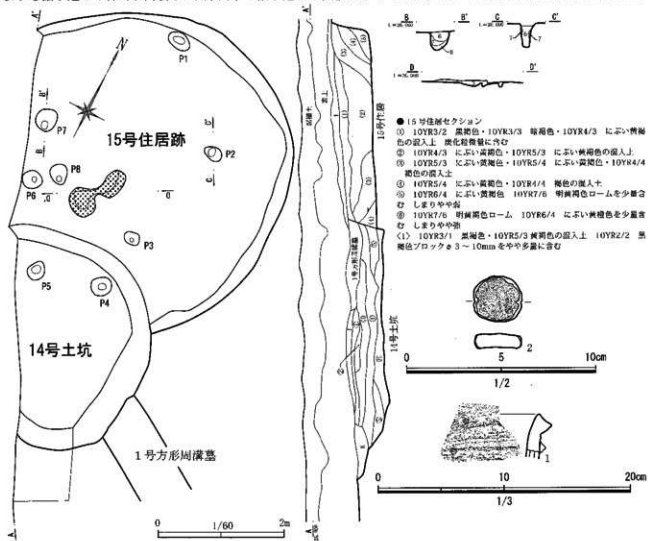
第19図 12号住居跡出土遺物

15号住居跡 (第20・21図 図版15・32・33)

本遺構はA・B-8グリッドにまたがって検出されている。西方向が調査区域の外となっており、さらに南側を14号土坑によって切られている。このため全体を調査できたわけではない。

住居のプランは円形を呈するものと判断され、確認された南北方向の壁は直径5.03m、東西方向は4.13mの調査にとどまっている。14号土坑と重複しており、本遺構の方が古い。確認面下の掘り込みの深さは、72

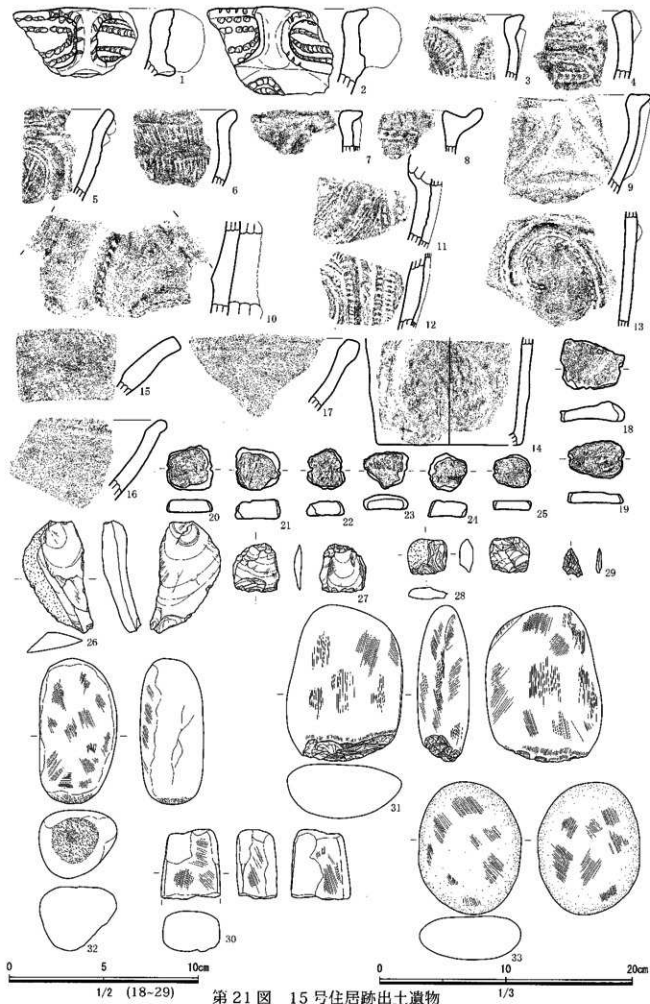
cmと深い。床面はほぼ平坦で、確認された床のほぼ全面が硬化している。炉は中央部分に2基連結されて細長い楕形になる。長軸は105cm、短軸は北側で33cm、南側で50cmを測る。楕円形の掘り込みを有するもので、焼上の範囲はこの掘り方とやわずれて検出されている。柱穴は8基検出されている。このうち、2基は14号土坑の床面下から検出されたものであるが、位置関係及び覆土の状況より本遺構に伴うものと判断した。P1は北壁よりに配置される。37×24cm、深さ19cm、P2は30×20cm、深さ42cm、P3は炉の東側に近接するもので26×21cm、深さ36cm、P4は14号土坑の床面下より検出されたもので、14号土坑の方が本住居跡よりも掘り込みが深く、確認面から床面下の掘り込みの数値は小さくなる。32×32cmの円形で深さは(15)cm、



第20図 15号住居跡・14号土坑・14号土坑出土遺物

P5もP4と同様で、14号土坑に切られている。30×26cm、深さ(13)cm、P6は南西壁際に位置している。31×28cm、深さ25cm、P7は炉の西側に近接する。31×27cm、深さ41cm、P8は北西調査区付近に境付近に位置し、35×32cm、深さ37cmを測る。

遺物は27165.1gの縄文土器・石器類が検出されている。縄文中期中葉の阿玉台Ⅱ式土器を中心に早期条痕文系土器、前期間山式・浮島式土器等が出土している。掲載資料は33点で縄文土器片17点、土器片鏃8点、石器8点である。1～9は口縁部の破片である。1・2は構状の取手が付されるもので窓枠状の横切面の内部に角押文が施文される。本遺物の2点がやや古い様相を呈するが、その他は大形の扇状取手を有し、隆帯に沿って2列の角押文が施文される3～5、11～13、断面がかまぼこ状の太い隆帯が巡る6・8・10・11～15、16～18は浅鉢の口縁部破片である。3以降は第4群第2類b・c種の土器であろう。19～25は土器片利用の土器片鏃である。本遺構の所属時期は阿玉台Ⅱ式期の遺構と判断される。第7群土器としてまとめたも



1/2 (18-29)

第 21 图 15 号住居跡出土遺物

1/3

のである。19は第7群b種の資料で、横長の楕円形を呈するものである。20～25は同群c種の資料である。何れも側面の研磨はほとんど見られず、組掛けの溝が僅かに両端に刻まれるだけである。

26～33は石器で、第8群に分類した資料である。26は頁岩の刮片である。27・28は楔である。27はガラス質安山岩、28は鉄石英である。29は石鏃である。形状は小形の門基三角鏃である。側縁はほぼ直線的で、鋸歯状の押圧剥離が行われている。材質は珪質頁岩を用いている。30は磨製石斧である。定角式の石斧で凝灰岩を用いている。31は緑色岩類の自然礫を素材とするもので、下部部に荒い打撃が加わり、刃部を作り出している。礫核石器とするべきか、刃部に摩滅痕が観察されることより打製石斧として扱った。32・33は磨石である。何れも楕円形の自然礫の上面を用いて磨っており、磨石とした。第4類とした磨石とはタイプが異なる。



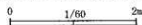
● 3号土坑セクション

- 1 10YR3/2 黒褐色 黄土粒・炭化粒を豊富に含む
- 2 10YR3/2 黒褐色・7.5YR4/3 褐色の礫入土 焼土粒・炭化粒を豊富に含む
- 3 7.5YR4/3 褐色・10YR5/3 黄褐色の礫入土 黄土粒・炭化粒を豊富に含む



● 4号土坑セクション

- 1 10YR3/2 黒褐色 2.5Y7/6 石質褐色ロームブロックφ5～10mmを少量含む
- 2 10YR3/2 黒褐色 2.5Y7/6 暗褐色ロームブロックφ2～5mmを若干含む
- 3 10YR3/2 黒褐色 2.5Y7/6 明黄褐色ロームブロックφ5～15mmをやや多量に含む



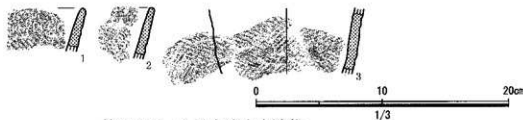
第22図 3・4号土坑

2 土坑

3号土坑 (第22・23図 図版19・33)

本土坑はC-22・23グリッドにおいて検出された。長軸122cm、短軸は78cmの楕円形を呈する。確認面下の掘り込みの深さは、30cmを測る。覆土は黒褐色を基調に3層に分層され、自然堆積を示している。

遺物は中期の上器の細片がわずかに含まれるが、床面から出土した遺物では関山式土器が中心となる。掲載遺物1～3は同一個体と思われる。1・2は口縁部の破片である。口縁直下にループ文が多段に施文され、以下は横帯の0段多条の縄文LR及びRLが羽状に施文される。遺構外出土遺物の第3群第1類g種の土器が中心となっていることより、本遺構の所属は関山I式段階の遺構と判断される。



第23図 3号土坑出土遺物

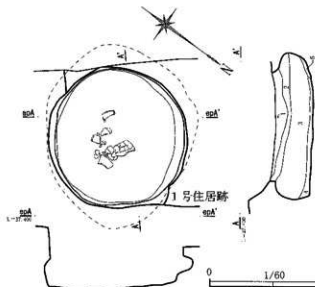
4号土坑 (第22図 図版20)

本土坑はB-16グリッドにおいて検出された。2号古墳によって切られている。長軸は110cm、短軸側は不明である。楕円形を呈するものと思われる。確認面下の掘り込みの深さは、26cmを測る。覆土は3層に分層され、自然堆積を示している。

遺物は覆土中より関山式土器の細片が僅かに出土したのみである。遺構外出土遺物の第3群第1・2類の土器が中心となっていることより本遺構の所属は関山式段階の遺構と判断される。

12号土坑 (第24・25図 図版22・33)

本土坑はC-25グリッドにおいて検出された。1号住居跡と重複するもので、同住居跡を切って構築されている。土坑確認面に於ける規模は南北2.20m、東西2.15mのほぼ円形であるが、袋状を呈する所謂フラスコピットであり、底部は最大で東西方向2.83m、南北2.37mの掘り込みを有する。確認面下の掘り込みの深さは、95cmを測る。覆土は5層に分層され、自然堆積を示している。



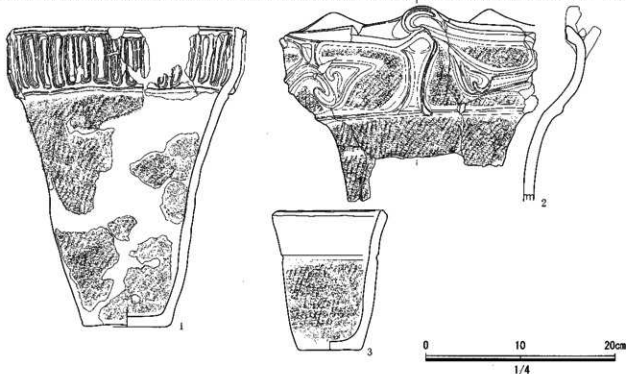
● 12号土坑セクション

- 1 10YR4/3 にぶい黄褐色・7.5YR4/3 褐色・10YR6/4 にぶい黄褐色の混入土 腐土粒・炭化粒を若干含む
- 2 10YR6/4 にぶい黄褐色・2.5Y6/4 にぶい黄褐色の混入土 明黄褐色ロームブロックφ5～15mmを若干含む 人為堆積
- 3 2.5Y6/4 にぶい黄褐色 明黄褐色ロームブロックφ5～15mmを少含む 人為堆積
- 4 2.5Y6/4 にぶい黄褐色 しまり強 人為堆積
- 5 2.5Y6/4 にぶい黄褐色・2.5Y7/6 明黄褐色ロームの混入土 しまり強 人為堆積

第24図 12号土坑

遺物は覆土上～中層にかけて完形の縄文中期加曾利E式土器が押しつぶされた状態で検出されている。遺構外出土遺物の第4群第6類a種の土器が中心となっていることより、本遺構の所属は加曾利EⅠ式古段階と判断される。尚、木製の遺物は、遺構外からの出土は極めて少なく、僅かに土器片鏝が2点検出されているのみで、該期の遺構の中心は北西側区にその中心部が存在する可能性が高い。

1は加曾利EⅠ古式のキャリパー形を呈する深鉢のほぼ完形品である。中峠式土器の影響を受けるものであろうか、口縁部文様帯には棒状の隆帯より、縦区画の文様が描かれる。胴部は単節LRが施文される。文様



第25図 12号土坑出土遺物

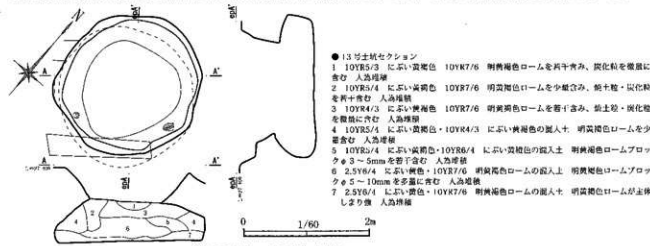
部には縄文は施文されていない。胎十中には金雲母の混入が目立つ。同様の遺物は県内では石岡市東大橋原遺跡に見られる。東大橋原例では、区画帯の中央に棒状の降帯による渦巻き文が施文されるが、本遺物では横方向の梯子状に棒状の降帯が全周するもので、渦巻き状の文様構成は行われていない。

2は3単位の渦巻き状の突起を有するキャリパー形の深鉢である。口唇部は外反して無文部を有す。口縁部文様帯は胴部の括れ部に巡る降帯によって区画され、突起部から垂下する降帯によって3区画に縦割される。内部に、渦巻き状の文様から剣先状の文様へと連結される横S字状の紋様構成が3単位描かれる。地文は単節LR。大木8a式の影響を強く感じさせるものである。加曾利EⅠ式土器と判断した。

3は小形の深鉢である。ほぼ円筒状を呈し、口縁部わずかに開き、口唇部がやや外削ぎとなる。口縁部は太い沈線によって区画され、幅広い無文帯を形成する。胴部はLRの単節縄文を密に横回転施文するもので、胴部下半には施文されていない。供伴遺物遺物から本遺物も加曾利EⅠ式土器と判断される。

13号土坑 (第26・27図 図版22・34)

本土坑はC-26・27グリッドにおいて検出された。15号土坑と近接して検出されたものである。当初本地域は、縄文前期を中心とする包含層として捉えられていた部分であるが、精査を行ったところ2基のフラスコピットと2基の小ピットが確認されたものである。遺構の南北軸は204cm、東西軸212cmの円形で袋状を呈するもので、底部は中斷から東西方向では最大70cm掘り込まれ、所謂フラスコ状を呈するピットである。覆土最下層において3の縄文中期加曾利EⅠ式の浅鉢が検出されている。確認而下の掘り込みの深さは、87cmを測る。覆土は7層に分層され、壁の崩落によるものか複雑な堆積状況を示すが、おおむね自然堆積と判断している。



第26図 13号土坑

遺物は縄文前期の土器、土師器がわずかに含まれるが、床面から出土した遺物は6個体が確認されており、加曾利EⅠ式土器が中心となる。遺構外出土遺物の第4群第6類a種の土器が中心となっていることより本遺構の所属は加曾利EⅠ式段階と判断される。遺物の総量は7247.4gを測る。

1はキャリパー形を呈する深鉢の上半部大破片である。口縁部は二重隆線が巡り、3単位の横S字状の文様に連結する剣先文様が配される。降帯による窓枠状の区画の内部には、地文に単節LRの縄文が施文される。加曾利EⅠ式土器と判断される。

2はやはりキャリパー形を呈する深鉢。接合しないが同一個体と判断される大破片2片である。口縁部には渦巻き状の小突起が付され、二重隆線によるクランク状の懸垂文及び渦巻きが連結されて描かれる。区画内には地文として0段多条のRL縄文が横回転で施文され、胴部は同縄文原体を縦方向に回転施文し文様帯と胴部の地文を使い分けている。また、胴部には沈線による方形を意識する沈線による区画が二重縦沈線(1本ずつ

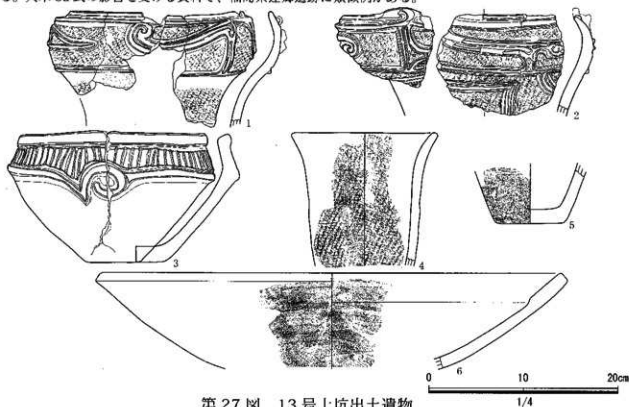
描かれる)によって描かれている。加曾利 E I 式土器と判断される。

3 は加曾利 E I 式浅鉢で、口縁の一部分を僅かに欠損するがほぼ完形である。口縁部は短く立つ。渦巻き状の文様部を起点とする隆帯により、3 単位の窓枠状の区画を設け、内部に縦方向の沈線が充填される。胴部はそろばん玉状を呈して屈曲するもので、胴部は無文である。加曾利 E I 式土器である。

4 は口縁が僅かに外反して開く筒型の深鉢である。頸部の括れはもたずキャリパー形にはならない。口縁部文様帯を有しない縄文系の土器である。胎土中に金雲母の混入が顕著である。全面に単節 LR の縄文が施文される。加曾利 E I 式土器と判断した。

5 は底部の破片資料である。全面無文で、胎土中には 4 同様金雲母が多量に混入しており、一見では阿玉台式の土器にも似ている。器面の調整から本遺物も加曾利 E I 式と判断した。

6 は大形の浅鉢の破片である。口縁部は平縁と判断されるもので、無文である。口縁内面に断を有するものである。破損した資料は、広範囲に分散して出土しており、同一個体の資料で 1 号古墳の周溝からも出土している。大木 8a 式の影響を受ける資料で、福島県連野遺跡に類似例がある。



第 27 図 13 号上坑出土遺物

14 号上坑 (第 20 図 図版 22・23)

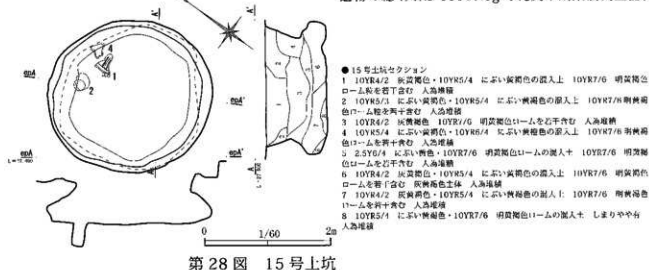
本土坑は B-8・9 グリッド、15 号住居跡の南側に重複して検出された。同住居跡を切っており本土坑の方が新しい。また、1 号方形周溝墓の西側溝の北端部が本遺構の上層を切っており、層的に見れば縄文時代中期阿玉台 II 式よりも新しく、古墳時代前期の遺構よりは古い。

長軸南北方向は 3.32m、東西軸は西側が調査区の外になるため、2.02m のみ調査を行っている。円形を呈するものと判断される。覆土は黒褐色土・黄褐色土を基調にして 6 層に分層され、自然堆積を示している。確認面下の掘り込みの深さは、70cm を測る。柱穴は検出されておらず、また炉も無いことから土坑としているが、住居跡の可能性もある。

遺物は呈示した資料は 2 点で、1 は第 4 群第 2 類 b 種の遺物であり、15 号住居跡よりも掘り込みが深く別遺構であるが、出土した遺物から判断して 15 号住居跡とほぼ同時期の阿玉台式期と判断される。2 は同時期の土製品で上器片鏝である。周縁がやや削られており、b 種とした遺物にやや近い。

本土坑はC-26グリッドにおいて13号土坑に近接して検出された。南北軸は220cm短軸218cmの円形で袋状を呈する所謂フラスコピットである。中段は摺鉢状に一旦窄まった後、底部は大きく広がりオーバーハングする。中場の突出部分から南北方向で北に凡そ45cm、南に32cmオーバーハングする。底部北側より小ピットが1基穿たれている。ピットの規模は長軸25cm、短軸22cm、掘り込みは斜め方向で深さは底部から37cmを測る。覆土中層に器形わかる縄文中期加曾利EⅠ式土器が6個体まとまって検出されている。

遺物の総重量は11647.8gで縄文早期系痕文土器、



第28図 15号土坑

前期間山式土器、浮島式土器、中期初頭の下の野式土器等の破片が含まれるが、出土した遺物では加曾利EⅠ式が中心となる。遺構外出土遺物の第4群第6類a種の土器が中心となっていることより本遺構の所属は加曾利EⅠ式段階と判断される。

1はキャリパー形を呈するほぼ完形の土器である。口縁部に3単位の渦巻の横状把手が付され、把手は2カ所で欠落している。頸部から口縁部にかけて文様帯が構成される。口縁部文様帯は刻みを有する隆帯が回り、3単位の窓枠状の区画を作る。また把手部の設置される3単位の中間部に渦巻き状の文様が構成され、窓枠状の区画の隆帯がこれに連結される。頸部は胴部上半に巡る太い2重隆帯によって区画帯が設けられる。何れも枠内には太い縦方向の沈線が充填される。胴部はLRの縄文を施文した後、平行沈線と蛇行沈線が垂下する。胎土には砂粒を多く含む雲母の混入も目立つ。加曾利EⅠ式と判断した。

2はキャリパー形を早する深鉢の資料である。底部を欠損しているがおおむね器形は判別出来る。口縁部には3単位の突起が付されていたものと思われるが、突起は何れも欠落している。口唇部は無文帯となって短く外反して開く。口縁部直下には縄目を回転施文した細い隆帯が突起部分より弧状に連結され、胴部上端部にはRLの縄文が横方向に1列整然と回転施文され、以下胴部には同じ原体のRL縄文が等間隔に縦方向に回転施文される。文様の構成と縦方向に縄文を施文する手法は、大木7b式の影響を強く感じさせるもので、加曾利EⅠ式古段階又は中峰段階の資料である可能性が高い。

3はキャリパー形を呈する深鉢の胴部上半部の大破片である。口縁部の凡そ1/2程度遺存している。口縁部には渦巻き状の小突起が付され、これを起点に二重隆帯が口縁部に巡る。口縁部文様帯は頸部との境に巡る1条の隆帯によって画され、区画内にはやや細めの隆帯が波状に全周する。地文は口縁部紋様帯の内部は0段多条の単節RLが横方向の回転で施文され、胴部は同一原体が縦もしくは斜め方向に施文される。本遺物は、形状から加曾利EⅠ式と判断されるが、同様の遺物としては日立市諏訪遺跡で山上している。同資料では、把手が付されているものの本資料では把手は確認出来ない。欠損部分に存在した可能性もある。大木8b段階



第29図 15号土坑出土遺物

の古式とするか8a段階の影響と見るか問題のある資料である。

4はキャリパー形を呈する深鉢の同上半部大破片である。凡そ全体の1/2が残っている。平縁の口縁である。口縁部文様帯には、隆帯によるクランク文と渦巻きから連結される剣先文様が描かれる。また、口縁部文様帯の直下には縄文を施し無文帯が僅かながらの幅で巡る。地文は口縁部文様帯、胴部共に0段多条の単節RLが用いられるが、3同様口縁部では横方向の施文、胴部では縦方向に施文されている。

5は口縁がやや外反気味に開く筒状の器形を呈する深鉢である。口縁直下は無文帯が幅広く巡り、胴部には縦方向に単節RLと無節Rの2種類の縄が施文されている。供伴関係より加曾利E1式と判断した。

6はコップ形を呈する小形の深鉢である。文様構成はもたず、ミニチュア土器とは言えない。平底の底部から胴部は直線的に立ち、口縁部で僅かに内湾する。外面は無文である。胎土中には金雲母が目立つ。供伴関係より加曾利E1式と判断した。

3 炉穴

1号炉 (第30図 図版23)

本炉跡は2号古墳の墳丘部C-17グリッドにおいて検出された。9号上坑及び2号炉が近接している。長軸は71cm、短軸55cm、深さ13cmの浅い皿状を呈する。焼土は北方向に偏って検出されている。焼土の範囲は

長軸方向で50cm、短軸46cmである。火床面はよく焼けており赤褐色を呈する。本炉跡からの出土遺物は確認されていない。しかしながら、2号古墳の周溝内より第2群2～4類の条痕文土器が169.1g出土しており縄文早期の炉穴(ファイヤーピット)と想定される。

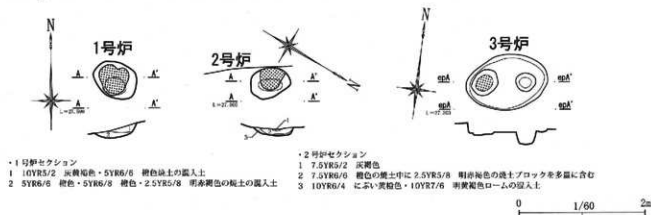
2号炉 (第30図 図版23)

本炉跡は1号炉同様2号古墳の墳丘部C-17グリッドにおいて検出された。9号土坑と近接する。長軸66cm、短軸47cm、深さ19cmを測るやはり浅い皿状を呈し、焼土は調査区域外に伸びているが確認部分で長軸40cm、短軸35cmの範囲に広がっている。火床面はよく焼けており、赤褐色を呈する。1号同様遺物の検出はなかったが、やはり縄文早期末の遺構と判断している。

3号炉 (第30図 図版23)

本炉跡は1号古墳の墳丘上やや南寄りのC-27グリッドにおいて検出されている。長軸は127cm、短軸は88cm、深さ9cmを測る。炉の底部北側に円形の小ピットが確認されている。掘り込みの大きさは長軸31cm、短軸30cmのほぼ円形を呈し深さは15cmを測る。南側には火床面が検出されている。規模は長軸43cm、短軸35cm、深さは6cmで浅い皿状の2段の掘り込みとなっている。小ピットを有するタイプの炉穴である。日床面はやや被熱の程度が弱いものの、焼土の分布は明瞭で赤褐色を呈している。

遺物は検出されていない。しかし、1号古墳の周辺及び周溝内より条痕を有する第2群2～4類の土器が500g出土しており、やはり早期の遺構と捉えられる。



第30図 1・2・3号炉

4 ピット

1号ピット (第31図 図版23)

本ピットはC-22グリッドに於いて検出された。長軸62cm、短軸58cm、深さは確認面下38cmを測る。2号土坑及び12号住居跡に扶まれるように検出されている。断面形状は鍋底状で覆土は黒褐色を基調に上下2層に分層される。

遺物は条痕文系土器と加曾利E式土器が出土している。遺物から縄文中期の遺構の可能性がある。



第31図 1・2号ピット

2号ピット (第31図 図版23)

本ピットはC-22グリッドに於いて1号ピットに近接して検出された。長軸38cm、短軸30cm、深さは確認面下26cmを測る。2号土坑の南側に近接する。断面形状はU字状で覆上は暗褐色を基調に上下2層に分層される。

遺物は条痕文系土器と加曾利E式土器(第4群5類)のが出土している。遺物から縄文中期の遺構の可能性がある。

第2項 古墳時代

1 古墳

1号古墳 (第32図 図版16・35)

本古墳は調査区の東端部C-26・27グリッドにおいて検出された。調査区の外側に延びているため全容を調査できていないが、円墳と判断される。周溝外側の立ち上がり部分までの直径は10.68mを測る。周溝は幅1.38～0.96m、深さ北西側の深い部分で確認面下45cm、東側では31cmほどになる。遺物は周溝内より土器が213.1g出土している。その他では縄文前期の遺物が圧倒的な量を誇っている。

主体部は検出されていない。中央やや南東寄りに焼土を有する1号炉跡が検出されているものの、本遺構にかかわるものではない。

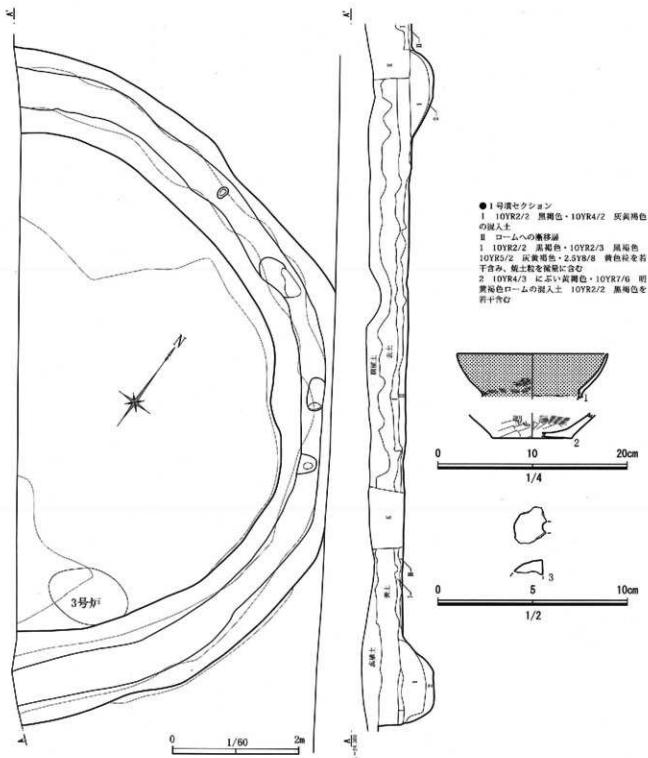
本住居出土遺物として掲載した資料は3点である。1は埴である。本遺物は13号住居出土遺物と接合している。2は壘の底部片である。3は球状を呈すると思われる土玉である。再編で明瞭ではない。これらの遺物が本古墳に伴うものならば第10群1類の古墳時代前期の資料ということになる。古墳群が中期末から後期の群集墳とするならば船越が生じてしまう。おそらく周辺の古墳時代前期の集落を破壊して古墳が構築されたために混入した遺物と判断したい。尚遺物の観察は表7にまとめた。

2号墳 (第33図 図版17・35)

本古墳はB・C-16・17・18・19・20グリッドに於いて検出されている。南西側及び北東側の一部が調査区域の外となっているために全容を知ることはできなかったが、確認された部分から円墳と想定される。中央部分まで調査が行えているものの主体部は検出されていない。周溝外側の立ち上がりまでの直径は、22.18mを測り円墳としては1号に比較して規模が大きい。主体部は検出されていない。墳丘の中央付近には9号土坑と1・2号址が存在するが本古墳に伴うものではない。9号土坑は墳丘が削平された後に構築されたものと想定される。

周溝は最大幅4.3m、最小部分で2.53mと周溝の幅も広い。深さは82～95cmの掘り込みをもつ。斜面部に構築された後期の群集墳と想定される。周辺に存在する古墳時代前期の集落4・7・9・13号住居跡及び1号方形周溝墓とは時期が後出のものとなる。

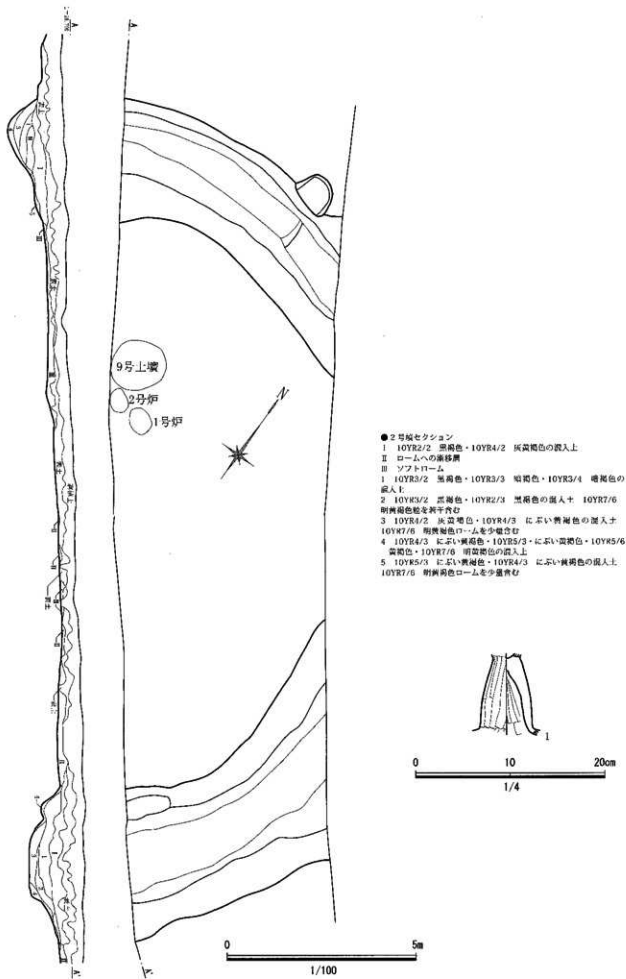
遺物は本遺構に伴うと判断される資料は、古墳中期の高杯脚部破片1点のみである。その他、出土遺物では縄文草創期徳文系土器群から中世かわらけや近世陶磁器まで出土している。特に条痕文系土器群が集中する傾向にあり、中央部の炉跡はファイヤーピットと判断している。尚遺物の観察は表8にまとめた。



第32図 1号古墳・出土遺物

表7 1号古墳出土遺物観察表

遺物番号	No.	注記	種類	形状	目録 表付 数量	重量	形状の特徴	量形の特徴	色調	粘土	構成	保存率	備考
1号古墳	1	1アソ	土師器	埴	(19.8) (4.8) —	19.5	口縁部のみが資料、口縁は縁やりに内湾し短く開く。	内外面共に横テラテラ状で、外側面は、外側面縁の縁の部分に斜方向の短い筋を日が織り込まれる。	内面 2.5YR5/6 暗赤褐色 外面 2.5YR5/6 暗赤褐色	暗赤や中赤い、灰色粘土やや赤い、白色粘土少量	透射、二穴 穴縁成有	1/4	1号古墳出土遺物と結合している。 古式土師器 内外面共に赤褐色
	2	1アソ	土師器	蓋	— (8.4) (2.6)	34.7	底面のみが資料、裏面はやや上げ底気味の平底。斜縁下縁は底縁的に開く。	外面はヘラテラリの後、部分別にミガキが観察される。内面はヘラテラリの後縁部による横筋、裏面はヘラテラリ。	内面 10YR2/4 にぶい黄褐色 外面 10YR7/6 明黄褐色	暗赤や中赤い、黒色粘土、白色粘土やや赤い、透射・スロリアアツ	透射	1/3	古式土師器
	3	1アソ	土師品	土瓦	短(1.3) 幅(1.2) 孔徑—	2.3	取柄部。	周に上る彫筋。	2.5YR6/6 暗赤褐色	暗赤褐色、黄褐色粘土	透射	1/8	



第33図 2号古墳・出土遺物

表8 2号古墳出土遺物観察表

(cm)

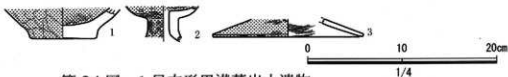
遺物番号	No.	注記	種類	器種	口径 底径 器高	重量	器形の特徴	装飾の特徴	色調	胎土	焼成	残存率	備考
2号古墳	1	2フソ	土師器	高杯群器	— — (3.4)	149.2	胴部のみの資料、胴部には彫り込みを有し、胴部で曲線して束く。	外面は黒方色のヘラズベリ、内面は赤による鏡方向の粗いナメダリで、後には写をヘラで磨いている。	内外面 7.5YR/6	砂粒中が多い、黒色粘土・灰石・七土・高砂中が多い、白灰針状物質少量。	灰彩	胴部(脚部欠損)	古墳時代中期

2 方形周溝墓

1号方形周溝墓 (第34・35図 図版18・35)

本遺構は東西方向に走る北側溝はA・B-7グリッド、これにほぼ直交する西側溝はB-8・9・10グリッドにおいて検出された。この2条の溝をもって方形周溝墓と想定した。調査を行えたのは北側の溝が3.70m、西側溝が7.60mである。確認面における規模は北側溝で幅1.55m、深さ31cm、西側溝が幅1.1m、深さ27cmを測る。溝の断面形状は浅い皿状を呈している。覆土は古墳前期の集落の覆土に酷似しており、黒褐色を呈する自然堆積で4層に分層される。

遺物は多量の縄文土器に混じって僅か3点の土師器が出土している。1は甕である古式土師器の底部片である。2は器台で中央部に孔が貫通している。赤彩されている。3は高杯の裾部片である。刷毛整形され、赤彩される。以上の出土遺物から本住居跡は第10群1類の遺構と判断した。尚遺物の観察表は表●にまとめた。



第34図 1号方形周溝墓出土遺物

表9 1号方形周溝墓出土遺物観察表

(cm)

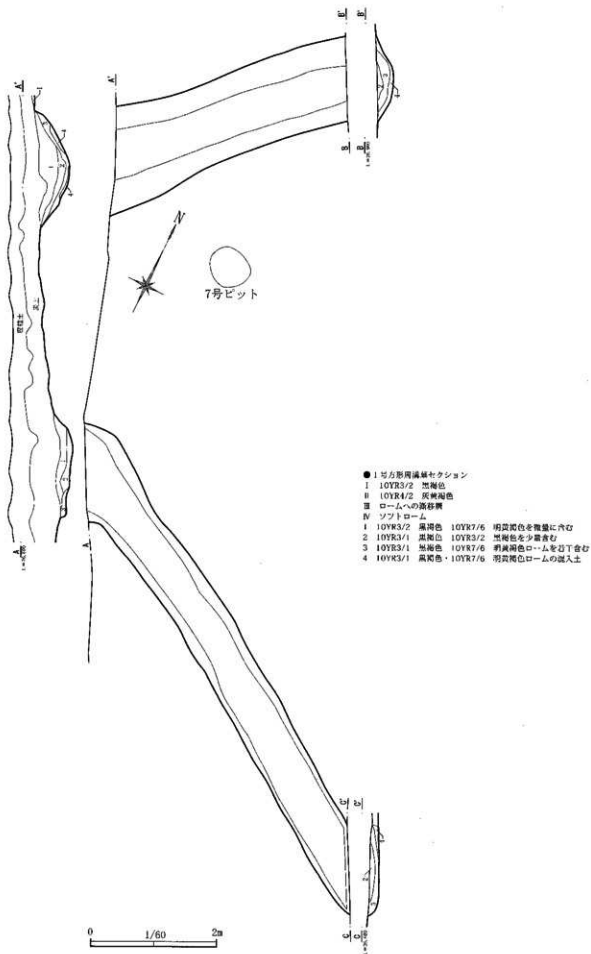
遺物番号	No.	注記	種類	器種	口径 底径 器高	重量	器形の特徴	装飾の特徴	色調	胎土	焼成	残存率	備考
1号方形周溝墓	1	1方	土師器	甕	— 7.1 (3.2)	173.9	表面は平直で円筒状に突出する。胴部下部は縁から内筒気味に開く。	外面及び底面はヘラズベリ、内面は刷毛状工具によるナメ。	内面 7.5YR/6 外面 7.5YR/6	砂粒少量、白灰色・ヘラズベリ ア・黒色粘土 少量、白色 赤彩物少量。	良好	底面 3/4	古式土師器 外面赤彩
	2	1方	土師器	器台	— (3.7)	59.2	縁全面の前縁、上面下部には内筒気味に開く。中央部には開孔あり。	内外面共にヘラズベリ、外面には部分的に刷毛目が施される。胴部内面はナメ。	内面 7.5YR/6 外面 2.5YR/6	砂粒少量、白灰色粘土・黒色粘土・黒色砂子・雲母少量。	良好	底面のみ の破片	古式土師器
	3	1方	土師器	高杯	— (16.6) (1.8)	13.6	胴部底の直縁、断面は直縁に大きく開き、断面は曲線状に束く。	外面は刷毛整形の痕跡あり、内面は刷毛・刷毛整形。	内面 10YR/7 底面 外面 5YR/6	砂粒少量、黒灰、一次焼成有る。ヘラズベリ、底面少量。	良好、一次焼成有る。	底面片	古式土師器 外面赤彩

3 住居跡

4号住居跡 (第36図 図版8)

本住居跡はB・C-24・25において検出された。確認調査におけるトレンチが住居のほぼ中央を縦断しており、さらに北東側は調査区域の外となっており、調査を行えたのは南西壁際の一部分にとどまっている。南北方向は2.9mを測り、やや小形の住居と判断される。確認面下の掘り込みの深さは、凡そ17cmと浅い。僅かに残る堆積部分では土層は暗褐色土を基調に3層に分層され、壁際の三角堆積からレンズ状の堆積から自然堆積と判断される。

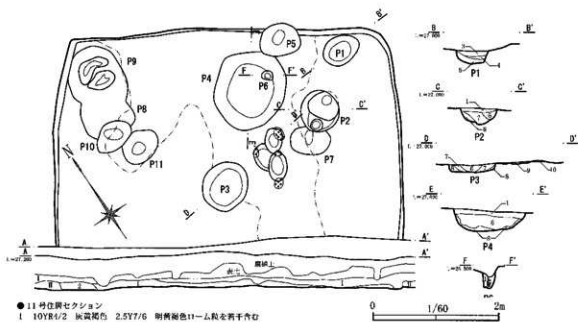
遺物は縄文土器を中心に出土しているが僅かに1点のみ赤彩が施された古式の土師器で埜が1片出土している。覆土の状況及び第10群第1類の同遺物をもって古墳時代前期の遺構と判断した。その他縄文土器は関山式土器186.6g、中期土器片43g、条痕土器33.3gが出土している。尚掲載遺物は無い。



第35図 1号方形周溝墓

11号住居跡 (第38・39図 図版12)

本住居跡は調査区の北西端部のD-1・2グリッドに於いて検出されている。北西から南東方向の壁は5.46mを測る。南西方向は調査区域の外となり、北東から南西方向は不明である。3.35mほど調査が行われている。全体の2分の1強であろうか。確認面下の掘り込みは、2~4cmと浅い。覆土は、2層に分層されるが、極めて浅く明確に堆積状況は確認できていない。床面の硬化面は北東側壁の中央部分から南西側調査区の南側に偏った方向に広がる。床面の中央付近に4基の楕円形の炉が竊足状に連結されて検出されている。1号炉は65×40cm、2号炉は43×30cm、3号炉は45×29cm、4号炉は38×28cmを測る。何れも掘り込みは1~2cm程度と浅く火床面はよく焼けている。また、床面に5基のピット(P)が検出されている。P1は住居跡東側コーナー付近に近接するもので60×45cm、深さ20cm、P2は63cmの円形で底部は西側と東側の2基に分かれ瓢状になる。東側は深さ78cm、西側は27cmでテラス状になっている。P3は楕円形の土塊状を呈する。76×68cm、深さ13cmで浅い皿状を呈する。P4はP3同様に楕円形の土塊状を呈するもので、125×105cm、深さ29cmを測る。何れも住居跡に伴うものと判断されるが、柱穴の掘り方となるものは、P2のみでその他の性格は不明である。



● 11号住居セクション

- 1 10YR4/2 灰褐色 2.5Y7/6 明黄褐色11-ム民を若干含む
- 2 ロームへの集積層
- 1 10YR3/3 紅褐色 2.5Y7/6 明黄褐色ロームを少量含む 粘性やや有
- 2 10YR3/4 暗褐色 2.5Y7/6 明黄褐色11-ム民を少量含む

・P-1セクション

- 3 2.5Y4/2 暗灰褐色・2.5Y7/6 明黄褐色11-ム民の混入+ 暗灰褐色土が主体
- 4 2.5Y4/2 暗灰褐色・2.5Y7/6 明黄褐色ロームの混入上 2.5Y7/6 明黄褐色が主体
- 5 2.5Y6/4 にぶい黄褐色 2.5Y7/6 明黄褐色ロームを若干含む

・P-2セクション

- 6 10YR4/2 灰褐色 2.5Y7/6 明黄褐色ロームを少量含む
- 7 10YR4/2 灰褐色 2.5Y7/6 明黄褐色ロームを少量含む
- 8 10YR3/3 にぶい黄褐色 2.5Y7/6 明黄褐色ロームを少量含む

・P-3・P4セクション

- 9 5YR4/2 灰褐色 5YR6/6 褐色の粘土を少量含む、10YR7/6 明黄褐色ロームブロック6.5~15mmを若干含む
- 10 5YR4/2 灰褐色 2.5Y2/8 赤褐色の粘土を少量含む

第38図 11号住居跡

また、調査終了後に床面を剥がしたところ、P5~11が検出された。P7・8、P10・11は位置関係より本来の柱穴の可能性ある。それぞれ近接しており、立て替えが行われた可能性を示している。P5は壁際に位置するもので65×52cm、深さ52cm、P6は20×15cm、深さ52cmを測り、柱痕が検出されている。P7は55×47cm、深さ45cm、P8は63×42cm、深さ49cm、P9は北側コーナー付近に位置し規模は112×89cm、深さ28cmで貯蔵穴の可能性が想定できる。P10は、60×40cm、深さ74cm、P11は59×47cm、深さ63cm

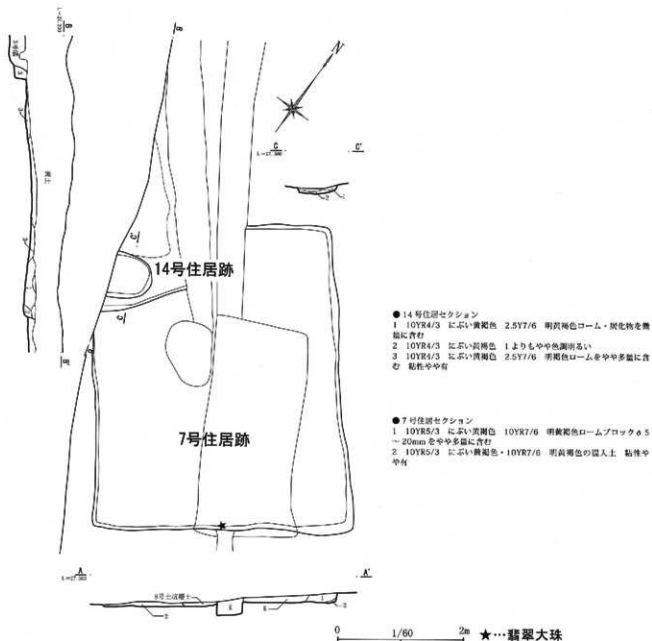
遺物は1の古式土師器の埴が貯蔵穴より出土している。尚、1の遺物は1号古墳出土遺物と接合している。1号古墳の遺物として掲載している。その他古式土師器の細片が106g出土しているものの、形状を示せる資料は無かった。縄文時代の遺物は摺糸文土器から堀之内式まで混在している。

従って本遺構は第10群1類の遺物が出土したことより、古墳時代前期の所産と考えられる。

14号住居跡 (第41図 図版14)

本住居跡はC-14・15グリッドに於いて検出された。7号住居跡を切って構築され、3号溝(現代の攪乱)によって切られている。調査を行えたのは南側壁で1.37m、南北方向が2.45mである。中央部に硬化面が広がっている。南壁側にピットが1基検出されている。楕円形を呈し、長軸は調査区外にかかり不明、短軸69cm、深さは14cmを測る。長楕円形を呈するものと判断され、断面系は浅い皿状である。柱穴とするよりも貯蔵穴の可能性が考えられる。

遺物では縄文前期及び中期の土器が24.5g出土しているものの、本住居跡に伴うと判断された遺物は検出されていない。7号住居跡との重複関係、住居跡の形状並びに覆土の状況から古墳時代前期の遺構と判断した。



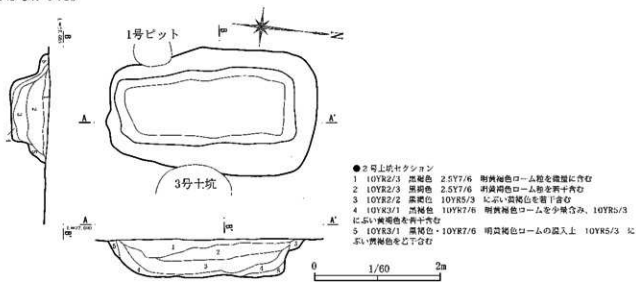
第41図 7・14号住居跡

4 土坑

2号土坑 (第42図 図版19)

本土坑はC-22・23グリッドにおいて検出された。長軸は3.25m、短軸1.92mの長方形を呈する。断面の形状は箱型で、上部部が緩やかにテラス状に開く。確認面下の掘り込みの深さは、最深部で60cmを測る。覆土は黒褐色を基調に5層に分層され、自然堆積を示している。

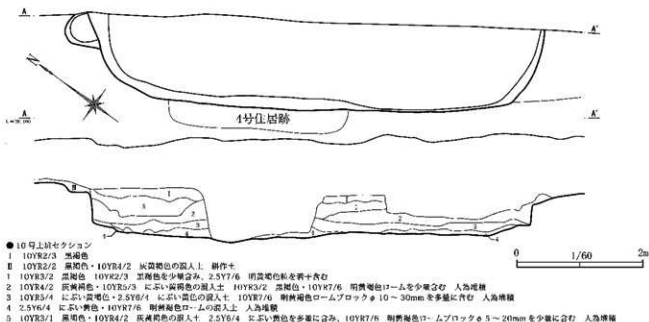
遺物は縄文早期より縄文後期の資料まで出土している。中期の土器の出土量が601.5gと最も多いが、土坑の形状及び覆土から古墳時代以降の遺構と判断した。1号古墳と2号古墳のほぼ中間に位置している。古墳の主体部の可能性が想定されるものの、本土坑を取り囲む溝は検出されておらず、古墳とは直接関連づけるものではなかった。



第42図 2号土坑

10号土坑 (第43・44図)

本土坑はB-24・25グリッドに於いて検出された。確認調査時に大型土坑として捉えられていたものである。東側は調査区域の外になっており、全容は捉えられていない。4号住居跡との重複部分に確認トレンチが入っ



第43図 10号土坑

ために、新旧関係を捉えられていないが、4号住居跡よりも古い可能性が高い。プランは長楕円形を呈するものであろうか、北西から南東方向の軸は7.21mを測り、北東から南西方向は最大で1.35mの幅で調査が行われている。確認面からの掘り込みの深さは、92cmを測るもので、覆土は自然堆積で5層に分層される。形状から判断して住居跡の可能性はある。

遺物は呈示出来たものは古式土師器2点である。遺物から判断して古墳前期の遺構としたが、縄文時代の遺物も多量に検出されており、覆上及び形状から縄文時代の住居跡の可能性も高い。尚遺物の観察は表11にまとめた。



第44図 10号土坑出土遺物

表11 10号土坑出土遺物観察表

図録番号	No.	形状	種類	基礎	はね 底径 (cm)	高さ	器形の特徵	器底の特徵	赤土	胎土	焼成	残存寸	備考	
10号土坑	1	SK10	土師器	壺	(22.3) (4.3)	23.2	口縁部のみを資料。口縁は口縁に外反外縁に溝し、胎土は口縁の中心部に凹み、胎土を胎土の間に流す。	表面は胎土面による。胎土は口縁部には胎土より胎土を流す。胎土は口縁部には胎土より胎土を流す。	胎土面 10YR7/4 に赤 い赤土	胎土面 10YR7/4 に赤 い赤土	胎土面 10YR7/4 に赤 い赤土	胎土面 10YR7/4 に赤 い赤土	胎土面 10YR7/4 に赤 い赤土	古式土師器
	2	SK10	土師器	高杯	— (3.0)	61.1	口縁部は胎土面による。胎土は口縁部には胎土より胎土を流す。胎土は口縁部には胎土より胎土を流す。	胎土面は胎土面による。胎土は口縁部には胎土より胎土を流す。胎土は口縁部には胎土より胎土を流す。	胎土面 10YR7/4 に赤 い赤土	胎土面 10YR7/4 に赤 い赤土	胎土面 10YR7/4 に赤 い赤土	胎土面 10YR7/4 に赤 い赤土	胎土面 10YR7/4 に赤 い赤土	古式土師器

5 ビット

6号ビット (第45図 図版23)

本ビットはB-10グリッドに於いて検出された。長軸42cm、短軸38cm、深さは確認面下27cmを測る。本遺構は10号住居跡に近接して検出された。覆土は黒褐色を基調として2層に分層できるが、覆土は1号方形周溝塔に似ていることより、古墳時代の遺構と判断した。覆土中に遺物の出土は無い。

7号ビット (第45図 図版24)

本ビットはB-8グリッドに於いて検出された。長軸65cm、短軸58cm、深さは確認面下33cmを測る。本遺構は15号住居の覆土中に於いて検出されたもので、同住居跡よりも新しい。覆土中から阿玉台式土器が出土しているものの15号住居跡の遺物が混入したものと判断される。覆土は黒褐色を基調として2層に分層できるが、覆土は1号方形周溝塔に似ていることより、古墳時代の遺構と判断した。覆土中に古墳時代の遺物の出土は無い。

22号ビット (第45図 図版24)

本ビットはC-23グリッドに於いて検出された。長軸25cm、短軸20cm、深さは確認面下18cmを測る。本遺構は3号住居の東側に近接して検出されたものである。覆土は黒褐色を基調として2層に分層できるが、覆土は1号古墳に似ていることより、古墳時代の遺構と判断した。覆土中に遺物の出土は無い。

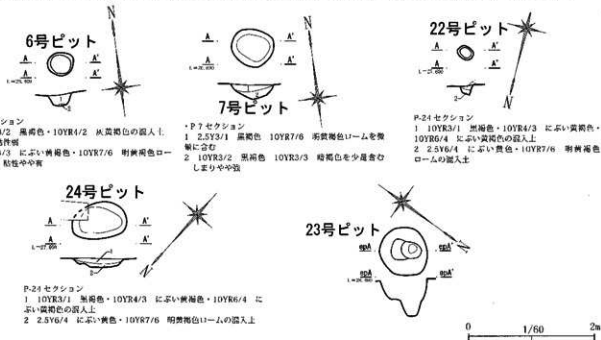
23号ビット (第45図)

本ビットはC-26グリッドに於いて検出された。長軸76cm、短軸74cm、深さは確認面下56cmを測る。本遺構は13・15号土坑の間で検出されたものである。覆土は、暗褐色の単層で底部は2段になっている。遺構は縄文時代の包含層を掘り下げ中に検出されたものであり、縄文時代の遺構の可能性はあるが、古墳の墳丘上か

らの検出と、15号土坑と明らかに覆土が異なることより古墳時代とした。

24号ピット (第45図)

本ピットはC-26グリッドに於いて検出された。長軸85cm、短軸57cm、深さは確認面下13cmを測る。浅井皿状を呈する。本遺構も23号ピット同様13・15号土坑の間で検出されたものである。覆土は、黒褐色を基調に2層に分層される。遺構は縄文時代の包含層を掘り下げ中に検出されたものであり、縄文時代の遺構の可能性はあるが、古墳の墳丘上からの検出と、15号土坑と明らかに覆土が異なることより古墳時代とした。



第45図 6・7・22・23・24号ピット

第3項 中・近世

1 土坑

5号土坑 (第46図 図版20)

本土坑はB-10グリッドに於いて検出された。短軸68cm、長軸側は調査区の外となり不明である。深さは確認面下21cmを測る。覆土は黒褐色を基調として2層に分層できるが、覆土は6号土坑に似ていることより、中・近世の遺構と判断した。覆土中に遺物の出土は無い。

6号土坑 (第46・47図 図版20)

本土坑は調査区の西側A・B-4グリッドに於いて検出された。遺構確認面に五輪塔の空風輪、及び宝篋印塔の塔身部が検出されており、墓坑の可能性が想定されていた。掘り方は長軸97cm、短軸70cmの長方形を呈し、鍋底状の掘り方を呈す。確認面下の掘り込みの深さは、56cmを測る。覆土は明黄褐色土上の4層に分層され、人為的堆積である。

調査の結果、底部付近3層から人骨の出土が確認された。骨は火を受けておらず、土葬されたものと判断される。坑の規模からはやや疑問が残るものであるが科学分析鑑定によって成人骨と判っており、小規模ではあるが成人の墓と想定される。尚、石塔が遺存していた点より、身分の高い武家・僧侶の墓の可能性が考えられる。

遺物は人骨の外に石塔2点がある。石塔は遺構確認面で出土しているもので、墓坑の上に設置されていたものと判断される。また、五輪塔と宝篋印塔の組み合わせとなっており、本来別の組み合わせであったものを利

用している可能性がある。但し、宝篋印塔の上下両面には差し込みのための突起が設けられているため、2の塔身上に1の空風輪を重ねることは困難と考えられる。

1は五輪塔の空風輪である。空輪と風輪は連結されており、風輪の下端は差し込みのための突起の造り出しは見られず、平坦に整形されている。種子は風化によって消滅している。石材には花崗岩が用いられているものの風化が激しい。規模は縦29.3cm、厚さ18.7cm、重量14600gを測る。かなり大型の五輪塔と想定される。但し、2の宝篋印塔の塔身が方形を呈し、地輪に似る遺物で近接して出土していることから組み合わせ用いられていた可能性がある。

2は宝篋印塔の塔身部である。側面4面には造り出しによって方形に区画を設け、上下両面には接合のための突起が設けられている。横16.8cm、縦16.6cm、内面の区画は縦9.4cm、横8.0cmを測る。突起部は直径4.7cmの円形で天地共に1.3cm程突出している。側面4面共に内部に種子が墨書で書かれている。尚遺物の観察は表12にまとめた。

尚、出土人骨については国立歴史民俗博物館の西本教授に所見による科学分析を依頼した。その結果は以下の通りである。

人骨は歯を見ると2体分の可能性がある。1号人骨はLM3上（親知らず）、RM1上の歯が確認されており、50代の熟年成人の歯である。2号人骨は30～40代の上顎左右RM3、LM3の親知らず、LM1の下顎骨カ、骨は1体分と判断される。頭蓋骨、背盤、手、足の何れも一部である。歯のみ2体分検出されていることは、疑問が残る。

表12 6号土壙出土遺物観察表

遺物番号	No.	位置	種類	材質	重量	器形の特徴	量形の材質	色調	新土	焼成	残存率	備考	
6号土壙	1	SK00No.1	A形塔	空風輪	縦29.3 横18.7	14600	空風輪である。空輪は宝篋印塔の突起と連結されており、風輪の下端は差し込みのための突起の造り出しは見られず、平坦に整形されている。種子は風化によって消滅している。石材には花崗岩が用いられており、風化が激しい。種子は判読できない。制高したものと想定される。						
	2	SK00No.2	宝篋印塔	塔身	縦16.8 横16.6	8600	方形を呈する。上下両面に差し込みのための突起(縦9.4cm、横8.0cm)が設けられている。突起は4面に方形の区画(縦9.4cm、横8.0cm)が設けられている。中心部に墨書によって種子が書かれている。石材は花崗岩が用いられている。風化は激しい。						
	3	SK00No.4-5	人骨	—	—	108.6	頭骨・背盤・手足の部分の断片。歯は2つだけ見つかり、同一個体の骨と判断される。歯はLM3、RM1の1つだけ。1号の頭骨に似る。年齢は30代の青年。及びLM1と推定される下顎骨に付いた資料があり、年齢は30～40代と推定される。歯は2体分の歯と判断される。						

8号土坑（第46図）

本土坑はC-15グリッドに於いて検出された。長軸107cm、短軸68cm、深さは確認面下33cmを測る。本遺構は7号住居の覆土中に於いて検出されたもので、同住居跡よりも新しい。覆土は黄褐色を基調として2層に分層できるが、覆土は6号土壙に似ていることより、中・近世遺構と判断した。3号溝が重複するが新旧関係は不明。同溝は現代ゴミが混入したことより擾乱としている。本土坑出土遺物はない。

9号土壙（第46・48図 図版21・36）

本遺構は、C-17グリッドに於いて検出された。2号古墳の墳丘上にあつて、ほぼ中央に位置する。長軸1.46m、短軸1.33mのほぼ円形を呈するもので、深さは確認面下1.21mを測る。当初土坑又は井戸の可能性があると調査を進めたところ、中から人骨が出土したために、2号古墳の主体部の可能性が想定された。しかしながら覆土中の人骨に伴って釘、かわらけが出土したことにより、中世以降の墳坑と判断した。覆土は人為的な埋め戻しが行われるもので、締まりはない。灰黄褐色土を基調に9層に分層される。このことから、2号古墳は中世段階で既に墳丘部を削平されていたものと想定される。さらに20点近い釘が出土していることから、木製で円形の桶状の棺に納棺・埋葬されたものと想定される。尚遺物の観察は表13にまとめた。

人骨は6号土壙出土人骨同様に西本教授に科学分析を依頼した。結果は以下の通りである。

人骨は左上腕骨の中間部分である。海綿体の状況より人骨と判断される。被熱は受けていない。成人の骨である。年齢・性別は不明である。おそらく土葬にふされた中世から近世初頭の墓坑と判断された。

11号土坑 (第46図 図版21)

本土坑はB-22グリッドに於いて検出された。長軸152cm、短軸側は調査区の外となり不明である。深さは確認面下22cmを測る。覆土は上層で黒褐色を、下層で黄褐色土を基調として5層に分層できるが、覆土上層が1号方形周溝墓に似ていることより、古墳時代の遺構と判断した。覆土中に遺物の出土は無い。

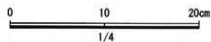
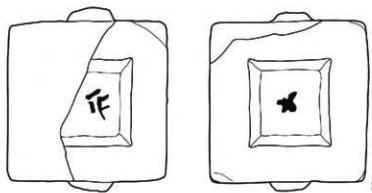
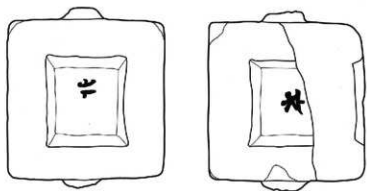
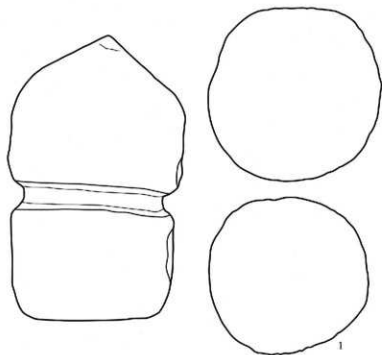


第46図 5・6・8・9・11号土坑

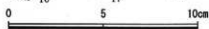
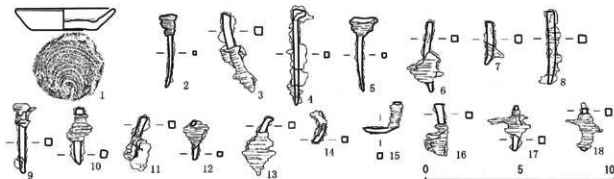
2 溝・道状遺構

1号溝(道状遺構) (第49図 図版24)

本遺構は調査区の中央やや西よりのB・C-11グリッドに於いて検出された。調査を行えたのは3.97mである。幅は最大で130cmを測り、調査区を北東から南西方向に横断している。断面の形状は緩やかな葉研状を呈し、掘り込みの深さは確認面下89cmを測る。覆土は9層に分層され、その堆積状況から5~9層までが当初に堆積した土で、1~4層は一度埋没したものを掘り返した後に堆積した土と判断される。第4・9層は硬く踏み固められて、硬化している。このために本溝の性格は道状の遺構と判断した。始めに第9層を路面とした道が何らかの理由で埋没した為に、掘り返しを行って、4層を路面とする道が再構築されたものと判断される。



第 47 图 6 号土坑出土遗物

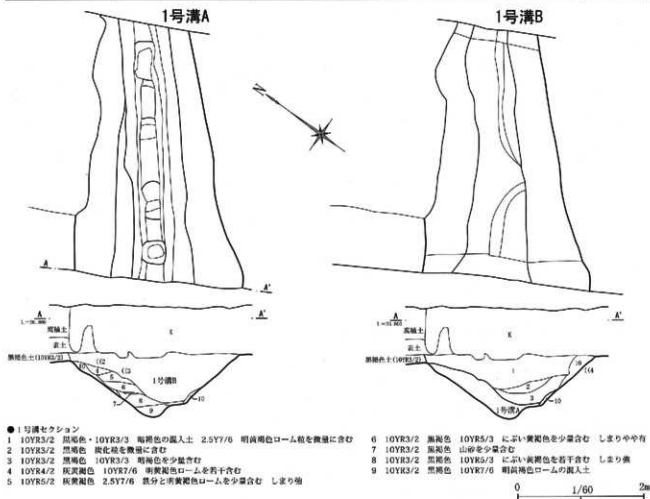


第 48 图 9 号土坑出土遗物

表13 9号土壇出土遺物観察表

(cm)

遺物番号	No.	種名	種別	口徑 底径 高さ	重量	器形の特徴	整形の特徴	色調	胎土	構成	残存率	備考
	1	SK09	かわ527	口 0.3 底 3.5 高 1.1	16.3	底面は平直、体面は直線的に丸く滑り、	口下の底面、底面は直線的に丸く滑り、口下の底面は直線的に丸く滑り、	内面 5YR5/6 外面 5YR7/6	細砂質土、灰赤色や赤土、白色砂、赤褐色の胎土。		定形	
9号土壇	2	SK09	鉄製品	釘	長33.8 幅0.2	1.1	直線折目、木質付着。					
	3	SK09	鉄製品	釘	長44.2 幅0.4	2.1	直線折目、木質付着、やや湾曲。					
	4	SK09	鉄製品	釘	長53.2 幅0.3	2.6	湾曲、木質付着。					
	5	SK09	鉄製品	釘	長53.8 幅0.25	2.2	湾曲、木質付着。					
	6	SK09	鉄製品	釘	長53.8 幅0.3	1.5	直線折目、木質付着。					
	7	SK09	鉄製品	釘	長52.4 幅0.4	1	湾曲、木質付着。					
	8	SK09	鉄製品	釘	長53.9 幅0.4	1.2	直線折目、木質付着。					
	9	SK09	鉄製品	釘	長53.6 幅0.35	1.8	先端欠損、木質付着。					
	10	SK09	鉄製品	釘	長53.0 幅0.4	1.5	直線折目、先端欠損、木質付着。					
	11	SK09	鉄製品	釘	長52.9 幅0.35	1.8	直線折目、先端欠損、木質付着。					
	12	SK09	鉄製品	釘	長52.1 幅0.3	1.2	直線折目、先端欠損、木質付着。					
	13	SK09	鉄製品	釘	長53.05 幅0.35	1.3	不明、木質付着。					
	14	SK09	鉄製品	釘	長51.7 幅0.3	1	やや湾曲、木質付着。					
	15	SK09	鉄製品	釘	長51.65 幅0.3	0.8	直線折目、木質付着、U字に湾曲。					
	16	SK09	鉄製品	釘	長52.65 幅0.35	1.2	直線折目、先端欠損、木質付着。					
	17	SK09	鉄製品	釘	長52.4 幅0.35	0.7	直線折目、先端欠損、木質付着。					
	18	SK09	鉄製品	釘	長52.5 幅0.4	0.9	直線折目、先端欠損、木質付着。					
	19	SK09	人骨	—	—	31.3	左上腕骨の中間部分の骨、薄紙様の種類から、人骨と判断され詳細の測定も実施している。長径は測定していない。年齢・性別は不明であるが、成人骨と判断される。					



第49図 1号溝A・B(道状遺構)

2号溝（道状遺構）（第50図 図版25・36）

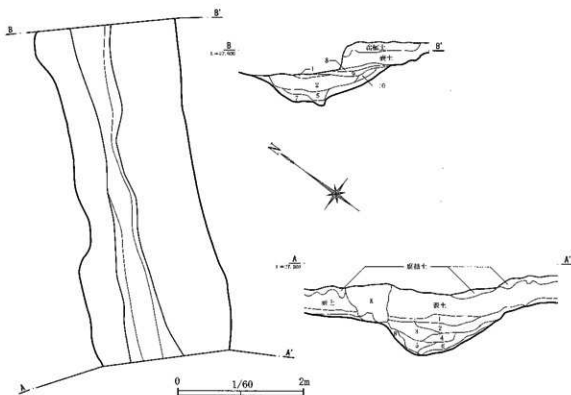
本遺構は調査区の中央やや西より1号溝の内側27m、A・B・5・6グリッドで検出された。調査範囲は長さ5.19mである。北東から南西方向に調査区を横断する形で検出されている。幅は2.25m～1.80m、深さは傾斜に沿って南西方向に向かって深くなる。南西側調査区の壁で確認面d 63cmの掘り込みを有するもので、断面の形状は1号溝同様に浅い椗研壇状になる。断面の観察では覆土は10層に分層され、自然堆積を示している。このうち2層が硬化した層である。本来溝として使用されていたものが埋没後に道として機能したものと判断される。

遺物は縄文土器片を多く出土しているものの、僅かながら近世の陶磁器が出土しており、近世以降の遺構と判断された。尚遺物の観察は表14にまとめた。

その他に遺物としては縄文土器中期、近世の内耳銅片、近世以降の燻瓦等が出土している。

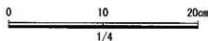
表14 2号溝出土遺物観察表

遺構番号	No.	号記	種類	形状	上層 底層 状況	位置	断面の形状	断面の特徴	色調	層位	出土	出土層	備考
2号溝	1	ND02-1	溝跡	溝	(A2) (C2.5)	32.2	幅・長さの測定。溝内が広く浅くなる。断面は浅い椗状と判断される。	溝口北側、外壁は砂土、内側は灰土。溝の深さは約1.80m。溝の幅は約2.25m。	内面 10YR/2 灰土 外面 5YR2/2 黒土	溝沿	溝沿	体積下部1/2部1/2	近世陶器



● 2号溝セクション

- 1 7.5YR3/4 暗褐色 10YR7/6 明褐色ローム層 炭化粒を若干含む しまりやや塗
- 2 7.5YR3/4 暗褐色 11-ム粘・炭化粒を若干含む しまり塗
- 3 7.5YR3/4 暗褐色 10YR7/6 明褐色ローム・炭化粒を若干含む しまり塗
- 4 10YR3/3 暗褐色 ローム粒を少量含む しまり塗
- 5 10YR3/3 暗褐色・7.5YR3/4 暗褐色の混入土 2層の暗褐色土がブロック状に裏に置かれた層 炭化粒を若干含む
- 6 10YR3/3 暗褐色・10YR4/3 にふい炭褐色・10YR7/6 明褐色11-ムブロックの5～8mmの混入土 炭化粒を若干含む
- 7 10YR3/3 暗褐色・2.5Y7/6 明褐色11-ムブロックの混入土 暗褐色が主体 炭化粒を少量含む
- 8 10YR3/3 暗褐色・2.5Y7/6 明褐色ロームブロックの混入土 明褐色ロームブロックが主体 炭化粒を少量含む
- 9 10YR3/3 暗褐色 山砂を多量に含む
- 10 10YR3/3 暗褐色 10YR6/6 明褐色11-ム粒を少量含む しまり塗



第50図 2号溝（道状遺構）・出土遺物

第5章 まとめ

1 遺跡の概観と検出された遺構の所属時期

検出された遺構は縄文時代早期炉穴3基、前期住居跡5軒(内3軒は貝塚)、中期住居跡1軒、中期土坑3基、ピット1基である。

前期の住居跡は関山段階の1式(10・12号住居跡)から、関山Ⅱ式段階(1・2・3号住居跡)まで継続性が見られる。続く黒浜式期では遺構の存在は無く、遺物もほとんど検出されていない。貝塚を形成する時期も関山期に限られている。貝塚における貝の組成は住居跡で述べたとおり、1・2号住居跡が関山Ⅱ式段階で、多種の貝を採取する傾向が見られ、これよりも古い同じ関山Ⅱ式期の3号住居跡ではハイ貝とカキを主体とする、限られた種類の貝組成である。同一型式内にもかかわらず明確に貝の組成の変化が見られることは、関山Ⅱ式期に自然環境の転換期があったことを裏付けるものであろう。

前期後半から中期前半では遺構の存在は確認されていない。しかしながら、五領ヶ台式土器に平行する粟島台式や、下小野式土器は比較的まとまりを見せている。近隣に遺構の存在が想定される。中期中英では15号住居跡が阿玉台式期に所属する住居跡で、本時期の集落構成を考えると、舌状台地の縁辺に集落を作り、集落に取り囲まれる様に土抗群が配される場合がいくつかの遺跡で知られる。本住居跡も谷の縁辺に位置する住居跡で台地の基部側に土坑の存在が想定できる。さらに中期後半になるとフラスコピットが多数見られるようになる。中期後半から末葉の遺構・遺物はほとんど検出されていない。

縄文後期から晩期にかけての資料は僅かながら出土している。特に堀之内1式新段階の土器は一定量の出土を見た。しかしながら遺構は検出されていない。また晩期の遺構も確認できていないが、遺構外出土遺物の中に僅かに2片のみ晩期と思われる資料が存在した。そのうち小型の壺形土器の肩部の細片には、浮線網状文が見られ、大洞A式土器と判断した。僅か1片であるが資料的には見逃せないものであろう。

弥生時代の遺構は検出されていない。遺物は1点のみ掲載したが、時間的にも明確なものではなく、弥生時代において本地域に人々の足跡を見出すことはできなかった。

古墳時代では住居跡4軒、古墳2基、方形周溝墓1基、土坑2基、ピット1基である。住居跡及び方形周溝墓からはいずれも古式土器が出土しており、古墳時代前期の遺構と判断された。各住居跡の概要でも述べたが、本期の遺構群としては遺物量が極めて少なく、数点の遺物が検出されたに留まっている。方形周溝墓の存在を考えるならば、これらの住居跡は喪の為の仮の住居であった可能性もある。筆者はかつて、群馬県高崎市倉賀野万福寺遺跡において、同様の遺構を調査したが、継続性のない住居跡が、ほぼ同時期と判断される方形周溝墓によって次々に破壊されている状況を確認している。古墳時代中期では2号古墳の周溝内より高坏の脚部が1点出土している。中位に膨らみを有す柱状の脚部で、端部が水平に近く開くもので、古式の上飾器とはやや時期が下るものと判断される。さらに、滑石製模造品の有孔円板が1点検出されており、遺構は確認できなかったものの、周辺に古墳時代中期末から古墳時代後期前葉にかかる時期の遺構の存在が想定される。古墳時代後期の鬼高段階の土器資料は検出されていない。

奈良・平安時代の遺構・遺物は検出されなかった。

中世は上坑が2基検出されている。6号土坑では宝篋印塔、五輪塔、が出土しており、中世の墓である。9号土坑も墓であったが、供伴した小形のかわけから中世末葉16世紀の所産と判断される。かわらけの編年については、筑西市の炭焼戸遺跡において茨城県教育財団の調査資料をもとに想定したものであるが、小形で糸切が行われ、体部の立ち上がりが高いタイプは、本時期に共通するものである。

近世では道状遺構2条が検出されている。1・2号溝(道状遺構)共に、おそらく中世から活用されていた道であろう。覆土中には近世の染付や瀬戸美濃の碗などが出土している。中世末の墓域との関係も想定できる。出土遺物が近世の遺物に限られたことから、近世の遺構と判断したが、遺跡の環境から判断しても、中世末にすでに道として開削されていた可能性がある。

2 縄文前期の上器

本遺跡において検出された遺構のうち貝を覆土中に混入する所謂住居内貝塚は3軒であった。これらの遺構はいずれも前期関山式土器を出土するもので、10・12号住居跡も含め前期の良好な資料が得られている。第3群第1類と第2類に分類した土器群は、関山I式と関山II式に分けられる。関山I式土器の特徴は第3章第1節で詳述したので割愛するが、茨城県内に於ける霞ヶ浦周辺の遺跡としては極めて良好な資料を得ることができている。特に二木段階直後と思われる古式の関山I段階の資料には梯子状の文様をモチーフとする口縁部文様帯がやや幅広く設けられ、円形の貼付文が主体をなす。器種でも浅鉢や小形のミニチュア土器の存在等該期の資料としてはあまり知られていない資料の出土をみた。今後該期の研究に於いて、指標となる資料と想定される。

3 翡翠製玉について

検出された翡翠製玉について福足的な見解を述べ、本項のまとめとする。翡翠は糸魚川盆地流域にその産地がほぼ限られる。同地域から、那珂川下流域には大量の大珠が持ち込まれ、その研究成果も多数報告されている。(2003 瓦吹、2006・2007 上野) 縄文時代に於いて威信材として重要視された翡翠と琥珀が北陸地域に於ける第1の威信材群に対し、関東地方に於ける第1の威信材翡翠が交換されその分布を広げていったと栗島(2007 栗島)は推論し、威信材の交換とその分布のあり方に注目している。一方で上野修一は、翡翠が意識的に焼かれたり割られたりすることにより分割をもって、威信材が同一種族間での供有を行った可能性を指摘している。今回本遺跡で確認調査時に出土した翡翠の大珠は、意識的か偶発的かは不明であるが(打点を有さない節理面からの破損)破損している。ルーペで表面観察を行うと破損後、破断面は通常鋭いエッジとなるが、全ての破断面は研磨によって丸く加工されている。さらに表面の研磨痕は剥落して細かな粉状化が観察されることより、研磨の後に焼かれた可能性がある。これらの資料は関東地方から東北地方にかけて、中期中葉から後期に至る縄文時代の翡翠大珠に多く見られる現象として報告されている。上野の意見を追認する形になるが、このような資料が検出されたことは、本遺跡が規模の大きな中期集落の一部であることを示している。

蛍光灯の光にかざすとあたかもガラス細工のように半透明の緑色が浮き上がる。表面は粉を吹いたように白濁しているものの、本来は鑑賞の良質な翡翠であることがわかる。威信材としての本遺物がこの地に運ばれた状況は知る由もないが、遠く糸魚川よりこの地にもたらされた大珠は、やがて威信材として血族間で分割され、ある時は栗島が指摘する部族間の結束に欠かせない威信材として、また上野が指摘するように石棒や石皿のように割られた後に火にかけられた可能性が考えられる。

4 古墳時代前期の遺構

本遺跡の南東凡そ500mの同一台地上に存在する弁才天遺跡・北西原遺跡では、100軒を越す古墳前期の大規模な集落が展開していることが報告されている。当該期に於ける墳墓は北西原遺跡で方形周溝墓が1基確認されている。この遺跡から僅かの距離に近接する本遺跡でも古墳時代前期の集落が、ややまとまって検出されている。調査範囲が道路部分の幅6mと狭い範囲であったために、全体を確認できた訳ではないが、方形周溝墓の検出もあり、該期の集落として、手賀沼西岸地域の状況と似た状況が見いだせる。霞ヶ浦西岸地域の台地上に展開する集落と、手賀沼周辺に展開する集落の共通点は、水運によって結ばれる。同じく千葉県や茨城県

下に於いても太平洋に面する部分に比較的大規模な弥生後期から古墳前期の集落の展開が知られており、全て水運を切り離して考えることはできない。前期大型古墳の存在もこの位置に多く知られている。4～5世紀の東関東を考える上で重要な要素と言えよう。出土遺物では、S字口縁の台付甕の出土が見られず、栃木県や群馬県の石田川式の影響よりも南関東的な様相が強い遺物が出上している点も興味深い。

参考・引用文献

- 山内清男 1979『日本先史上器の編年』昭和36年京都大学学位請求論文 先史考古学会
山内清男 1967『日本先史土器図鑑』先史考古学会
立教大学考古学研究会 1975『新田野貝塚—千葉県夷隅郡大原町所在の縄文時代貝塚—
埼玉県教育委員会 1975『関山貝塚』埼玉県埋蔵文化財調査報告 第3集
埼玉県庄和町風早遺跡調査会 1979『風早遺跡』
町田市田中谷ノ遺跡調査会 1976『田中谷戸遺跡』
篠原 正 1978『北総台地における縄文時代早期後半について』『千葉県の歴史』17号
銃子市教育委員会 1991『粟島台遺跡発掘調査報告書』
神奈川県教育委員会 1976『草山遺跡』神奈川県埋蔵文化財調査報告 11
小林達雄 2008『総覽 縄文土器』小林達雄先生古希記念企画
中村孝三郎・小片保 1964『室谷洞窟』長岡市立科学博物館
西村正衛 1970『千葉県小見川町阿玉台貝塚—東部関東における縄文中・後期文化の研究その二—
藤本彌城 1977『那珂川下流の石器時代研究1』
土浦市教育委員会 2006『弁才天遺跡 北西原遺跡(第5次調査)』…土浦市総合運動公園建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第4集—
『神明遺跡』(第1次・2次)土浦市総合運動公園建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第5集 土浦市教育委員会 1998
増田精一『武者塚古墳』茨城県新治村教育委員会 1986
横浜山歴史博物館(財)横浜市ふるさと歴史財団 埋蔵文化財センター 1996『縄文時代草創期』資料集
土浦市遺跡調査会 2000『権現前遺跡』土浦市教育委員会
西村正衛 1972『阿玉台式土器編年の研究の概要—利根川下流域を中心として—』早稲田大学大学院文学研究科紀要18号
林田利之 1999『吉見台遺跡A地点』佐倉市 印旛郡市文化財センター
篠原 正 1978『新橋遺跡における阿玉台式土器の竹管文と施文具の研究』『新橋遺跡発掘調査報告』
上守秀明 2008『柏北部東地区縄文前期資料—柏市駒形遺跡・宮上見遺跡』…千葉県縄文研究会第38回例会(見学会資料)
上守秀明 2009『(統) 結節回転による施文効果』千葉県縄文研究会第39回レジュメ
小林修・高橋清文 2005『見立十二塚遺跡I・II』群馬県歴史多摩赤城村教育委員会(有)毛野考古学研究所
縄文セミナーの会 2009『中期初頭の再検討』第22回縄文セミナー
斉藤弘道 1991『茨城県の縄文土器』埋蔵文化財部研修会資料
上野修一 2007『焼かれた玉—硬玉製大珠の二次的変形—』『縄文時代の社会と玉』日本玉文化研究会第5回シンポジウム栃木大会資料集
栗島義明 2007『威仁材流石の社会的形態—硬玉製大珠から探る交換形態—』同上
『縄文セミナーの会 2006『前期前葉の再検討』19回 縄文セミナー
伊庭彰一 1988『谷津台貝塚』千葉県遺跡調査会 山武考古学研究所
大賀 健 1978『倉賀野万福寺遺跡』高崎市教育委員会 山武考古学研究所
大賀 健 2008『呼塚遺跡第10次調査報告書』有限会社勾玉工房 Mogi
小林紀男 1980『栃木県における五稜式土器の研究』『宇大史学』2号

表 15 1~3号貝塚貝殻長幅別分布表

ハイガイ

cm	1号貝塚				2号貝塚				3号貝塚			
	A		B		一括		一括		一括		一括	
	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左
2.2	1	1	3	3								
2.4	2	3	2	3	11	4	1	1				
2.6	6	7	3	6	51	23	7	9				
2.8	4	5	5	3	62	12	10	6				
3	1	8	6	27	9	12	12					
3.2	4	4	4	3	39	8	20	16				
3.4	7	6	8	8	32	6	33	28				
3.6	5	5	15	12	25	6	31	32				
3.8	4	4	8	7	23	3	28	11				
4	4	4	1	15	2	3	2					
4.2	7	3	2	8	3	1	3					
4.4	2	6	2	3	4	1	2					
4.6	1	1	1	1	7	1	2					
4.8	1	1	2	2	4		1					
5	1				2	1	1					
5.2	1				1							
5.4	1				1							
5.6	1				2							
5.8			1									
6												
殻頂部数	5	5	5	4	22	13	101	81				
計	53	63	61	64	339	90	250	206				

オキシジミ

cm	1号貝塚				2号貝塚				3号貝塚			
	A		B		一括		一括		一括		一括	
	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左
2.2												
2.4												
2.6												
2.8	1				1							
3												
3.2												
3.4												
3.6	1	1										
3.8	3	1										
4	1	1	2		1		1	1				
4.2	4	6	1	2	2	1	1	1				
4.4	1											
4.6	2		2	1			1	1	1			
4.8	2											
5												
5.2												
5.4												
5.6												
5.8												
6												
殻頂部数	5	4	2	6	6	4	1					
計	16	16	8	9	9	8	3	2				

ハマグリ

cm	1号貝塚				2号貝塚				3号貝塚			
	A		B		一括		一括		一括		一括	
	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左
2.2												
2.4												
2.6		1		1								
2.8		1	2									
3				1		1	1					
3.2												
3.4												
3.6	1											
3.8		1										
4	1	1		1	1	1						
4.2	1	3			1							
4.4												
4.6		1										
4.8												
5	1	1										
5.2												
5.4	1	1										
5.6												
5.8												
6												
殻頂部数	3	5	3	6	5		1					
計	7	14	6	5	13	0	1					

シナ目

cm	1号貝塚				2号貝塚				3号貝塚			
	A		B		一括		一括		一括		一括	
	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左
1.2												
1.4												
1.6												
1.8												
2												
2.2												
2.4												
2.6												
2.8												
3												
3.2												
3.4												
3.6												
3.8												
4												
4.2												
4.4												
4.6												
4.8												
5												
5.2												
5.4												
5.6												
5.8												
6												
殻頂部数	6											
計	6	0	0	0	0	2	1	0				

ヤマシジミ

cm	1号貝塚				2号貝塚				3号貝塚			
	A		B		一括		一括		一括		一括	
	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左
1.4												
1.6												
1.8												
2												
2.2												
2.4												
2.6												
2.8												
3												
3.2												
3.4												
3.6												
3.8												
4												
4.2												
4.4												
4.6												
4.8												
5												
5.2												
5.4												
5.6												
5.8												
6												
殻頂部数												
計	0	0	4	3	27	35	1	0				

サルボウ

cm	1号貝塚				2号貝塚				3号貝塚			
	A		B		一括		一括		一括		一括	
	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左
2.2												
2.4												
2.6												
2.8												
3												
3.2												
3.4												
3.6												
3.8												
4												
4.2												
4.4												
4.6												
4.8												
5												
5.2												
5.4												
5.6												
5.8												
6												
殻頂部数												
計	0	0	0	0	3	1	0	1				

カキ

cm	1号貝塚				2号貝塚				3号貝塚			
	A		B		一括		一括		一括		一括	
	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左
1.8	1	1	1									
2	1	1										
2.2	3	2	1									
2.4	5	3										
2.6	4	3	2									
2.8	6	3	2									
3	3	3	3									
3.2	3	4										
3.4	3	3	1									
3.6	3	2	2									
3.8	1	3	2									
4	3	2										
4.2	1	1	1									
4.4	1											
4.6	2											
4.8	1	2										
5												
5.2	3	1		</								

写 真 图 版



1. 赤弥堂遺跡東区全景航空写真



1. 遺跡調査前全景



2. 1・2・3号住居跡(貝塚)全景



1. 機材搬入状況



2. トイレ設置状況



3. テント設置状況



4. 遺構確認作業状況



5. 遺構検出状況 E→



1. 遺構確認状況中央部分



2. 同 中央部分から西側



1. 遺構確認狀況西側



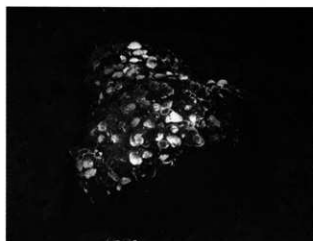
2. 基本層序中央部南壁



1. 1号住居跡(1号貝塚)貝層検出状況



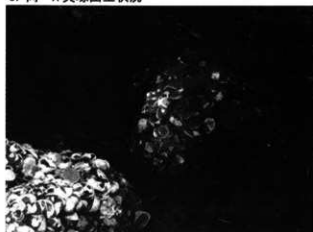
2. 同 セクション N→



3. 同 A貝塚出土状況



4. 同 A~D貝塚出土状況



5. 同 D貝層出土状況



1. 2・3号住居跡 (2・3号貝塚)



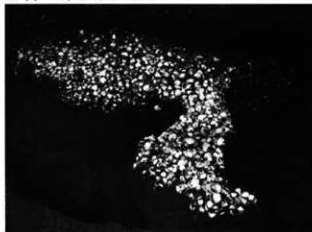
2. 同 セクション W←



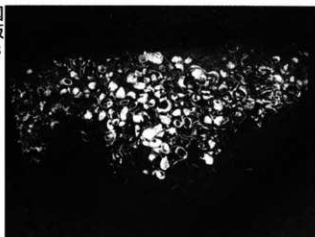
3. 同 セクション N←



4. 2号住居跡 A・B貝塚出土状況



5. 同 B貝塚出土状況



1. 2号住居跡A貝塚出土状況



2. 3号住居跡貝塚出土状況



3. 同 ピットセクション N→



4. 4号住居跡セクション E→



5. 4号住居跡全景



1. 7・14号住居跡・8号土坑完掘全景



2. 7号住居跡セクション E→



3. 8号土坑セクション W→



4. 9号住居跡セクション E→



5. 同 炉



1. 9号住居跡完掘全景



2. 10号住居跡完掘全景



1. 10号住居跡セクション E→



2. 同 遺物出土状況全景



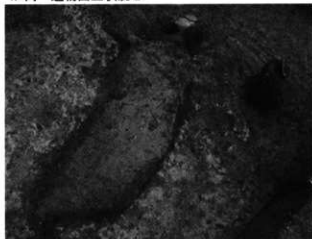
3. 同 遺物出土状況 1



4. 同 遺物出土状況 2



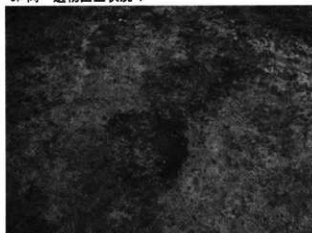
5. 同 遺物出土状況 3



6. 同 遺物出土状況 4



7. 同 炉セクション S→



8. 同 炉完掘状況



1. 111号住居跡全景



2. 同 セクション



3. 同 ビット1セクション S→



4. 同 ビット3・炉セクション S→



5. 同 ビット4セクション W→



1. 12号住居跡全景



2. 同 セクション



3. 13号住居跡セクション1



4. 同 セクション2



5. 同 炉セクション



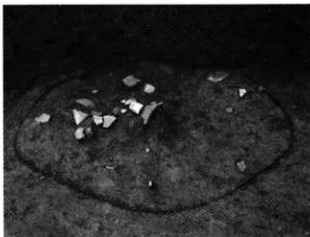
1. 13号住居跡全景



2. 14号住居跡全景



1. 14号住居跡ピット1セクション



2. 15号住居跡遺物出土状況



3. 15号住居跡・14号土坑全景



4. 同 セクション



5. 同 調査風景



1. 1号古墳全景



2. 同 セクション東側



3. 同 セクション西側



4. 同 セクション全体



5. 同 調査風景



1. 2号古墳全景 航空写真



2. 同 東側セクション



3. 同 西側セクション



4. 同 完掘 E→



5. 同 航空写真撮影実施状況



1. 1号方形周溝基全景



2. 同 南東セクション



3. 同 南西セクション



4. 同 北西セクション



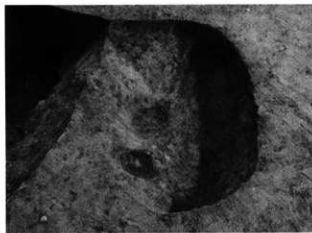
5. 同 遺物出土状況



1. 1・2号土坑全景



4. 3号土坑セクション



5. 同 完掘全景



1. 4号土坑



2. 5号土坑



3. 6号土坑確認状況（石塔検出状況）



4. 同 セクション S→



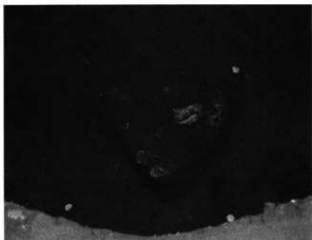
5. 同 人骨出土状況



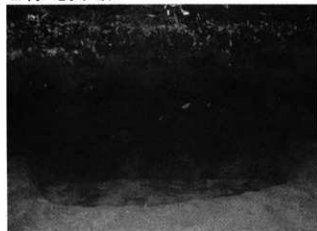
1. 9号土壇



2. 同 セクション



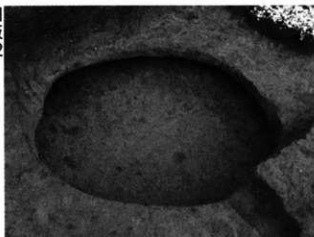
3. 同 人骨出土状況近景



4. 11号土坑セクション S→



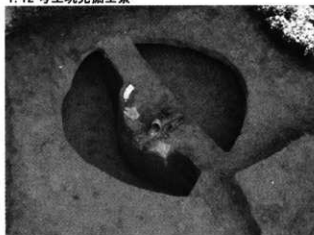
5. 同 完掘全景 N→



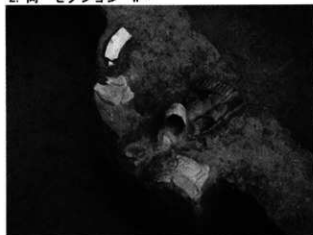
1. 12号土坑完掘全景



2. 同 セクション W→



3. 同 遺物出土状況



4. 同 遺物出土状況近景



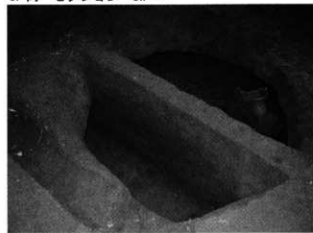
5. 13号土坑完掘全景



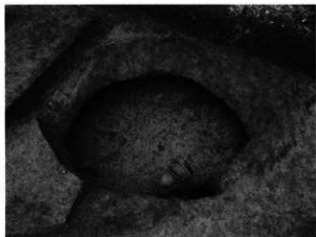
6. 同 セクション SW→



7. 同 遺物出土状況



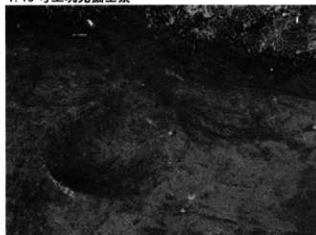
8. 15号土坑セクション E→



1. 15号土坑完掘全景



2. 同 遺物出土状況



3. 1・2号炉セクション



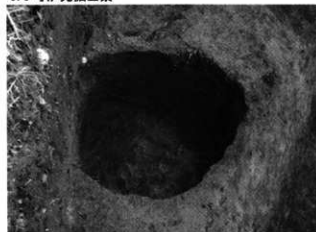
4. 同 完掘全景



5. 3号炉完掘全景



6. 1号ビット完掘全景



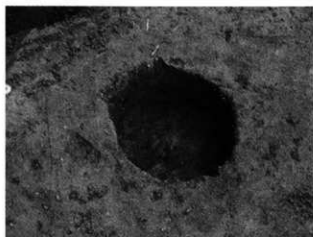
7. 2号ビット完掘全景



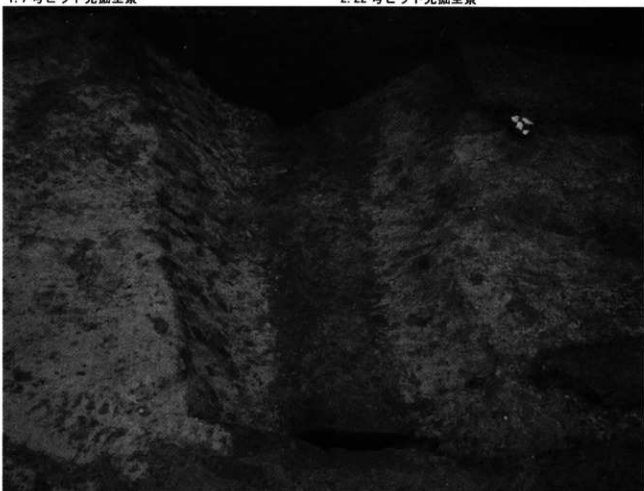
8. 6号ビット完掘全景



1. 7号ピット完掘全景



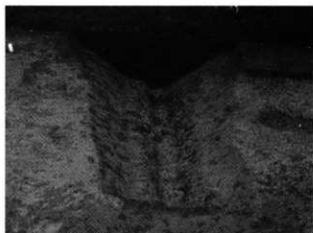
2. 22号ピット完掘全景



3. 1号溝（道状遺構）硬化面



4. 同 セクション N→



5. 同 完掘全景



1. 2号溝（道状遺構）全景



2. 同 セクション1 N→



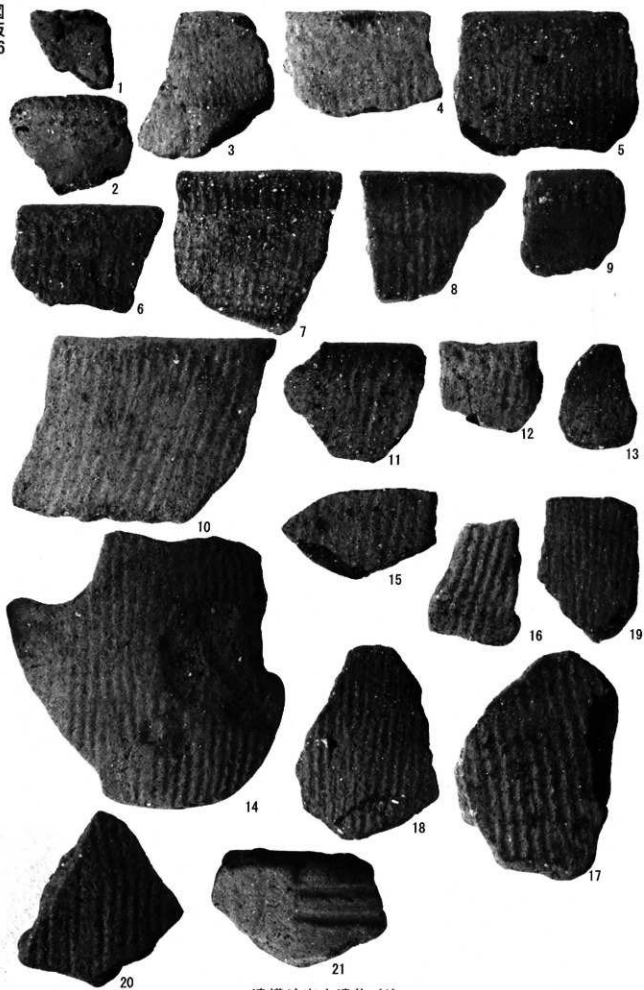
3. 同 セクション2 S→



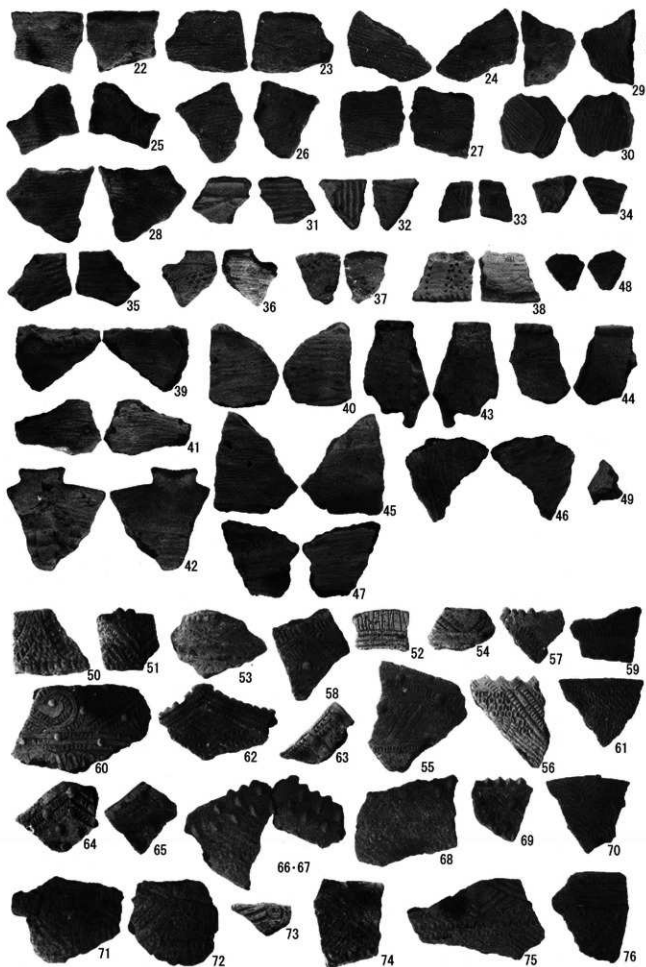
4. 3号溝セクション



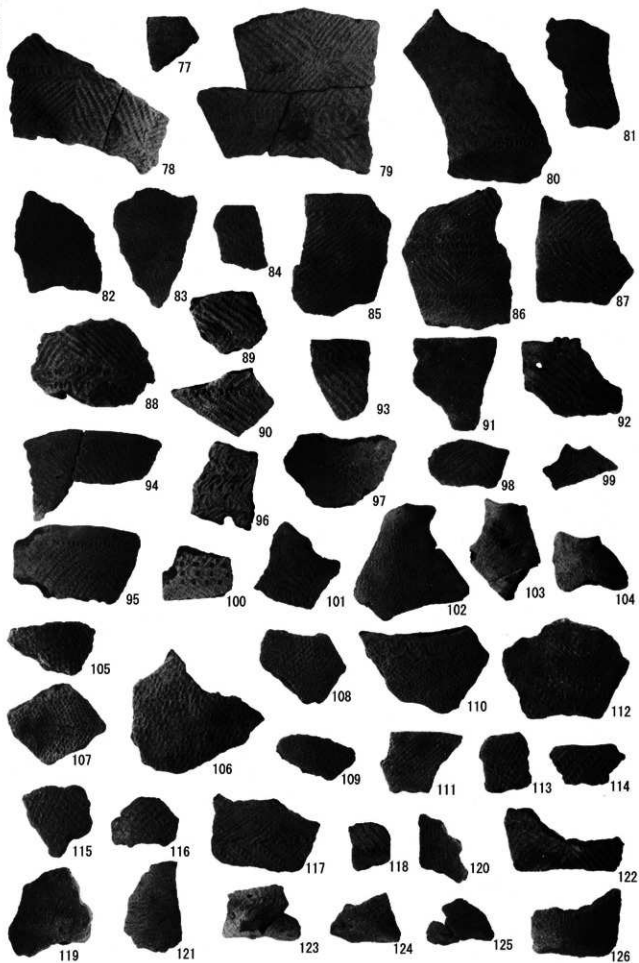
5. 作業風景（杭打設状況）



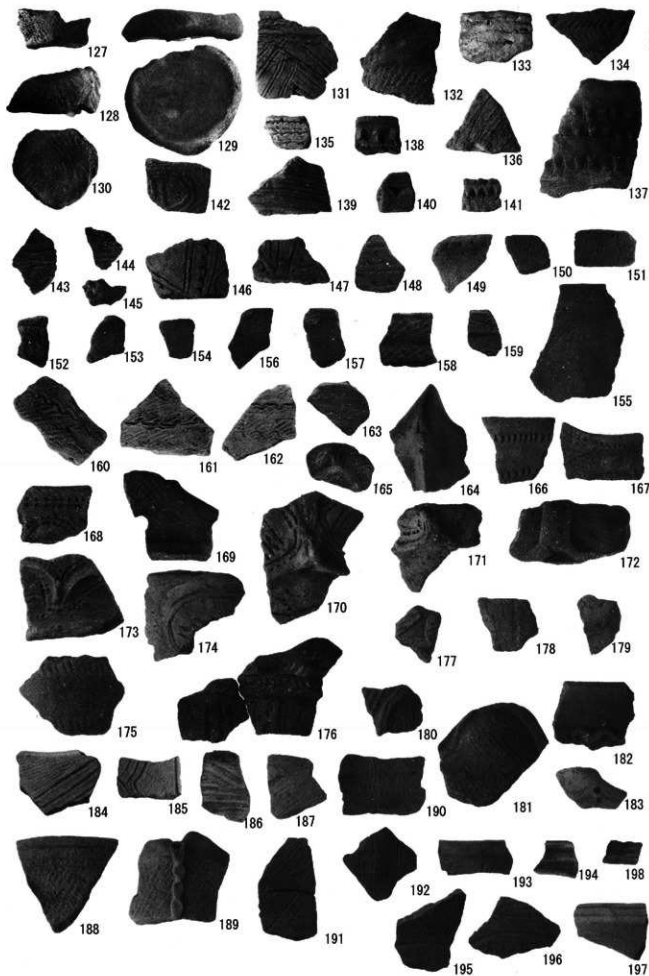
遺構外出土遺物 (1)



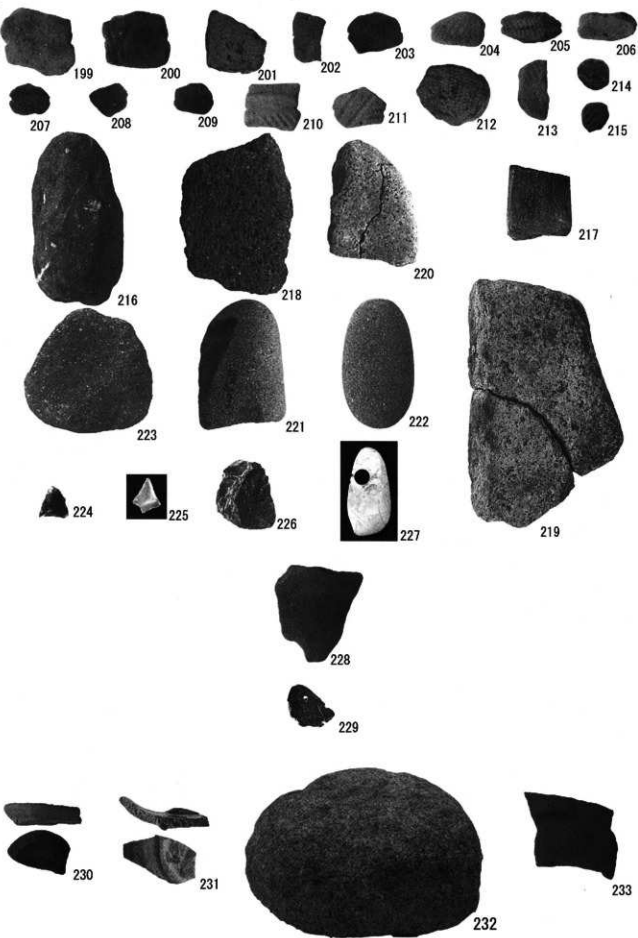
遺構外出土遺物 (2)



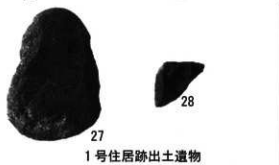
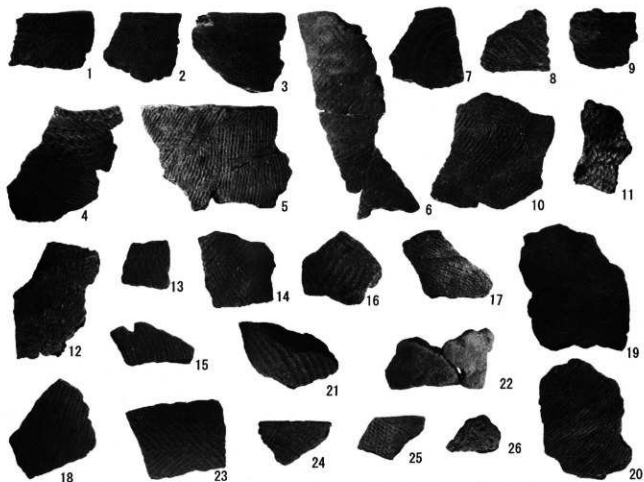
遺構外出土遺物 (3)



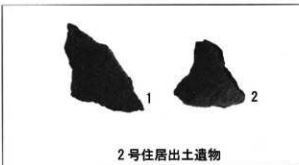
遺構外出土遺物 (4)



遺構外出土遺物 (5)



1号住居跡出土遺物



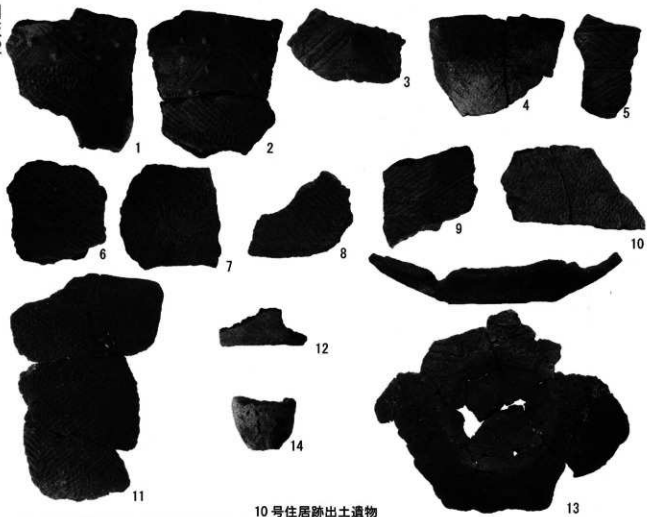
2号住居出土遺物



3号住居跡出土遺物

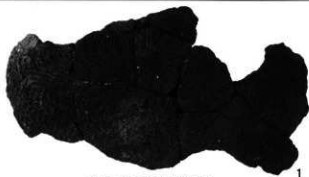


遺構出土遺物 (1)



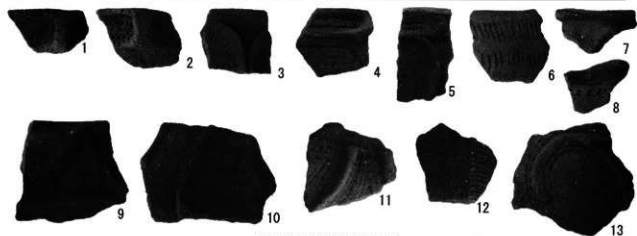
10号住居跡出土遺物

13



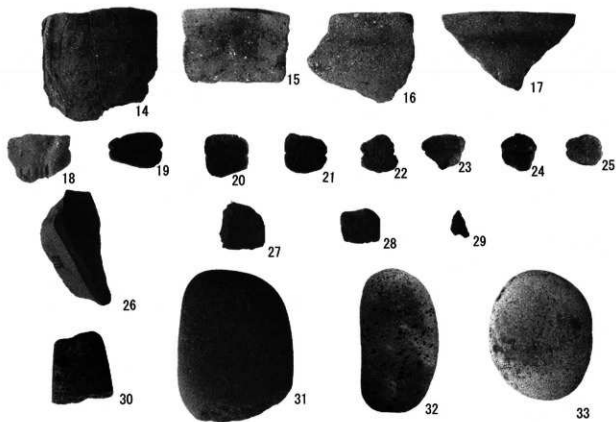
12号住居跡出土遺物

1



15号住居跡出土遺物(1)

遺構出土遺物(2)



15号住居跡出土遺物(2)

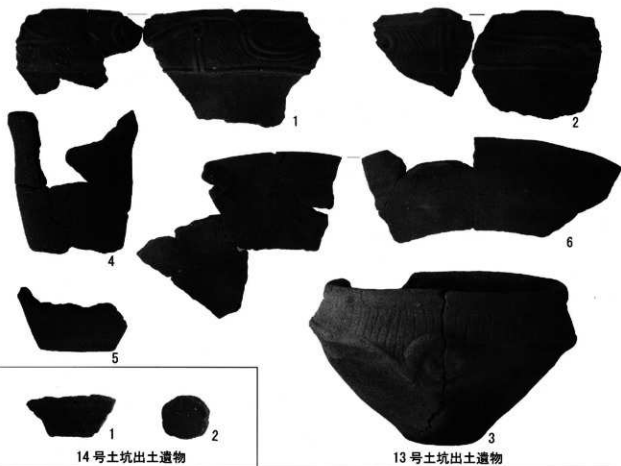


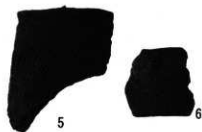
3号土坑出土遺物



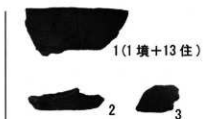
12号土坑出土遺物

遺構出土遺物(3)





15号土坑出土遺物 (2)



1号古墳出土遺物



2号古墳出土遺物



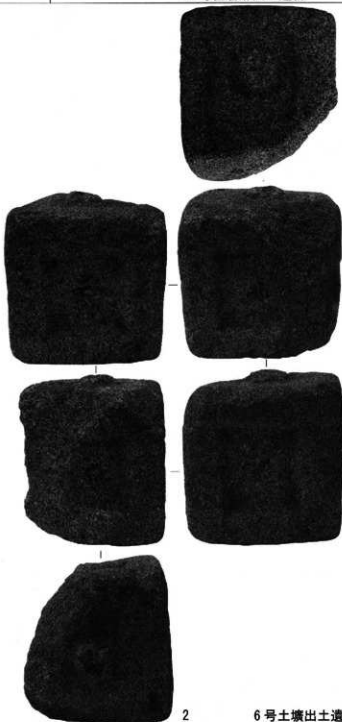
1号方形周溝墓



11号住居跡出土遺物

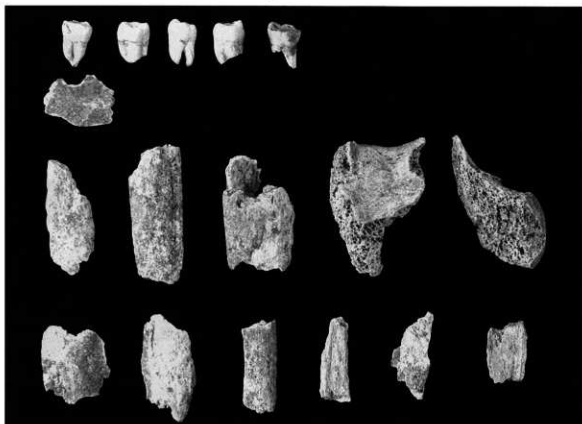


10号土坑出土遺物

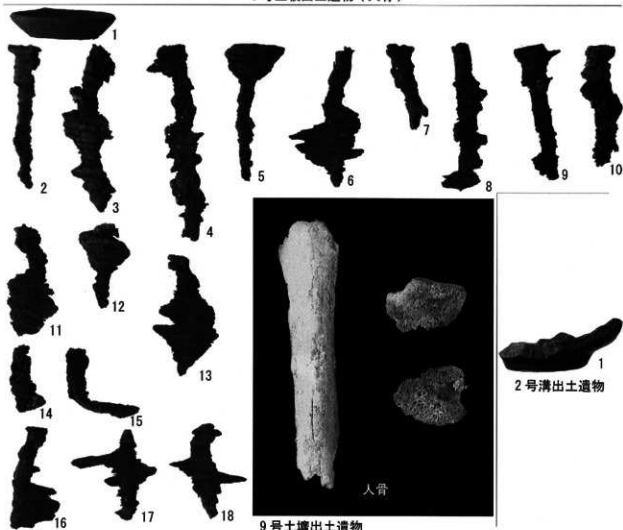


遺構出土遺物 (5)

6号土壙出土遺物



6号土壤出土遺物(人骨)



9号土壤出土遺物
遺構出土遺物(6)

2号溝出土遺物

人骨

報告書抄録

ふりがな	あかみどういせき(ひがしちく)						
番 名	赤弥堂遺跡(東地区)						
副 告 名	-県営畑地帯総合整備事業(担い手支援型)- 坂田地区 埋蔵文化財発掘調査報告書						
巻 次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編 著 者 名	大賀 健 関口 清 黒澤 春彦						
編 集 機 関	有限会社 勾玉工房Mogi						
所 在 地	〒286-0203 千葉県富里市久能 238-100 TEL0476(92)0658						
発 行 年 月 日	西暦2009年3月31日						
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
赤弥堂遺跡(東地区)	赤弥堂遺跡(東地区) 富里市久能1丁目350-1	市町村 道庁番号	° 〃 〃	° 〃 〃	20080901 ～ 20081111	871㎡	県営畑地帯総合整備事業 (担い手支援型)
0865	003	36° 08' 19"	147° 17' 32"				
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
赤弥堂遺跡(東地区)	集落	縄文時代	竪穴式住跡(瓦葺) 溝 土坑 ピット	陶文早期(伊丹式・多式) 縄文前期(横山式・黒山式・厚島角式・十三番橋式) 縄文中期(河内台式・正領台台式・羽瀬利E式) 縄文後期(国分内式・大洞A式) 石製品(石槌・打製石斧・石直刀など)			
		古墳時代	色鉛 古墳 方隅溝溝 土坑 ピット 土塚	古墳前期(土師器・滑石製埴輪品) 古墳中期(土師器) 古墳後期(滑石製埴輪品)			
	基 礎	十 世		千土(笠笠印等・玉輪等・かわらけ)			

赤 弥 堂 遺 跡 (東 地 区)	
- 県営畑地帯総合整備事業(担い手支援型) -	
坂田地区 埋蔵文化財発掘調査報告書	
平成21年3月17日発行	
編 集 ・ 発 行	土浦市教育委員会 〒300-4115 茨城県土浦市藤沢975番地 TEL.029(826)1111
	有限会社: 勾玉工房Mogi 〒286-0203 千葉県富里市久能238-100 TEL.0476(92)0658
印 刷	株式会社: エイティー 〒289-1115 千葉県八街市八街3211 TEL.043(444)2024